

図43 A区SK-201・202、SD-208出土遺物実測図（縮尺1/3）

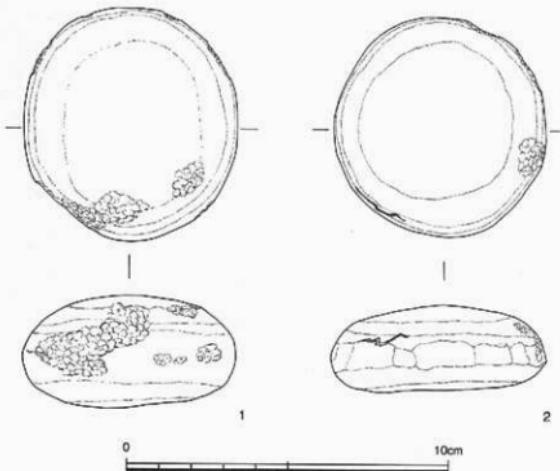


図44 A区 SK-201出土遺物
実測図 (縮尺2/3)

れる。下半部には、細砂混じりの灰黄褐色シルトの③層、径1mm前後的小砾がまばらに混じる灰黄褐色シルトの④層、細砂が多く混じる褐灰色砂質シルトの⑤層がみられる(図42-5)。

このように、SD-208の埋土下半部は、細砂を主体とする砂質土が堆積したり、全体に砂礫が混じるが、多くはシルト質土が堆積する。前述した溝底の標高差が東西でほとんどないことを考え合わせ、當時流水があるのではなく、一時的に水が流れる環境を推定できる。

また、DW-44区では、溝底に貼り付いた状態で炭化物片混じりの灰がブロック状に集積していた。灰集積は溝の南壁から次第に厚くなり、さらに東半部に炭化物や灰が集中し、西側ほど土混じりとなる。溝の南側から一気に投棄された灰が流水によって一部流されたものと考えられる(図版13-1)。

SD-208の出土遺物には、土師器の皿(図43-3~6・27・29・30・32~34・45・51)、壺(10~12・28・49)、塊(7~9・13~17・31・35~41・46~48・52)、柱状高台土器(53)、黒色土器塊(18~26・42~44・50)、鉄器(図45-3・4)などの遺物がある。一部、古墳後期の須恵器壺(54)、弥生土器の甕(55~57)、繩文土器の深鉢(58・59)などが混じるが、これらは混入品である。これらの遺物の多くは、DV・DW-44

区で集中して出土している。とりわけ、図43-27の土師器皿はDW-44区の溝底、28~31の土師器皿・壺・塊の4点はDW-44区灰集積内から出土し、SD-208が機能していた時期に埋積した遺物である。また、17はDY-45区西半部SX-121、31はDW-44区SD-208埋土から出土した破片と接合する。

土師器皿の中で、図43-5・29・30・45は、外底面を回転ヘラ切り離しする。30の外底面には、切り離しによる粘土のよれが生じている。これらに対して、27・34の外底面には、回転糸切り痕が残る。土師器皿の図43-7・8・35・37・49は、薄手のつくりで、丁寧に仕上げられる。35の口縁部内面には部分的に赤彩の痕跡が残る。49の外底面は回転ヘラ切り離し。12は、厚手づくりで、外底面は荒れてはいるが、回転ヘラ切り離しの可能性が高い。28の外底面には、回転ヘラ切り離しの後に板目圧痕がつく。37・39・45・49は、二次的な火熱を受け、器面が赤変する。12・13・28・37・41・49・52の器皿の芯部には、淡黒色・灰黒色・淡灰色の黒化層が残る。

黒色土器はいずれも内墨の壺である。18は厚手のつくり。22の高台内側には、帯状に黒色顔料が残る。23の外底面は、ナデ仕上げされるが、回転ヘラ切り離しの痕が小さな段で残る。

この他、刀子と考えられる鉄器(図45-3)や、環

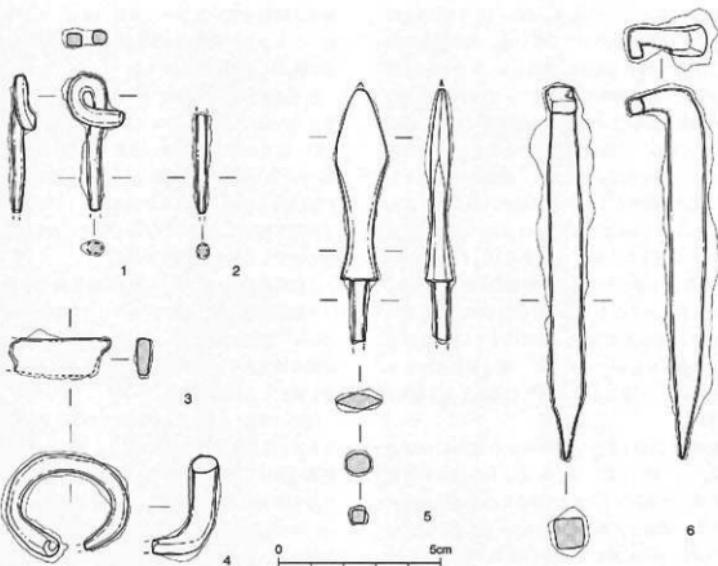


図45 A区 SK-201・SD-208・209出土遺物実測図（縮尺2/3）

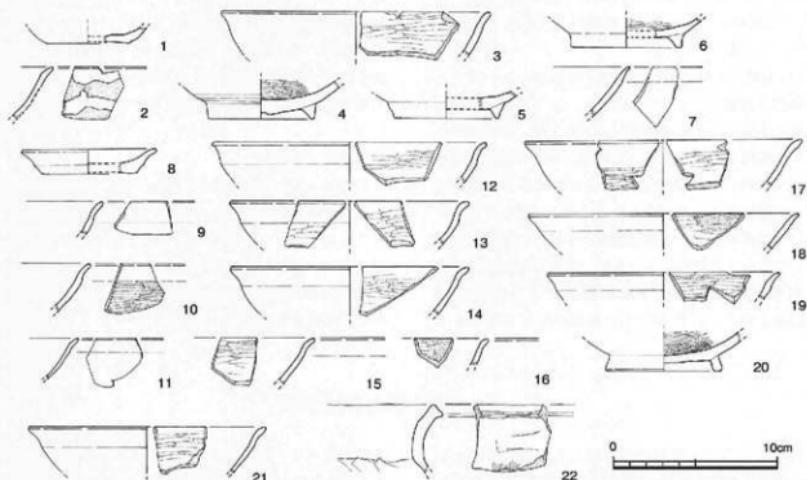


図46 A区 SD-209出土遺物実測図（縮尺1/3）

状の鉄製品（図45-4）がある。DU・DV-44区の北側壁沿いの埋土①層から出土している。3は板状の鉄器破片である。残存長3.1cm、幅1.1cm、厚さ4mm。断面は長方形で、幅と厚みから考えて、刀子や鎌などの柄部の可能性が高い。4は環状の鉄製品である。外径3.7×3.1cmを測る。一端が断面U字を呈し、環の内面に合わせ目の痕跡が残ることから、幅の狭い鉄板を管状に折り曲げて棒状とし、さらに環状に曲げたと考えられる。一端は1.1cmほど直交方向に曲げる。断面は折り曲げが不完全なためU字形を呈し、4.5×4mmを測る。環状部分は途中から断面が中空の楕円形を呈し、もう一端は細く薄くなる。環状に曲げられた中ほどでは断面は8×5mmを測るが、端部は6×1.5mmと細くなる。環状部分の径がやや大きく、細く華奢なつくりであるが、帶の引手壺になる可能性を考えておきたい。

SD-209

SD-208北側ではほぼ平行して南東から北西にのびる溝である。SD-208に切られ、西端はDX-45区で途切れる。東側は調査区外にのび、検出した総延長は29mほどである。溝幅は、東半部のDR～DT-43・44区では1.15～1.8m、中央部のDU～DW-44・45区では1.7～2.45m、西端付近では1m以下となって途切れる。溝底は凹凸がかなりあるが、中央部DU-44区で標高は25.92m、DV-44・45区は25.92m、DW-44・45区は25.94～25.98m、西端のDX-45区は25.97mと、標高差がほとんどない。

DU-44区とDV・DW-44・45区境界部の2ヶ所で土層断面を観察した。DU-44区では、上半に径2mm前後の礫が少量混じる灰黄褐色シルトの①層、砂礫が少なくやや粘性をおびるにぶい黄褐色シルトの②層が堆積する（図42-6）。DV・DW-44・45区境界部では、上部に砂粒や径1mmの礫が混じるオリーブ褐色砂質シルトの①層がみられ、下半は砂礫がまばらに混じり粘性をおびる暗灰黄色シルトの②層、溝底には細砂混じりの暗灰黄色シルトの③層が堆積する（図42-5）。SD-208と同じく、埋土下間に砂礫が混じるがシルト

質土が堆積していること、溝底の標高に大きな違いがないことから、當時流水があるのではなく、一時的に水が流れる環境を推定できる。

出土遺物には、土師器の皿（図46-1・8）や壺（2・9～11・21）、黒色土器壺（3～6・12～20）、瓦器壺（7）、弥生土器の甕（22）、鐵鉗（図45-5）、鉄釘（図45-6）などがある。図46-2・4・5は埋土上部、8～20は埋土中部、21および図45-5・6の鉄器は埋土下部から出土している。20はDV-45区SS-20耕作土層から出土した破片と接合する。

土師器皿の図46-1は、外底面は回転糸切り離しか?

土師器壺の2は、薄でのつくりで、胎土も精選されている。黒色土器は3～5・12～20が内黒、6のみが両黒の甕である。4・20の外底面中央には回転糸切り離し痕らしき痕跡が残る。

図45-5は、全長7.8cmの鐵鉗である。鋒部は膨らみをもち、鎌身間に緩やかに反転し、頭部は一旦くびれ、茎間に向けて撥状に広がる。茎間は四面に段をつける。鋒部の断面は菱形に近いレンズ状を呈し、最大幅1.6cm、厚さ4.5mmを測る。頭部の断面は両側に面を持つ楕円形で、8×6mmを測る。茎は断面方形で幅4mmである。茎間の形状とX線写真から、鎌身部分に別造りの茎を1cmほど挟んで成形した可能性が指摘できる。6は、全長11.3cmの鉄釘である。体部は幅0.9cmを測り、断面方形である。一端を細長く鍛打したのち、直角に折り曲げ、さらに先端を水平方向に5mmほどL字に折り曲げて釘頭としている。下端から2cmほどの所から四方から鍛打し、先端を細く作り出す。

3) 小穴・その他

SP-205～207・210～214の8基の小穴が出土している。いずれも乾燥すると白っぽく変化する淡茶褐色シルトを埋土とする。SD-208・209とは砂礫がほとんど混じらない埋土である点が大きく異なる。規模や埋土の特徴、出土遺物を巻末の遺構一覧表に記載しているので、参照されたい。

7 II - 2 - ⑤層と出土遺物

II - 2 - ⑤層は、砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトや灰黄色砂質シルト、砂礫混じりの灰黄褐色砂質土で構成される堆積土で、上下のII - 2 - ④層やII - 2 -

⑥層と比べて、砂礫が非常に多く混じる点が特徴である。DS・DT-42区にやや張り出しながら、A区北半部を中心として広がる。II - 2 - ③層と同じく、部分

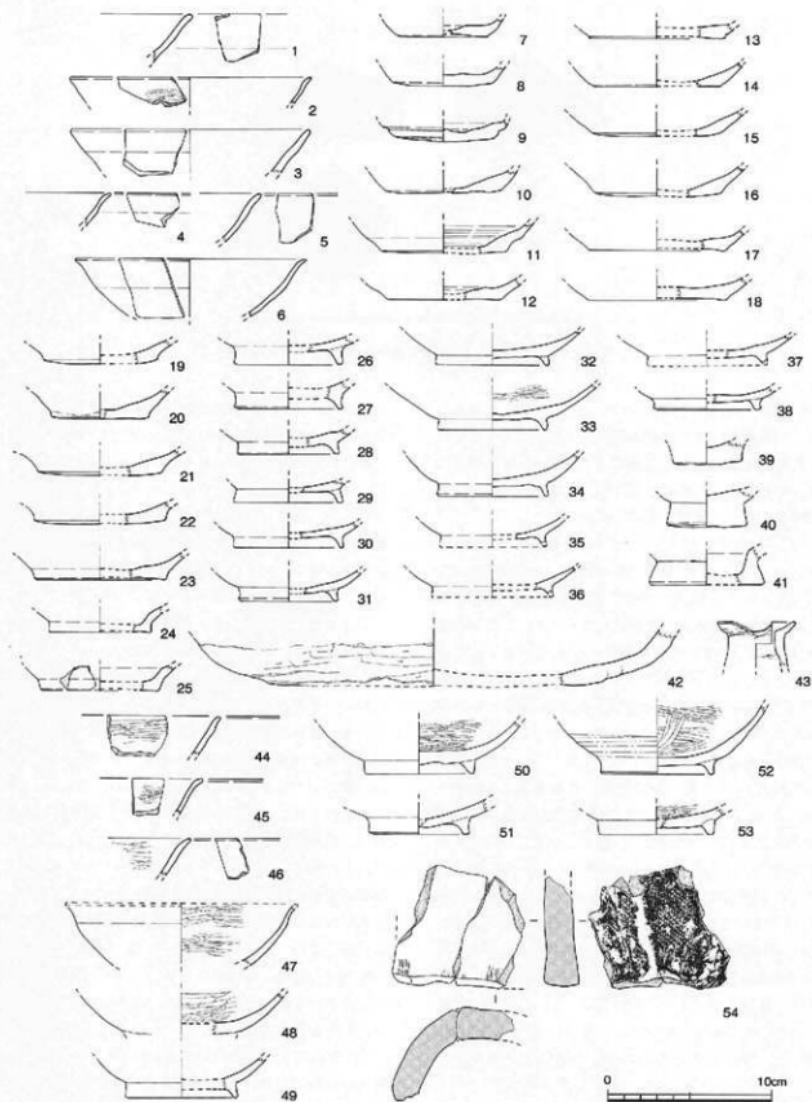


図47 A区II-2-⑤層出土遺物実測図1（縮尺1/3）

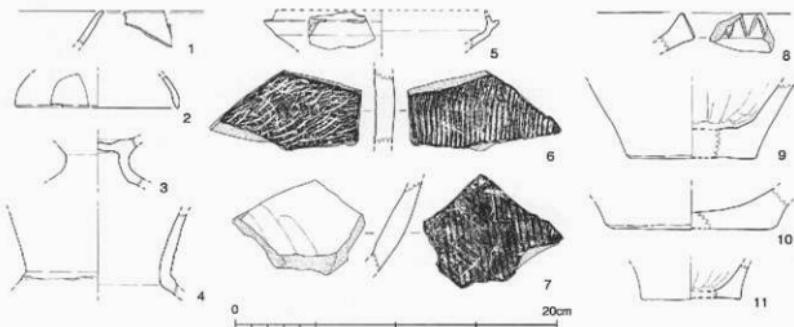


図48 A区II-2-⑤層出土遺物実測図2(縮尺1/3)

的に細砂・粗砂・小礫の薄いレンズ状ブロックがみられ、河川氾濫に伴う比較的緩やかな増水によって堆積したものと判断した。上部は、II-2-④層と明確に区分できなかった地点もあるが、下部のII-2-⑥(下層水田)層との層界は明確に区分できた。

ただし、前述したように、II-2-⑤層を掘り下げて、下層水田面にあたるII-2-⑥層上面を精査中に、SD-208・209、SK-201~204などの遺構を検出し、調査区東壁の土層断面を再確認したところ、これらの遺構がII-2-⑤層上面から掘り込まれていることを把握した。そのため、以下に報告する遺物には、本米SD-208・209、SK-201~204などの遺構に伴うものも含まれている。

出土遺物には、土師器、黒色土器、瓦、古墳後期~奈良時代の須恵器、弥生土器、鉄器がある(図47・48・55-2)。図47-10はDT-42区SD-301埋土①層、12はDU-43区SD-208の破片と接合。42は、DY-45区西半部SX-121、DX-44区SD-208埋土、DU-44区SD-209埋土およびSD-209埋土下層から出土した破片と接合する。48はDX-45区SS-117耕作土層、50はSD-209、52はDV-45区SD-301・SS-117間畦畔部、DU-44区SD-209埋土、DU-44区SD-209埋土中層から出土した破片と接合する。また、54の瓦は、DU-44区SS-109床土層から出土破片と接合する。さらに、接合しないが、29と同一個体と考えられるDU-44区出土の破片がある。

図47-10~22は土師器壺。11は厚でづくり。2は薄でづくりで、精選粘土を用いる。4・6も薄でのつく

りである。10・20~22の外底面には回転ヘラ切り離し痕が残る。20の底部が台状に見えるのは、回転ヘラ切り離しの際に粘土がよれているためである。11・15・19も外底面は回転ヘラ切り離しと考えられるが、確定できない。これらに対して、18の外底面は回転糸切り離しの後にナデ仕上げ。15の器壁の芯部には淡黒色の黒化層が残る。10・12・16の内外面は二次的な火熱を受けて赤変する。

7~9は土師器皿。8・9の外底面は回転ヘラ切り離し痕が残る。7も回転ヘラ切り離しか?

1~6・23~38は土師器の高台付き塊。1・3・5は厚でづくり。2は薄でのつくりで、精選粘土を用いる。4・6は薄でのつくりである。36・37・39も胎土には砂跡は含まれず、精選粘土を用いている。とくに、36は薄でのつくりである。23の外底面には回転ヘラ切り離し痕が残る。40の外底面も回転ヘラ切り離しか? 41は、外底面が荒れているため、切り離しの方法は判然としないが、糸切りの可能性が高い。23・35・40の器壁の芯部には灰色や淡黒色の黒化層が残る。

40・41は土師器の柱状高台付土器である。43も柱状高台付土器の一種か。円筒形の台部から短く外反する口縁部をつける。口縁部の一部にヘラ状工具を用いて片口を設けている。片口付近は二次的火熱を受けており、コゲが付着する。

44~53は黒色土器の内墨の塊。46は薄でのつくりで、51・53は厚でのつくり。48の高台は接合面で欠ける。接合面には数条の回転糸線が巡る。50~53の外底面には回転ヘラ切り離し痕が残る。52の外底面は、回転ヘ

ラ切り離しの後に、輪高台を貼りつけて横ナデ仕上げする。

54は、土師質の丸瓦で、狹端縁連結部の破片である。玉縁端面と鋪面が部分的に残存し、凹面部には布目压痕を観察できる。

図48-1は、奈良時代の須恵器の高台付き壺と考えられる口縁部片。2~7は古墳後期の須恵器。2は短頸壺の蓋、3は低脚の高壺である。4の頸部の付け根付近には、ヘラ状工具を押さえつけた痕跡が残る。肩

部外面には自然釉が薄く付着。5は壺身。6~7は副部片。8~10は弥生土器の壺、11は壺。8の口縁端面にはヘラ状工具で「ハ」字形の連續文を施す。9の内面はヘラ状工具で余分の粘土を掻き取るよう強いナデ調整を施す。器壁の芯部には薄く淡黒色の黒化層が残る。

図55-2は、鉄刀子で、鋒と柄を欠失する。刃部の断面は二等辺三角形を呈する。

8 II-2-⑥層（下層水田）の遺構と遺物

II-2-⑥（下層水田）層は暗黄褐色砂質シルトないし黃灰色砂質土の土層で、上半は粘性が強く土壤化が進んでいる。A区北東の低くほぼ平坦な部分を中心として広がる。上部に堆積する砂礫が多く混じるII-2-⑤層とは比較的容易に区分できた。また、II-2-⑥層でも下半部は、灰黄褐色砂質土と灰黄褐色シルトが混じりあった堆積土層で、砂や小礫が混じり粘性が弱い。また、小指先大小の小円礫が混じる。これに対して、上半部は粘性が強い。上半を耕作土層、下半を床土層として調査したが、平面的に区分することは困難で、A区東壁沿いに設けた深掘りトレーンチや攪乱溝の壁面で確認できた上半と下半の区分を参考にしながら、上半の耕作土層と下半の床土層を掘り分けながら精査に努めた。

（1）遺構

II-2-⑥層上面では、畦畔で区画されたSS-303~306・308~312・314・316・317の水田面、これに伴うSD-301・302・307が出土した（図版14・15）。ただし、後述するように、調査時SS-313・315とした水田面は、それぞれSS-312・314と同じ水田面と考え、欠番をしている（図49）。

1) 水田

上層から掘られたSD-208・209で破壊されているが、SS-303~306・308~312・314・316・317の計12枚の水田面を確認できた。水田面は北東に向かって緩やかに傾斜する。畦畔はいずれもII-2-⑥層下半の砂混じりでやや粘性が弱い褐色シルトを削り出して造られて

いる。

SS-303

A区東壁沿いのDR・DS-43・44区でSD-208・209で破壊されながら畦畔で囲まれた水田面が出土した。検出できた水田面は、DR・DS-43区中央とDR・DS-44区北半の限られた範囲にしかない。水田面の標高は、南側のDR・DS-43区中央では26.02m、北側のDR・DS-44区北半では25.92~25.96mで、比高差が最大で10cm、残存する西側畦畔の位置がずれていることも考え合わせて、2枚の水田面を想定し、南側のDR・DS-43区中央の水田面をSS-303、北側のDR・DS-44区北半の水田面をSS-318とした。

SS-303の水田面は、ごく一部しか残存していないが、畦畔の配置から、最大でも南北3~3.5mと推定される。東側は調査区外にのびる。水田面には小さな窪みがみられるが、耕起痕や足跡ではない。南側のSD-301とを区画する畦畔は、幅85cm、高さ4cm前後の高まりである。西側のSS-304とを区画する畦畔は、ごく一部がSD-208・209間に残存していた。幅65~70cmを測る。

南西隅でSD-302へつながる幅53cmほどの水口を確認した。ごくわずかであるが、水口からSD-302に向かって低くなる。II-2-⑥層に対応する砂礫が非常に多く混じる灰黄褐色土で埋まる。

SD-301・SS-303間畦本体から土師器の小片や鉄刀子（図55-1）が出土している。

SS-304

A区東部のDS・DT-43・44区に位置する。中央部をSD-208・209で大きく破壊されているが、南北3.2~3.7m、東西4.6m前後を測る方形の水田面と推定でき

る。水田面の標高は25.96~25.98mを測り、東側のSS-303水田面よりも4cm前後低い。水田面には牛の足跡と考えられる窪みが数ヶ所残る。ただし、足跡の遺存状況は悪い。南側のSD-302とを区画する畦畔は、75cm前後、6cmほどの高まりである。東隣のSS-303とを区画する畦畔は、DR・DS-43・44区の境界部で、部分的に確認できたにすぎない。北隣のSS-305とを区画する畦畔は、幅55~60cm、高さ2~4cm。西側のSD-307とを区画する畦畔は、幅55~80cm、高さ4cm前後を測る。

水田面の南東隅に1ヶ所、SS-305とを区画する北側畦畔で2ヶ所、計3ヶ所で水口を確認した。東南隅の畦畔は幅50cm前後で、SD-302の溝底とは4cmほどの段差がある。II-2-⑤層に対応する砂礫が非常に多く混じる灰黄褐色土で埋積されていた。北側畦畔西側の水口は幅30cm前後、東側の水口は幅50cm前後と推定される。とともに、II-2-⑤層に対応する砂礫が非常に多く混じる灰黄褐色土で埋積されている。

耕作土層から土師器壺の底部片（図53-6）、SD-302・SS-304間畦畔部から円盤高台をもつ土師器塊（図54-1）などが出土している。

SS-305

A区東部のDS-44区で出土した。南北2.06~2.5m、東西3.4mのやや歪んだ方形を呈する。水田面の標高は25.92~25.98mで、北西へ向かって緩やかに低くなる。東隣のSS-318とはほぼ同じ高さ、南隣のSS-304よりも2~4cm低い水田面である。水田面の数ヶ所で牛の足跡を確認できたが、遺存状態は悪く、歩行の方向性などは読み取れない。東隣のSS-318とを区画する畦畔は幅42~54cm、北隣のSS-306とを区画する畦畔は41~55cm、2~3cmの高まりである。南隣のSS-304とを区画する畦畔は幅55~60cm、西側のSD-307とを区画する畦畔は幅80cm前後、高さ3~4cmを測る。

北東隅・北西隅・南東隅・南側畦畔中央・西側畦畔中央の5ヶ所で水口を確認した。北東隅の水口は幅48cm前後、水口の北側に2cmほど低い窪みができる。北西隅の水口は幅43cm前後。南東隅の水口は、遺存状態が悪いが、幅40cm以上と推定される。南側畦畔中央の水口は幅55~60cm、西側畦畔中央の水口は幅25cmで、底面はSD-307へ向かって緩やかに傾斜する。いずれも砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトで埋積されている。これはII-2-⑤層に対応する埋積土である。また、

水田面の傾斜から考えると、SS-304・318からSS-305へ、SS-305からSD-307あるいはSS-306への配水が考えられる。

耕作土層・床土層からは土師器の小片が数点出土しただけで、図示できるような遺物はない。

SS-306

A区北東隅のDR・DS-44・45区に位置する。東側と北側は調査区外にのび、南北43m、東西45m以上の方形の水田面である。水田面は、標高25.96~25.98m前後と、ごくわずかであるが北側に向かって傾斜する。また、西側のSD-307とを区画する畦畔は、ほぼ中央にL字形に折れ曲がる部分があり、その東側延長線上では水田面がごくわずかに高くなった部分が帯状にみられる。耕作土層を盛り上げて畦畔を造り、SS-306を2枚の水田面に区画した可能性が考えられた。しかし、調査区東壁の土層断面を再度観察したが、そうした高まりは確認できなかった。

水田面では、人の足跡かと考えられる窪みが残るが、判然としない。南側のSS-318とを区画する畦畔は幅75cm、同じくSS-305とを区画する畦畔は幅41~55cmで、2cm前後の高まりである。西側のSD-307とを区画する畦畔は幅65~80cm、高さ2~3cmを測る。いずれもII-2-⑤層に対応する灰黄褐色土で埋積される。

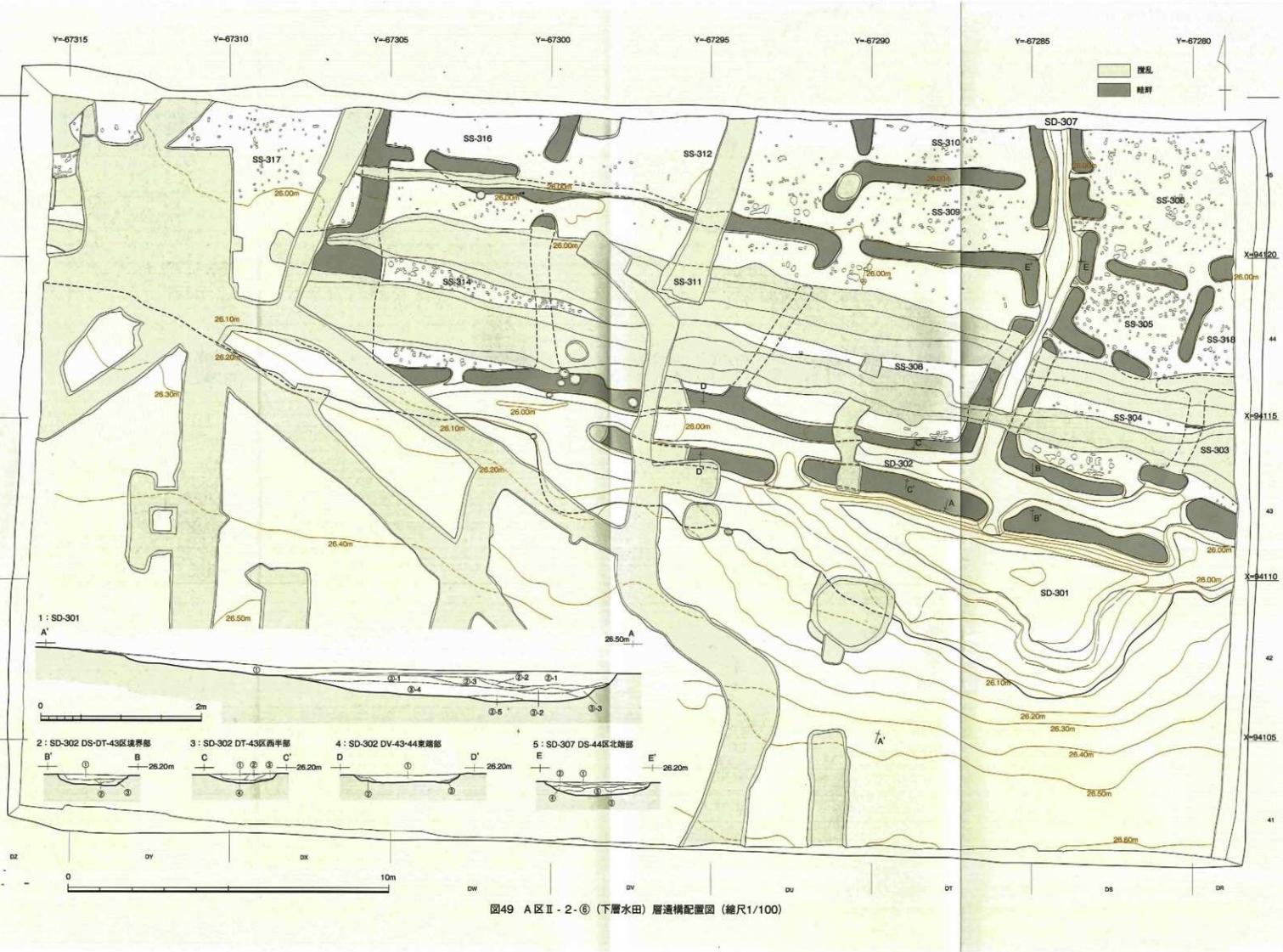
耕作土層・床土層からは土師器の小片が数点出土しただけで、図示できるような遺物はない。

SS-308

A区北東部のDT・DU-43・44区に位置する。中央部をSD-208・209で大きく破壊されており、これまで報告したSS-304・305と比べて水田面積が大きいことから、2枚の水田面に区画されている可能性も考えたが、水田面の標高が25.98~26.02mで北東部が若干低い程度なので、確定できなかった。そこで、1枚の水田面SS-308として報告する。

5.6×6.25~6.8mの不整な平行四辺形を呈する。水田面には窪みが残されているが、他の水田面と比べて少なく、耕起痕や足跡と判断できる窪みはない。東側のSD-307とを区画する畦畔は、幅75~78cm、4cm前後の高まりである。北隣のSS-309とを区画する畦畔は、幅50~55cm、高さ2cm前後。南側のSD-302とを区画する畦畔は、幅62~78cm、高さ4cm前後を測る。西隣のSS-311とを区画する畦畔は部分的にしか検出できなかった。幅57~60cm、4cm前後の高さを測る。

東側畦畔の北半部、北側畦畔の西端と、西側畦畔の



北端の計3ヶ所で水口を確認した。SD-307とを区画する東側畦畔の北半部に設けられた水口は、幅45cmを測り、SD-307溝底と比べて4cmほど高くなっている。北側畦畔の西端の水口は幅58cmを測る。ともに、上部に堆積するII-2-⑤層に対応する砂礫が多く混じる明黄褐色土で埋積される。西側畦畔北端の水口は、幅40cmほどと推定される。やはり、II-2-⑤層に対応する砂礫が多く混じる明黄褐色土で埋まる。

耕作土層から土師器壺（図53-2）、黒色土器塊（図53-10・15）、須恵器壺（図53-19）、SD-302・SS-308間畦畔部から石庵丁とされる石器破片（図52-4）などが出土している。

SS-309

A区北東部のDT・DU-44・45区に位置する。不整な平行四辺形の水田面で、南北1.95m、東西5.8mを測る。水田面は、25.98m前後で、SD-307とを区画する東側畦畔に設けられた水口部分がやや低くなる。水田面には、窪みが多く残るが、耕起痕や足跡と確定できるものはない。SD-307とを区画する東側畦畔は、幅65cm前後、2~3cmの高さである。SS-310とを区画する畦畔は、幅55~60cm、高さ2cmを測る。南隣のSS-308とを区画する畦畔は、幅50~55cm、高さ2cm前後。SS-312とを区画する西側畦畔は、幅82cm前後、2cmほどの高まりである。

水田面の北東隅と南東隅、南西隅の計4ヶ所に水口が設けられている。北東隅のSS-310とをつなぐ水口は、幅40cm、径1~3mmの砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトで埋まる。これはII-2-⑤層に対応する埋積土である。南東隅のSD-307とをつなぐ水口は、幅93cmを測り、底面はSD-307に向かって緩やかに傾斜し、6cmほどの段差がつく。南西隅のSS-308とをつなぐ水口は、幅58cmで、II-2-⑤層に対応する砂礫が多く混じる明黄褐色土で埋積されている。

南西隅でもSS-312とをつなぐ水口は、幅62cmで、径1mm前後の砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトで埋まり、灰黄色シルトのレンズ状ブロックがみられる。これもII-2-⑤層に対応する埋積土である。

耕作土層から土師器の小片などが出土しているが、図示できるものはない。SD-307・SS-309間水口部からは弥生土器壺の口縁部破片（図50-29）が出土した。

SS-310

A区北西隅近くのDT・DU-45区に位置する。北側は調査区外にのび、南北1.45m以上、東西4.9~5.1m

の方形の水田面である。水田面の標高は25.96~25.98mを測る。水田面には、牛の足跡かと考えられる窪みなどが残るが、判然としない。SD-307とを区画する東側畦畔は、幅68~75cm、2cmほどの高さである。SS-309とを区画する南側畦畔は、幅55~60cm、高さ2cm前後。SS-312とを区画する西側畦畔は、幅45~77cm、高さ3cmを測る。

水田面の南東隅と南西隅の2ヶ所で水口を確認した。南東隅のSS-309とをつなぐ水口は、SS-309で報告した。南西隅のSS-312とをつなぐ水口は、幅22cmをはかり、II-2-⑤層に対応する堆積土で埋まる。

耕作土層から土師器の小片などが出土しているが、図示できるものはない。

SS-311

A区中央北よりのDU~DW-44・45区に位置する。SS-308と同じく、中央部をSD-208・209で大きく破壊され、水田面の面積が大きいので、2枚の水田面を考えることもできるが、水田面の標高は26.00~26.04mとほぼ平坦であることから、1枚の水田面SS-311として報告する。逆台形を呈し、南北5.16~5.9m、東西5.4前後~8.2mを測る。水田面には窪みがいくつか残るが、耕起痕や足跡と確実に考えられるものはない。SS-308とを区画する東側畦畔は、南北両端しか検出できなかった。幅57~60cmを測る。SS-312とを区画する北側畦畔も、上部の中層水田SD-103によって、西半部の大部分を削られている。残存状態がよい東半部では、幅50~60cm、2cmほどの高まりをもつ。SD-302とを区画する南側畦畔は、幅7.2~9.5cm、2~4cmの高さである。SS-314とを区画する西側畦畔は、北端の一部しか検出できなかった。最大幅95cm、高さ2cm前後を測る。

東西の畦畔の北端で水口を確認した。東側畦畔の水口は、畦畔が途切れることから復元した。幅40cmほどと推定され、II-2-⑤層に対応する砂礫が多く混じる明黄褐色土で埋まる。西側畦畔に設けられた水口は、幅40cmを測り、周辺よりも2cmほど若干窪む。やはり、II-2-⑤層に対応する砂礫が多く混じる明黄褐色土で埋積されている。

耕作土層から土師器壺（図53-3・8）や黒色土器塊（図53-12・14・16）などが出土している。

SS-312

A区中央北壁沿いのDU・DV-45区に位置する。北側は調査区外にのび、南北3.2m以上、東西8.06~8.4

mを測る平行四辺形の水田面である。当初、西半部のDV-45区をSS-313として調査していたが、水田面の標高が25.94~26.00mとほぼ平坦であるため、この部分を含めてSS-312とした。水田面の標高は、周辺の水田面とほとんど変わらないが、西側に向かって緩やかに傾斜する。水田面には点々と窪みが見られるが、確実に耕起痕や足跡と考えられるものはない。東側のSS-309・310とを区画する畦畔は、幅45~82cm前後、2~3cmの高まりである。SS-311とを区画する南側畦畔は、SS-311の報告で述べたように、西半分を上層のSD-103で削られている。残存状況がよい東半部では、幅50~60cm、高さ4cm前後を測る。西側のSS-316とを区画する畦畔は、幅57~71cm、2cmほどの高さである。

東側畦畔でSS-309・310とをつなぐ水口、西側畦畔の南端でSS-316とをつなぐ水口を確認した。SS-309とをつなぐ水口は幅62cm、SS-310とをつなぐ水口は幅22cmを測る。西側畦畔の南端でSS-316とをつなぐ水口は、南半部を上部から掘り込まれたSD-103で削られているが、幅70cmほどと推定される。いずれもII-2・⑤層に対応する堆積土で埋積されている。

SS-312と関連する出土遺物は細片がほとんどで、図示できなかった。

SS-314

A区北西部のDW・DX-44・45区に位置する。中央部をSD-208・209で大きく破壊されているが、南北5.55~6.45m、東西4.7~5.1mの不整方形の水田面と考えられる。当初、南半部をSS-315として調査していたが、水田面北西部がやや低くなるが、標高が25.96~26.08mと一定していることから、1枚の水田面と判断してSS-313とした。水田面には多くの窪みが残されている。人や牛の足跡と考えられる窪みもあるが、遺存状態が悪く確定できなかった。東側のSS-311とを区画する畦畔は、北端部を検出したのみである。最大幅95cm。北側のSS-316とを区画する畦畔は、上部から掘り込まれたSD-103で一部を削られている。最大幅103cmで、47~60cmである。2cm前後の高まりである。南側のSD-301とを区画する畦畔は、幅65~90cm、高さ2~4cmを測る。西側のSS-317とを区画する畦畔は、南半部をSD-208・209で破壊されている。北半部は幅90cm前後、2~3cmの高まりである。

水田面の北東隅、北西隅、南側の3ヶ所に水口が設けられていた。北東隅のSS-311とをつなぐ水口は幅

40cm、北西隅のSS-316とをつなぐ水口は幅38~55cm、南側のSD-301とをつなぐ水口は幅40cmを測り、いずれもII-2・⑤層に対応する堆積土で埋積されている。

SS-314・316間水口部からは土師器坏（図50-30）が出土している。外底面には回転ヘラ切り離し痕が残る。この他、耕作土層から土師器の皿（図53-1）や坏（図53-5）、土鍋（図53-9）、黒色土器塊（図53-11・13）、須恵器の胴部破片（図53-20・21）などが出土している。

SS-316

A区北壁沿いのDV・DW-45区に位置する。北側は調査区外にのび、南北1.5m以上、東西4.95~5.2mを測る不整方形の水田面である。水田面は25.92~25.94mを測り、周辺のSS-311・312・314水田面よりも若干低い。水田面に残された窪みは少なく、耕起痕や足跡と考えられるものはない。SS-312とを区画する東側畦畔は幅57~71cm、SS-314とを区画する南側畦畔は最大幅95cmを測る。SS-317とを区画する西側畦畔は、上部から掘り込まれた壘塹で破壊されているが、幅55~60cmを推定される。いずれも水田面から2cmほどの高さをもつ。

水田面の南東隅と南西部の2ヶ所に水口が設けられていた。南東隅のSS-312とをつなぐ水口は幅70cmほどと推定され、南西部のSS-314とをつなぐ水口は幅38~55cm、ともにII-2・⑤層に対応する堆積土で埋まっている。

SS-316と関連する出土遺物は細片がほとんどで、図示できなかった。

SS-317

A区北西部のDX~DZ-44・45区でもII-2・⑥層が検出できた。しかし、SD-208・209や中層水田に伴うSX-121で大きく破壊され、明確に畦畔で区画された水田面を確定できなかった。そこで、この範囲をSS-317として報告する。水田面の標高は、25.96~26.06mを測る。水田面では、北半部で人間や牛の足跡と考えられる窪みなどを確認できた。しかし、残存状況が悪く歩行の方向性はみられない。東側のSS-314・316とを区画する畦畔は、DX-44・45区境界部でL字形に屈折する。2~4cmの高さをもつ。

耕作土層から土師器塊（図53-7）などが出土している。

SS-318

SS-303で報告したように、A区東壁沿いのDR・

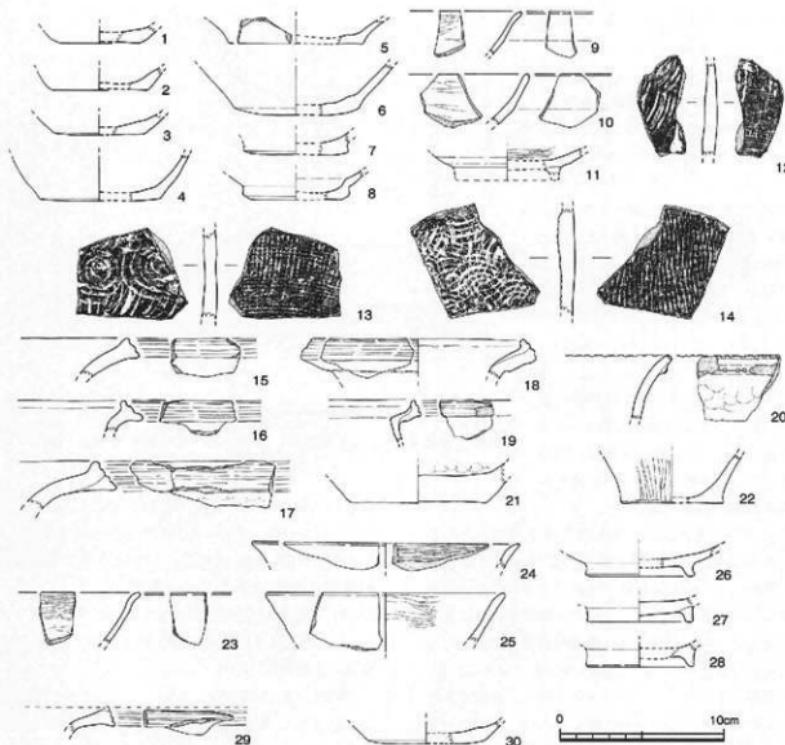


図50 A区II-2-⑥(下層水田)層SD-301・302・水口出土遺物実測図(縮尺1/3)

DS-44区北半で出土した水田面をSS-318とした。南北3m前後と推定される水田面である。水田面の標高は北側が若干高く、25.92～25.96mを測る。水田面でいくつか小さな堆みを検出したが、耕起痕や足跡ではない。北隣のSS-306とを区画する畦畔は幅75cm、2～3mの高まりである。西隣のSS-305とを区画する畦畔は幅42～54cmで、4cm前後の高まりである。

西側畦畔の両端で畦畔が途切れる。北端では北側畦畔との間に幅24cmの水口を確認できた。砂砾混じりの暗灰黄色シルトで埋まる。南端付近はSD-209で破壊されているが、SS-303とをつなぐ幅40cm以上の水口を推定できる。砂砾が非常に多く混じる灰黄褐色土で埋まる。南北の水口を埋める堆積土はII-2-⑥層に対

応する。

SS-318の耕作土層・床土層からは土師器の小片が数点出土しただけで、図示できるような遺物はない。

2)溝

下層水田に伴う水路としてSD-301・302・307の3条の溝が出土した。東西にのびるSD-301を基幹とし、その北側に畦畔を挟んでSD-302を平行させ、さらに南へのびるSD-307を配置している。

SD-301

A区のほぼ中央のDR～DY-42～44区で、やや北に偏して東西にのびる水路である(図版16)。DV-43・44区境界部でSD-302が合流する。DY-44区以西は上

部から掘り込まれた遺構によって破壊されている。溝幅は一定していない。DR・DS-43区では幅1.6~1.7mで、溝底の標高は25.86~26.00m前後を測る。DS-43区東半部に設けられたSD-302との連結部付近は幅がやや広がるとともに若干深くなる。DS・DT-42・43区では南側が広がり、最大幅5mを測る。溝底の標高は25.59~25.80mで、DS・DT-42・43区境界部分が25.59mともっとも低く、掘り鉢状の窪みをつくる。DU-43区西半部～DV-43区は幅1.5~1.9mを測り、溝底は26.02~26.04m。DV-43・44区境界部のSD-302との合流部付近では一旦3m以上の溝幅となり、さらにDW-43・44区では1~1.45mと狭くなる。DX-44区以西は、水路の南半分しか残存していない。溝底の標高は26.06m前後である。

この中で、溝幅が広くなり掘り鉢状の窪みとなるDS・DT-42・43区で、南北断面の堆積土層を観察した(図49-1)。最上部には、灰黄褐色砂質土の①層が堆積する。①層には径1~2mmの小礫がまばらに混じり、南半部の溝の肩部では、基本層序のIV層にあたる明黄褐色砂質土が、径1~2cmの塊となってみられる。埋土中部と下部は、シルト質土の②層と、砂礫が多く混じる砂質シルト土の③層に分層できる。②層は、さらに②-1~3層に細分できる。②-1層はにぶい黄褐色砂質シルトで、①層と比べてやや粘性をおびる。径1~2mm前後の礫が少量混じる。②-2層はにぶい黄褐色砂質シルトで、さらに粘性が強く、砂礫も少ない。②-3層は部分的に粘性をおびる灰黄褐色砂質シルト。埋土下部の③層は③-1~5層に細分できる。③-1層は褐灰色砂質土で、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックがみられる。③-2層は褐灰色砂質シルト、③-3層は灰黄褐色砂質シルトである。③-4層は小指先大~親指先大の小礫が多く混じる褐灰色砂質土である。③-5層は、溝底にレンズ状ブロックとして堆積し、褐灰色砂質土および灰黄褐色シルトが薄い縞状に互層堆積する。

以上の埋土の中で、③層は流水によって堆積した土層群であり、SD-301が機能していた時期の堆積土層である。かなりの水量があったものと考えられる。と

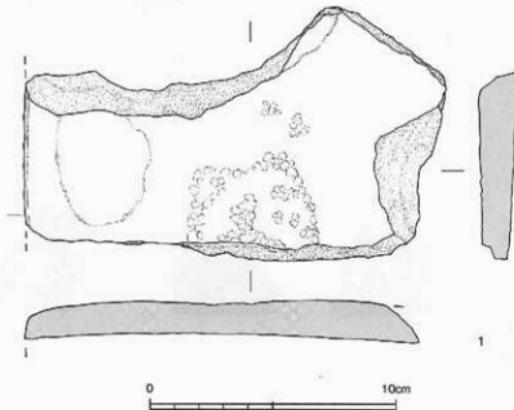


図51 A区 II-2-⑥(下層水田)層 SD-301出土遺物実測図(縮尺1/2)

ころが、SD-301では、DS・DT-42・43区以外で、こうした堆積状況はみられない。杭痕跡の集中などはなかったが、DU-43区中央部にSD-302とつなぐ水口が配置されていることや、後述するようにDS～DU-42・43区から遺物が集中して出土していることから、DU-43区西半部付近に堰が設けられていた可能性を考えておきたい。

SD-301の北側に平行してのびるSD-302と間には、II-2-⑥層下半の砂混じりで粘性が弱い褐色シルトを削り出して、幅1.15~1.65mの畦畔が造られている。また、DS-43区東半部、DT-43区中央部、DU-43区西半部の3ヶ所に水口が設けられている。DS-43区東半部の水口は、幅1.14mを測り、SD-302とは15cmほどの段差がつけられている。DT-43区中央部の畦畔に設けられた水口は幅62cm、DU-43区西半部の水口は幅86cmを測り、SD-302からSD-301に向かって15cmほど急激に落ち込む。

SD-301では、DS～DU-42・43区から多くの遺物が出土している。土師器の皿(図50-1～3)や壺(図50-4～6)、壺(図50-7・8)黒色土器壺(図50-9～11)、須恵器の胴部片(図50-12～14)、弥生土器(図50-15～19・21・22)、刻目凸帯文土器(図50-20)、打製石鎌(図52-1)、磨製石斧(図52-2)、砥石(図51-1)などがある。この中で、土師器の皿と壺(図50-3・4)や弥生土器(図50-15～17・21・22)は、

SD-301が機能していた時期に堆積した③層から出土した遺物である。この他、SD-301・302間畦畔部から土師器塊（図54-1）、須恵器の胴部破片（図54-2）、弥生土器の壺の口縁部片（図54-3）、SD-301・SS-303間畦から鉄刀子（図55-1）などが出土している。また、図50-17は、SD-301のDT-43区部分②～③層出土の破片と接合する。

この中で、黒色土器（9～11）は、いずれも内黒の境である。9は薄でのつくり。これに対して、10は全体に厚でのつくりである。12～14の須恵器は古墳後期。弥生土器の中で、15～18は壺。15は、口縁端部を強い横ナデでわずかに拡張し、端面に2条の凹線文を1条ずつ施す。16は、口縁端部を上下に拡張し、端面に太く深い2条の沈線状の凹線文を2条施す。17は、口縁下端を拡張して、端面に3条の凹線文を1条ずつ施す。18は、口縁上面に粘土を垂ぎ足して端部を上方に拡張し、端面に3条の幅が不揃いな沈線状の凹線文を1条ずつ施す。19は壺で、口縁端部を上方に拡張し、端面に2条の凹線文を巡らす。20は、沢田式併行期の刻目凸帯文土器で、口縁部下に細い断面三角形突帯を貼り付け、小さく浅い刻目を正面から押捺する。口縁端面には、細い棒状工具を斜め上方から押捺した刻目を密に等間隔に施す。図51-1の砥石は、扁平な砂岩の亜円礫を利用している。底面には線条痕とともに敲打痕が残り、敲石としても利用されている。

SD-302

A区のほぼ中央のDS～DV-43・44区で、SD-301に平行して東西方向に配置された水路である。DS-43区でSD-301から分岐し、DV-43・44区で再びSD-301と合流する。DT-43

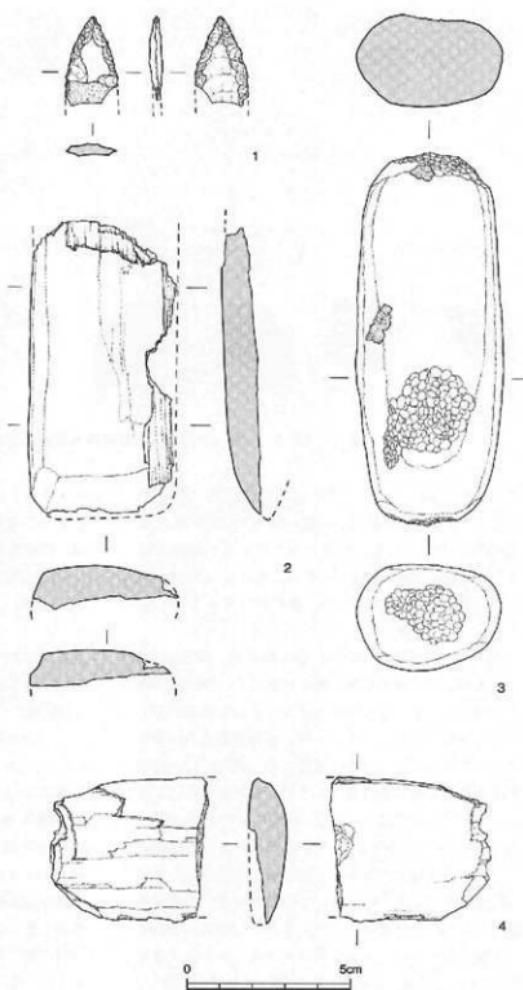


図52 A区II-2-⑥（下層水田）層 SD-301・307・水田畦畔出土遺物実測図（縮尺2/3）

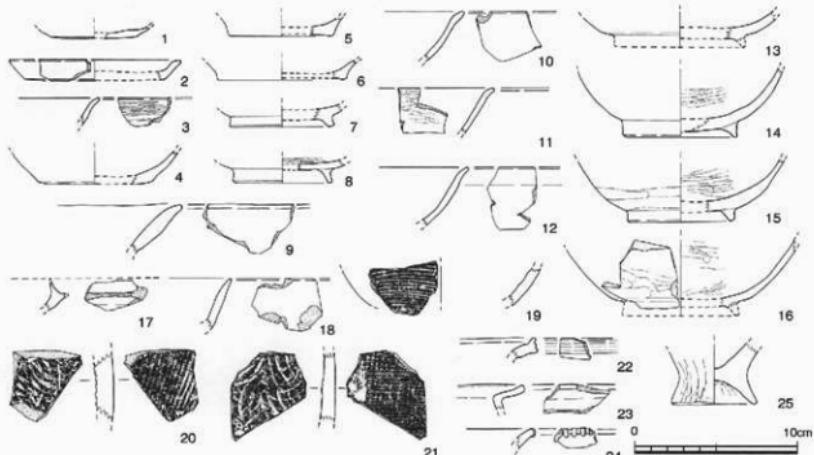


図53 A区II-2-⑥(下層水田)層耕作土層出土遺物実測図(縮尺1/3)

区ではSD-307と分岐し、DS-43区にSS-303・304とをつなぐ水口、DT-43区中央部、DU-43区西半部にはSD-301とをつなぐ水口が設けられている。総延長は18.5m、溝幅は80~120cmを測る。溝底には凸凹があるが、標高25.98~26.02mと、東西でほとんどかわらない。

DS・DT-43区境界部、DT-43区西半部、DV-43・44区東端部の3ヶ所で堆積土層を観察した。DS・DT-43区境界部では、上部に砂粒や径1~2mmの小礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの①層、砂礫混じりの灰黄色砂質土の②層がレンズ状に堆積する。溝底には、砂礫が多く混じる灰黄色砂質シルトの③層で埋まる。これらは、いずれも上部のII-2-⑤層に対応する土層である(図49-2)。DT-43区西半部では、上部に砂礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの①層、小礫が多く混じる黄褐色砂質シルトの②層、やや粘性をおびる黄褐色砂質シルトの③層がレンズ状に堆積し、溝底を中心として黄褐色シルトに灰黄色砂質土が混じる④層がみられる。①~③層は上部のII-2-⑤層に対応する土層で、④層はSD-302が機能している時期の堆積土である(図49-3)。DV-43・44区東端部では、小礫がまばらに混じる灰黄褐色砂質土の①層で大部分を占め、溝底の壁際にきめが細かな灰黄褐色砂質土の②層や、にぶい黄

褐色砂質土の③層がレンズ状に堆積する。①層は上部のII-2-⑤層に対応する埋積土であり、②・③層はSD-302が機能している時期の堆積土である(図49-4)。

SD-302埋土からは、土師器の破片や黒色土器塊(図50-23~28)、SD-302・SS-308間畦畔部から石窓(図52-4)などが出土している。出土した遺物では黒色土器が目立つ。いずれも内黒の塊である。24は、厚でのつくりであるが、器面は丁寧に仕上げられている。

SD-307

A区北東部のDT-43区でSD-302から分岐して北にのびる水路である。わずかに東に蛇行し、北側は調査区外にのびる。総延長11m。溝底の標高は、SD-302と分岐するDT-43区で25.98m、北端のDS-45区では25.84mを測り、北に向かって緩やかに低くなる。溝幅は60~90cmであるが、DS・DT-44・45区の境界部では幅1.3m近く広がる。SS-304~306・308・309の水田面とをつなぐ水口が設けられている。

SD-307の埋土は砂礫が多く混じるオリーブ褐色シルトで、場所によっては黄褐色粘質土がみられる。上部のII-2-⑤層に対応する埋積土である。DS-44区北端部では、上部に砂礫が多く混じるオリーブ褐色シルトの①層、細砂が多く混じるオリーブ褐色シルトの②層、黄褐色粘質土の③層、細砂混じり黄褐色粘質土の

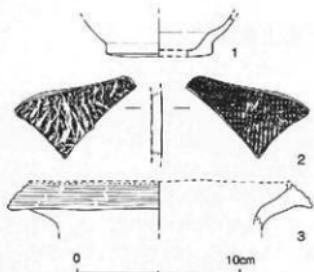


図54 A区II-2-⑥(下層水田)層耕作土層・畦畔部出土遺物実測図(縮尺1/3)

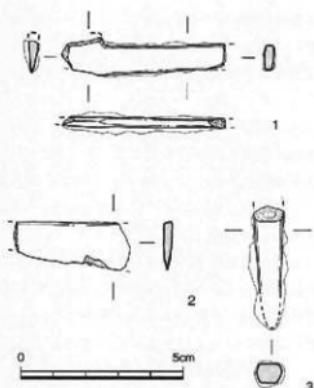


図55 A区II-2-⑥層、II-2-⑥(下層水田)層耕作土層・畦畔部出土遺物実測図(縮尺2/3)

④層が堆積し、下部には黄褐色粘質土の⑤層がみられる。⑤層の最下部には粗砂や径1~2mmの小礫が多く混じる。①~④層は上部のII-2-⑥層に対応する土層であるが、⑤層はSD-307が機能している段階の堆積土である。⑤層の観察からは、SD-307では流水が當時あったとは考えられない(図49-5)。

出土遺物には、土師器の小片などが少量出土しているにすぎない。また、溝底からは円柱状の砂岩砾を利用した敲打具(図52-3)が出土している。また、SD-307・SS-309間水口部から弥生土器の壺の破片(図50-29)が出土している。

(2) 水田耕作土・畦畔出土の遺物

1) 耕作土出土の遺物

II-2-⑥(下層水田)層耕作土からは、土師器、黒色土器、須恵器、弥生土器、鉄器が出土している(図53-55-3)。図53-15は、DW-44・45区 SD-209埋土中層から出土した破片と接合する。

図53-1・2は土師器皿。1の外底面の切り離し方法はナデ仕上げのため不明。2は厚でのつくり。3の土師器皿の外面は暗文風のミガキで仕上げられる。4~6は壺の底部片。4の外底は荒れが著しいが、ヘラ切り離しの可能性が高い。7・8は壺の高台部破片。7の器壁の芯部には、黒色の黒化層が残る。9は土鍋の口縁部片。胎土には大小粒の石英粒が多く混じり、全体にバサバサした質感である。10~16は内里の壺。10・13は厚でのつくりであるが、16は比較的薄でのつくりである。14の外底面には、回転ヘラ切り離し痕が残る。

17~21は須恵器。17は古墳後期の壺身、18は奈良時代の高台付き壺の口縁部片。22・23は弥生中期後葉~後期初頭の壺の口縁部片。22は口縁端部を拡張し、端面に2条の凹線文を一条ずつ施す。23は口縁端部をわずかに掘り上げる。24は、弥生前期の壺の口縁部片で、口縁端部に丁寧に等間隔に深い刻目をヘラ状工具で施す。25は弥生中期後葉の壺の底部片。脚台状の底部である。いずれも混入品である。

図55-3は、鉄釘の先端部付近の破片である。残存長3.7cm、断面は径7.5×6mmの不整な楕円形を呈する。

2) 畦畔部出土の遺物

II-2-⑥(下層水田)層の畦畔部から出土した遺物は少ない(図54、図55-1)。図54-1は、土師器の壺の底部片である。DT-44区のSD-208埋土下部から出土した破片と接合する。2は須恵器の崩部片。格子状に交差する平行条線タタキ目を施し、部分的にヘラ状工具で横ナデする。内面には同心円文の當て具痕が残る。3は弥生中期後葉の壺の口縁部片で、口縁端部を上下に拡張し、端面に4条の沈線状の凹線文を1条ずつ施す。

図55-1は、鉄刀子である。刃部の大部分と柄の端部を欠失。刃闇は無く、背闇のみ有し、刃部は断面が二等辺三角形を呈する。柄の断面は長方形である。

9 自然流路 SR-400 と出土遺物

SR-400はA区の南東から北西にむけて流れる自然流路である(図70、図版17・18)。前述したように、最上層の砂礫混じりの灰茶色系の土層である①層、灰白色の細砂・粗砂層を主体とする②層、拳へ人頭大の円礫を主体とする砂礫層である③層で埋積されている(図15)。

①層の砂礫混じりの灰茶色系の土層は、調査区東壁面では、①a～①d層に分層できる。①a層は、SR-400のほぼ全面を覆おう灰茶色から褐灰色の砂礫土を主体とする堆積土である。上層のⅡ-2-⑥(下層水田)層と比べて砂礫が多く、小指へ親指先大の円礫が混じり、茶色みをおびる。DR-44区では①a層内に部分的にラミナ状の砂礫層がみられる。これに対して、①b～①d層は、調査区東壁の41～43区南半部の微高地からの落ち際に部分的に堆積した土層である。①b・①c層は砂礫混じりの黒褐色砂質シルトとぶい黄褐色シルトが混じり、①d層は砂礫が非常に多く混じる黒褐色砂質シルトである。いずれも、微高地の落ち際に再堆積した土層である。

②層は、SR-400の流水で堆積した灰白色の細砂・粗砂層から構成される。後述するSR-400内の中州である③層の高まりの間の窪みに堆積する。調査区東壁面では②a～②g層、北壁面では②d・②h～②m層に分層できる。

東壁面の②a層は流水堆積がほぼ停止した後に、河道辺に溜まった堆積物で、灰色粗砂の中に、黒褐色砂質シルトや黄褐色シルトが薄い縞状にみられる。②b～②e層は、SR-400の流水による堆積物で、斜交層理を構成する。②b層は、SR-400内でも調査区東部のDR・DS41・42、DT-43区に広がり、灰色～灰白色の粗砂と小礫が北から南に向かって落ち込むように縞状に互層状態で堆積する。②c層は、灰色～灰白色の粗砂と細砂がほぼ水平に互層堆積する。②d層は、細砂と微細砂が縞状に互層堆積し、②b層と比べて斜交がやや緩やかである。②e層は、DT-43・44区のできた窪み部分に堆積し、細砂と微細砂が互層堆積で、一部が東壁面の③層上面までのびる。②f～②g層は、SR-400の流水が微高地辺の窪みに部分的に堆積したものである。②f層は灰褐色粗砂層。②g層は小指先大の円礫間に粗砂が密に詰まつた灰色砂礫層であ

る。

北壁面の②h～②m層は、後述する③層が造る窪地を流れる水による堆積物で、斜交層理を構成する。②h層は灰褐色細砂層。②i～②k層は、北東からのびる③a・③b層の高まり間の窪み(DT-43～45区)に堆積する。②i層は灰褐色細砂層。②j層はラミナ層が発達した灰褐色粗・細砂層。②k層は粗砂・小礫層で、ラミナ層が発達する。②l・②m層は、調査区北西部のSR-400落ち際と③b層の間の窪み(DW-45区)に堆積する。②l層は灰色の細砂層。②m層は灰色の粗砂層である。

③層の砂礫層は、SR-400内にできた中州を構成する堆積物で、③a・③b層の上面は覆瓦構造を示す。③a層は調査区北東部、③b層は中央部の中州の高まりである。ともに、径2cm～拳大の花崗岩の円礫を主に、層内には微細砂・粗細・細砂が薄い縞状に互層で混じる。また、拳大の黄褐色砂質シルトや黒褐色砂質シルト塊を下半部に含む。③b層では、そうした塊が多い。さらに下層には、流水によって堆積した③c～③f層を、北壁沿いに設定した深掘りトレンドで確認した。いずれも灰白色粗砂層で、ラミナ層が発達する。

調査にあたっては、SR-400の全面を厚く覆う①a層を、上部・中部・下部に人为的に分層しながら掘り下げながら遺物の取り上げを進めた。また、②層の調査では、上部～中部の②a・b・d層、下部の②c・e・h～m層に分けて精査した。また、明確に土層を区分できた地点では、②a・b・d層では②a層と②b層、②c・e・h～m層では②c層と②e・h～m層に分けて遺物の取り上げを進めた。このように、①・②層を除去し、③層上面まで調査を進めた。しかし、前述したように、調査期間と安全確保を考え、③層の調査は調査区北壁に沿って深掘りしたにとどめた。

1) ①層出土の遺物

①層では、微高地辺に堆積した①b～d層からは遺物は出土していない。ここで報告する遺物は、すべて①a層から出土したものである。調査では、上部・中部・下部に人为的に分層しながら遺物を取り上げたが、明確な時期差はない。また、図56-16の土師器は、

III A地区の遺構・遺物の調査記録（その1）

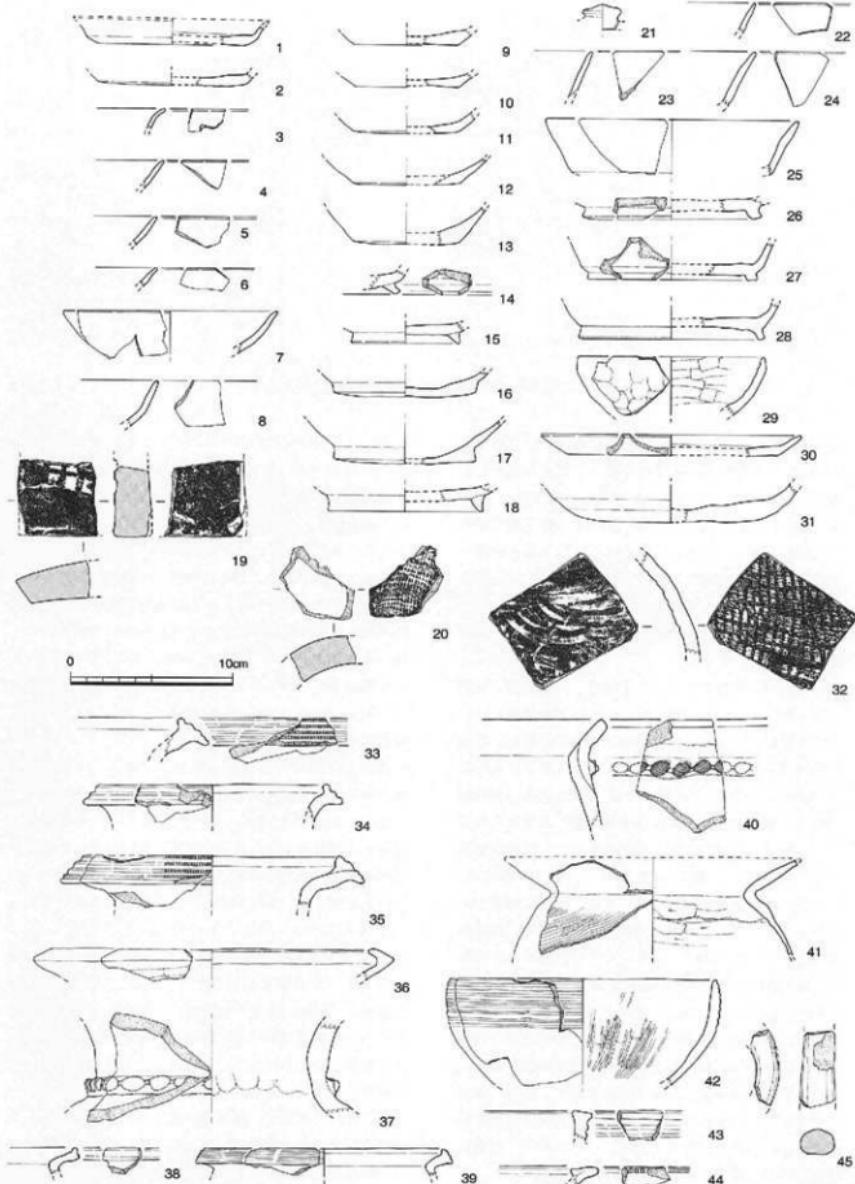


図56 A区 SR-400①層出土遺物実測図1（縮尺1/3）

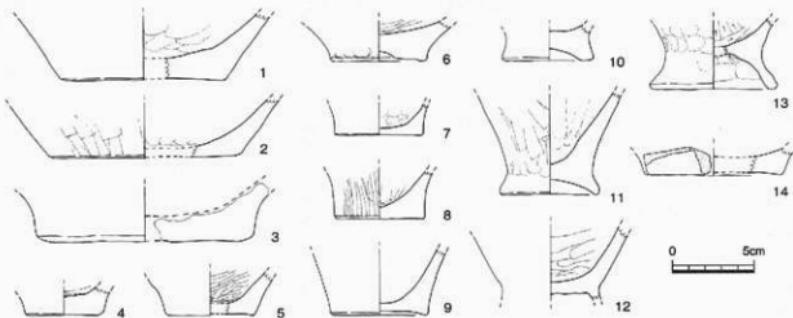


図57 A区 SR-400①層出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

DV-44区の①a層でも下部～中部から出土したが、DV-44区の中部やDU-43区の中部～上部から出土した破片と接合する。11も、DS-43・44区①a層下部と上部、DT-43区①a層上部、DS-42区SD-301③層下部などの破片が接合する。13も、DV-43区①a層下部と中部～下部から出土した破片が接合する。そこで、①a層出土土器として一括して報告する。

①a層からは古代、古墳時代、弥生時代、縄文時代の遺物が出土している。

古代後半の遺物としては、土師器、黒色土器、瓦がある(図56-1～20)。図56-1・2は土師器皿、3～13は土師器壺。1・2の外底面はヘラ切り離し。3は非常に薄手のつくりで、灰白色に焼き上がる。6の器壁の芯部には黒色、8の器壁の芯部には灰色の黒化層が残る。9・13の外底面はヘラ切り離しと考えられるが、不確実。11は二次的な火熱を受けて、器面が赤変する。14～17は土師器塊である。14・15は輪高台、16・17は厚い円盤高台がつく。16は、内面に不定方向の静止ナデ仕上げ、外面に回転横ナデを施す。外底面は回転ヘラ切り離しの後にナデ仕上げる。17はDT-42・43区SD-301の③層出土の破片と接合する。内面は回転横ナデ、外面は荒れが著しく調整不明。外底面は回転ヘラ切り離し。図56-18は黒色土器の内黒の壺である。外面にも不整形に黑色化した部分がみられる。19・20は須恵質の瓦。19は平瓦で、端面・側縁はヘラ切り。凸面には格子タタキ目、凹面には部分的に布目压痕が残る。20は丸瓦で、凸面はナデ。凹面には布目压痕、端面に平行する紐圧痕が残る。

古代でも奈良時代の前半期の遺物として須恵器がある(図56-21～30)。21は、蓋の摘み部の破片で、赤焼き須恵器である。22～28は、高台付き壺の高台部の破片。26を除き、いずれも内外面ともに回転横ナデで仕上げる。また、26も赤焼き須恵器で、器壁の芯部には黒色の黒化層が残る。28は高台付きの壺の可能性も残す。外底面には回転ヘラケズリの痕跡が残る。29は鉢。外面には成形時の指頭圧痕が全面に残り、内面は幅の狭いヘラ状工具でケズリに近い強いナデ調整を施す。口縁端面はヘラ状工具で小さく面取りされる。30は皿で、胴部内外面～内底面は回転横ナデを施す。外底面は荒れが進み調整不明である。

図56-31・32は古墳後期の須恵器である。31は安定感のある壺の丸底片、32は胴部破片。

また、量は少ないが、図56-41の壺のように、古墳前期初頭の遺物もみられる。口縁部周辺は横ナデ。胴部外面は粗い刷毛目調整、内面はヘラケズリを施す。

以上を除くと、①a層から出土した遺物は弥生土器が圧倒的に多い(図56-33～40・42～45、図57-1～14)。いずれも弥生中期後葉～後期初頭に比定できる。

図56-33～35は壺の口縁部片である。33は口縁端部を拡張し、端面に4条の沈線状の凹線文を巡らした後に、ヘラ状工具で細く浅い刻目を凹線間に施す。34も口縁端部を上方に拡張し、端面に1条ずつ太く深い沈線状の凹線文を2条巡らす。35は、口縁端部に粘土を貼り付けて拡張し、端面に沈線状の凹線文を4条施す。その後、部分的にヘラ状工具を押捺して細く浅い刻目を施している。36は、屈曲部以下が膨らむこ

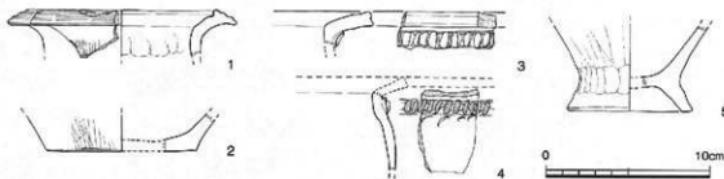


図58 A区 SR-400②a層出土遺物実測図（縮尺1/3）

とから、高坏部の口縁部片と考えた。37は壺の頸部破片。頸部の付け根に粘土紐を貼り付けて、指頭で押し潰すように横長の大きめの刻目を施す。内面は二次的な火熱を受けて、器面が脆くなっている。器壁の芯部には厚く黒化層が残る。

38~40は壺の口縁部片である。38は、口縁端部を肥厚させて摘み上げた端部をつくる。39は小型壺で、口縁部を上下に小さく拡張し、端面に3条の凹線文を施す。40は、口縁部下に断面三角形の突帯を貼り付けて、平織りの布を巻いた指頭で押し潰すように刻目を施す。

42は小型高坏の坏部破片である。坏部上半～口縁部に8条の沈線文を凹線文風に巡らす。43は小片であるが、脚台付き鉢の口縁部破片と考えた。口縁直下に沈線状の凹線文を巡らす。3条を確認できる。44は高坏の坏部口縁部の破片と考えた。口縁上面に粘土を貼り付け、突出した形状の口縁部に成形成する。口縁端部に細いヘラ状工具を押捺して密に小さな刻目を施す。45は、ジョッキ形土器の把手の可能性が高い。横断面形は外側がわざかに平らになる梢円形を呈する。丁寧なナデ仕上げが施されている。

図57-1~13は底部片。1~3は大型壺の平底の破片である。1・2の外面～外底面には黒斑が生じている。3の内面は焼成が不良なために剥落する。内面～器壁の芯部は黒変したままである。4~6は鉢または壺の平底の破片。4の外面～外底面は二次的な火熱を受けて赤変する。5の外面～外底面には黒斑が生じている。6の外底面は、縁部に粘土を指頭で押さえ、貼り付けるため、押し潰されている。外底面中央には不整円形の窪みがつくられる。7~13は壺の底部破片。6~8は平底、10・11は上げ底、12・13は脚台状の上げ底である。7は外面～外底面が二次的な火熱を受けて赤変する。11の外面は二次的な火熱を受けてオレンジ色に変色する。内面は黒変のまま。13の内面に

は煮魚の跡と考えられる炭化物が付着する。

これらの弥生中期後葉以降の遺物に加えて、縄文土器が出土している（図57-14）。やや上げ底ぎみの底部破片で、外底面にはケズリ調整を施す。他は荒れが著しく調整不明である。

この他、磨製石臼丁（図66-1）と、石斧と考えられる破片（図66-2）が出土している。1は、片岩製で、上半を被損した石臼丁を両刃を斜めに磨き落として小型品として再生している。2は扁平な片岩製で、頭部にあたると考えられる上端面に横方向の研磨痕跡が残る。上面は自然風化面が残り、裏面は欠損・剥離している。

2) ②層出土の遺物

②層は、上部～中部の②a・b・d層、下部の②c・e・h～m層に分けて、遺物を取り上げた。なお、微高地縁辺に堆積した②f・g層からは遺物は出土していない。以下、②a層の遺物を図58、②b～m層の遺物を図59、②b層の遺物を図60、②i～m層の遺物を図61、②e層の遺物を図62・63に図示した。

②a層から出土した遺物は、いずれも弥生中期後葉～後期初頭の遺物である。図58-1・2は壺、3～5は壺である。1は、口縁部を肥厚させ、端面に凹線文を1条ずつ巡らす。凹線文の幅は一定していない。2は壺の平底の破片。底部縫面から外底面にかけて不整形な黒斑が生じている。3は口縁屈曲部に粘土紐を貼り付けて爪で押し潰すように刻目を施す。4は肩部破片で、口縁屈曲部に押しつぶしたような三角形突帯を貼り付け、刷毛目工具の小口部を押捺して刻目を施す。突帯の下方には爪を押しつける。5は脚台状の上げ底。

②b～m層から出土した遺物は弥生土器が圧倒的に多いが、少量の古墳後期～古代の遺物が含まれている。図59-1は土師器坏の破片である。2は土師器の柱状高台土器の破片。ともに古代後半の遺物である。3～

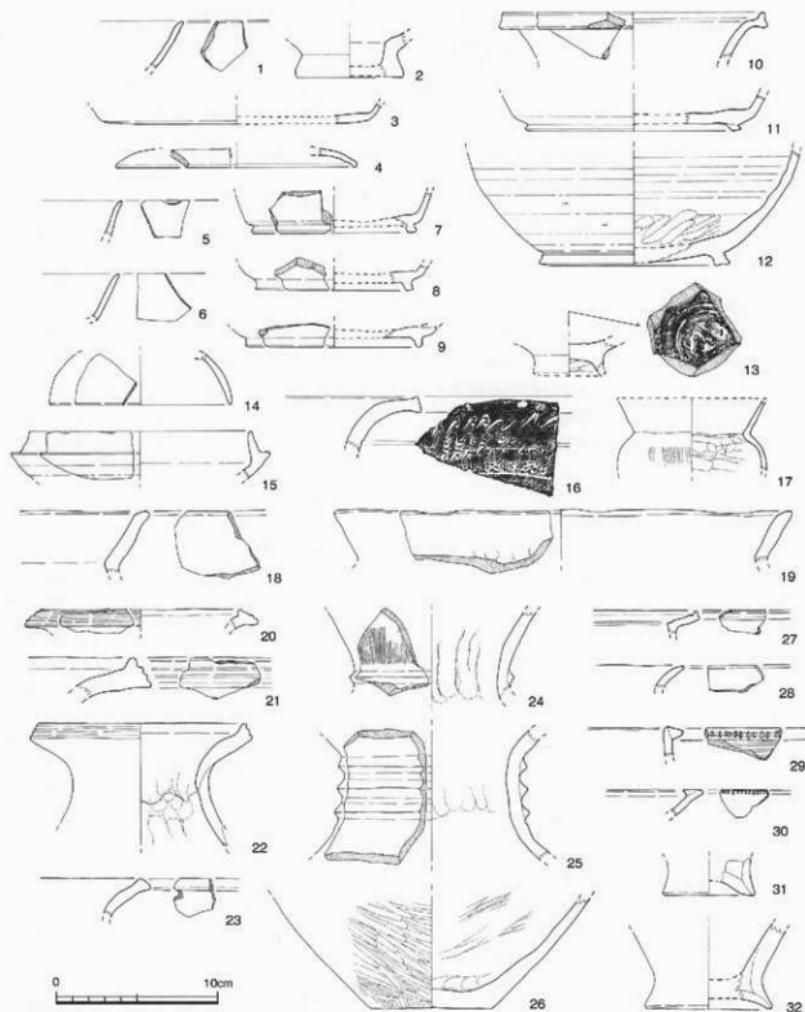


図59 A区 SR-400② b ~ m層出土遺物実測図（縮尺1/3）

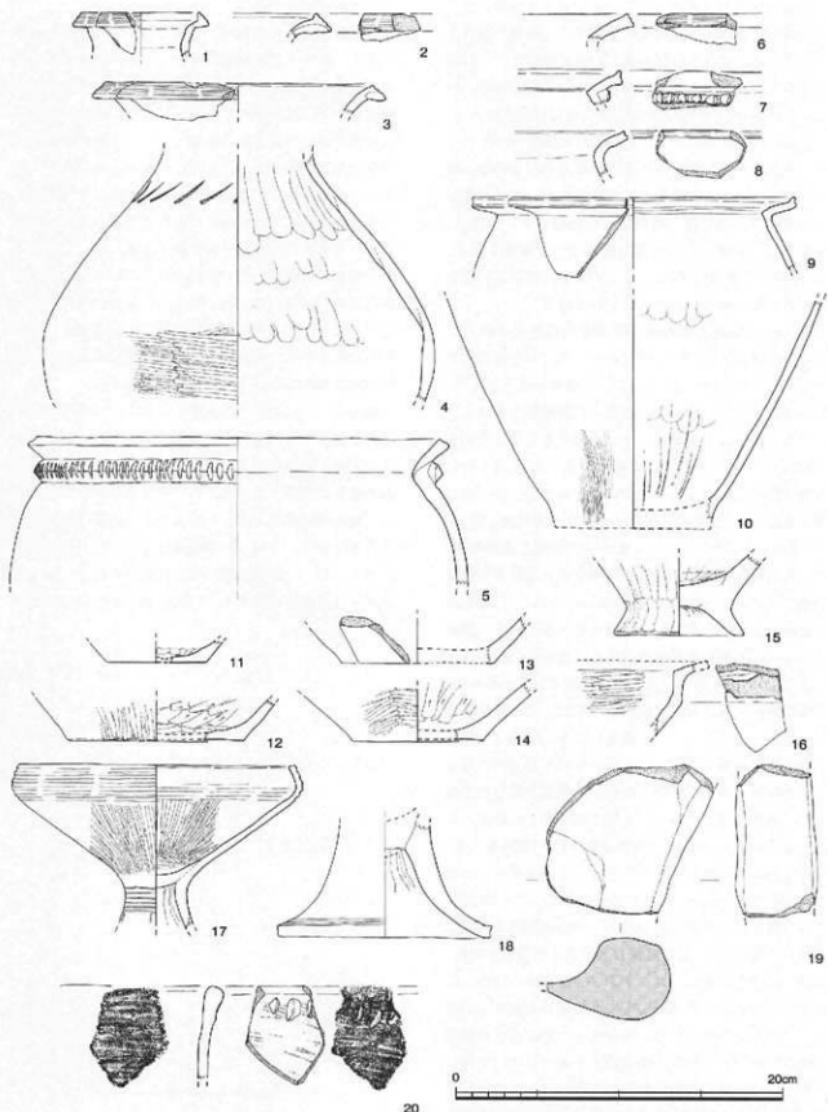


図60 A区 SR-400② b層出土遺物実測図（縮尺1/3）

9は奈良時代の須恵器である。3は皿、4は蓋、5～9は高台付き壺。7は焼成は不良で、土師質の焼き上がりである。10は、口径から広口壺と判断した。口縁端部を上方に摘み上げる。内面には自然釉が付着。11は高台付き壺の大型品。胴部と高台周辺は回転横ナデ。内底面は指頭によるナデ。外底面には回転ヘラケズリの痕跡をわずかに観察できる。12は高台付きの壺の破片である。外面の胴部上半は回転横ナデ、下半は回転ヘラケズリ、高台部～外底面は回転横ナデ。内面は、回転横ナデの後に、内底面を指頭でナデ調整を施す。13は外面に回転横ナデを施す。内底面には同心円文をもつて具で押捺した後にナデ仕上げる。

図59-14～16は古墳後期～終末期の須恵器の破片である。13は内底面に同心円文をもつて具を押捺して押された後にナデ仕上げる。14は短頸壺の蓋と考えた。15は壺身。16は大型壺の口縁部。口縁端部を小さく上方に摘み上げる。頸部の上半に沈線を巡らし、その上方に櫛引き波状文を乱雜に施文する。図59-17～19は古墳中期の土師器である。17は小型丸底壺、18・19は壺である。19の器壁の芯部には淡黒色の黒化層が残る。

図59-20～32は弥生土器である。28は弥生後期終末、29・30は前期末、以外は弥生中期後葉～後期初頭の時間幅の中で捉えられる。20～26は壺。20は、口縁端面を拡張し、端面に沈線状の四線文を4条巡らす。器壁の芯部には灰黒色の黒化層が残る。21も、口縁上端を拡張し、端面に1条ずつ沈線状の四線文を3条巡らす。四線の幅自体もそれぞれ異なる。22は、口縁端部を横ナデで上方に摘み上げて、端面に2条の凹線文を一気に施す。口縁部と周辺には赤彩の痕跡が部分的に残るが、赤彩は化粧土の可能性が高い。頸部の器壁の芯部には一部黒化層が残る。①a層下部などから出土した破片とも接合する。24は天地が逆転する可能性もある。25は頸部中央に断面三角形突帯を3条巡らせる。26は大型壺の平底の破片。内面は黒変のまま。27～29は壺。27は口縁端部を上方に摘み出し、口縁屈曲部の内面に沈線を1条巡らす。28の器壁の芯部には黒化層が残る。29は、口縁部に断面「コ」字形の突帯を貼り付け、先端にヘラ状工具で等間隔に密に浅い刻目を施す。口縁直下には3条のヘラ引き沈線が残る。30は高壺の壺部口縁部の破片。口縁端部上面に粘土を貼り付け、突出した形状の口縁部に成形する。口縁端部にヘラ状工具で密に浅く小さな刻目を施す。内面は淡い黒色の黒変部が残る。31は上げ底、32は脚台状の上げ底である。と

もに壺の底部片である。

図60に示した遺物は②b層としてとり上げた遺物である。弥生土器が圧倒的に多く、古代後半の土師器や繩文土器がごく少量混じる。図60-1～3は壺の口縁部片、4は頸部片である。1は、口縁端面に沈線状の浅く細い四線文を3条施文する。赤褐色の化粧土を部分的に観察できる。2は、口縁部上面に粘土を貼り付けて肥厚させ、端面に波板状の四線文を3条施文する。1と同じく、赤褐色の化粧土が部分的に観察できる。3も、口縁端部下方に粘土を貼り付けて肥厚させ、端面に凹線状の浅い沈線を3条巡らす。器壁の芯部には淡い灰色の黒化層が残る。4は頸の付け根に刷毛目工具の小口を押捺して短斜線文を施文する。肩部外面には不整形の淡い黒斑が残る。4はDS-42・43区SD-301①層から出土した破片と接合する。

図60-5～9は壺の口縁部片。5は、口縁屈曲部に丸みをおびた断面三角形の突帯を貼付して、刻目を施す。内外に黒斑が点々と見られ、接合する胴部や口縁部の破片で黒斑が途切れたり、黒斑が破断面までびる。焼成時破損品と考えられる。6は口縁端面に凹線文を2条施す。7は、口縁端部を横ナデで上方に摘み上げている。口縁屈曲部に粘土縁を貼り付け、爪で時計回りに刻目を押捺する。口縁内面の屈曲部には沈線

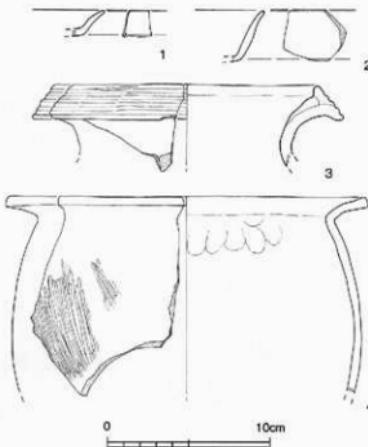


図61 A区 SR-400② 1~m 層出土遺物実測図
(縮尺1/3)

を1条巡らす。8は、口縁端部を強く横ナデするため、口縁端部がわずかに上方に跳ね上がる。9は、口縁端部を横ナデで上方に跳ね上げ、端面に浅い断面U字形の凹線文を1条施す。口縁屈曲部の内面には沈線を1条巡らす。10は、壺の底部近くの脇部下半の破片。外面には部分的に幅1.0~1.5cm間隔の細密条線の掠過痕が観察できる。内面の2ヶ所に横方向に列状に指頭痕がみられる。内底面近くには線条痕が残る。内面は全面黒変したまま。12~14は大型壺の平底の破片。14の外面上には赤褐色の化粧土が部分的に残る。底部側面から外底面にかけて不整形な黒斑が生じている。15は脚台状の上げ底の壺である。

図60~16~18は高坏である。16は坏部の小片。口縁屈曲部の外面上は薄く器面が剥がれ、外面上には不整形の黒斑が生じている。17は②b層の中でも比較的まとまって出土し、坏部を中心とする大形破片に復元できた。坏部は、内外面にミガ

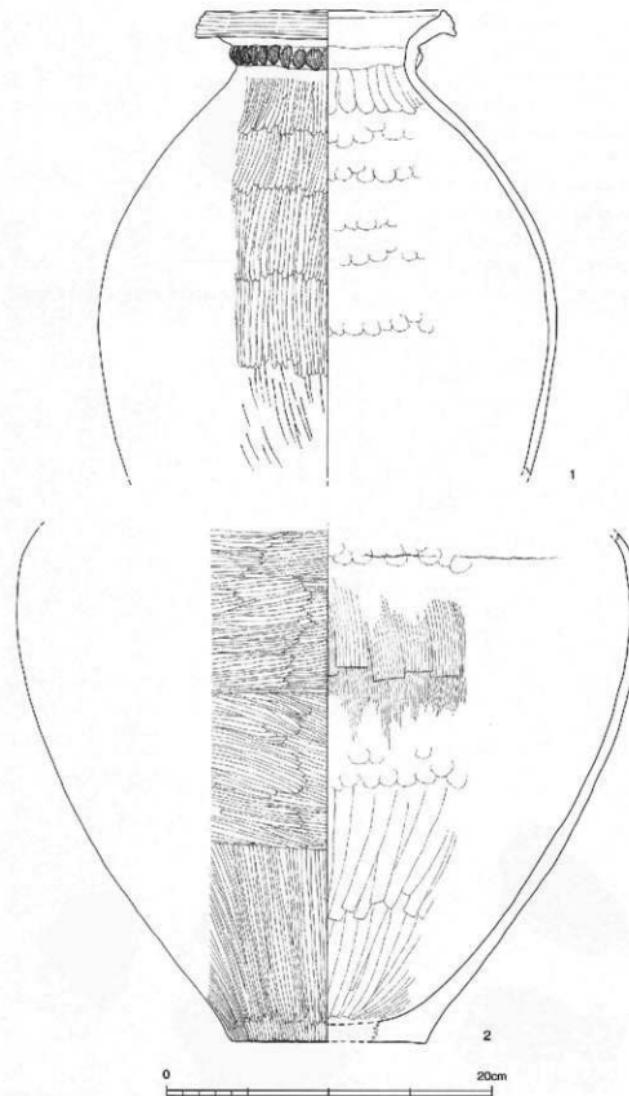


図62 A区 SR-400(2)e層出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

キを施し、口縁部付近と坏部と境界部を横ナデ調整する。口縁外面には、5条の凹線文を施す。1条ごとに深さが異なる。坏部との境界部には細い沈線文を6条巡らす。坏部には6方向に矢羽根透かし孔をあける。脚部内面には絞り痕が残る。18は小型・低脚の高坏脚部破片である。脚裾には2条の沈線が巡る。とくに

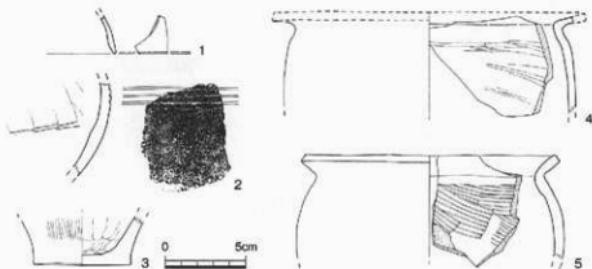


図63 A区 SR-400②e層出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

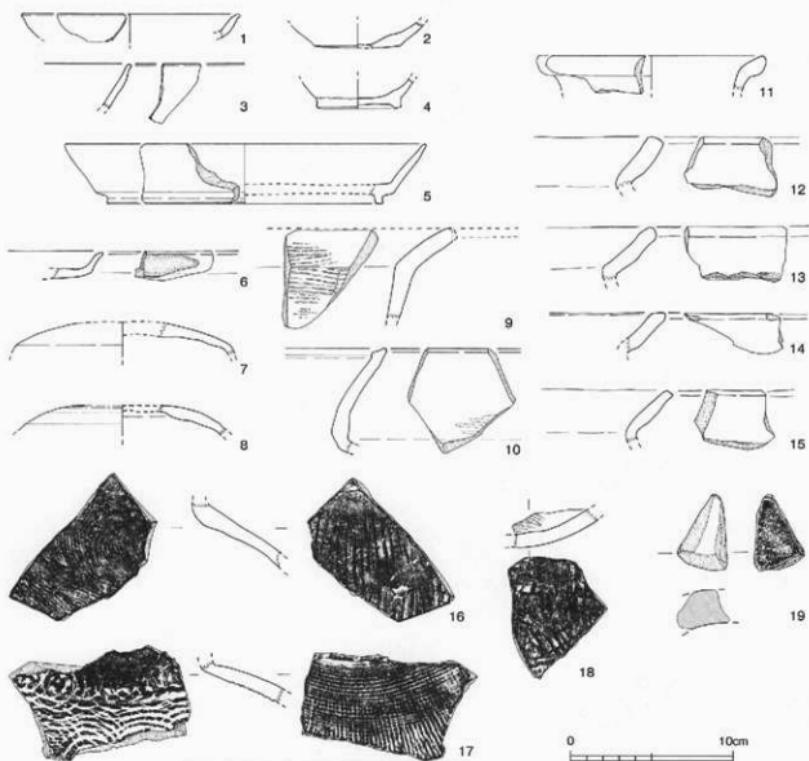


図64 A区 SR-400③層出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

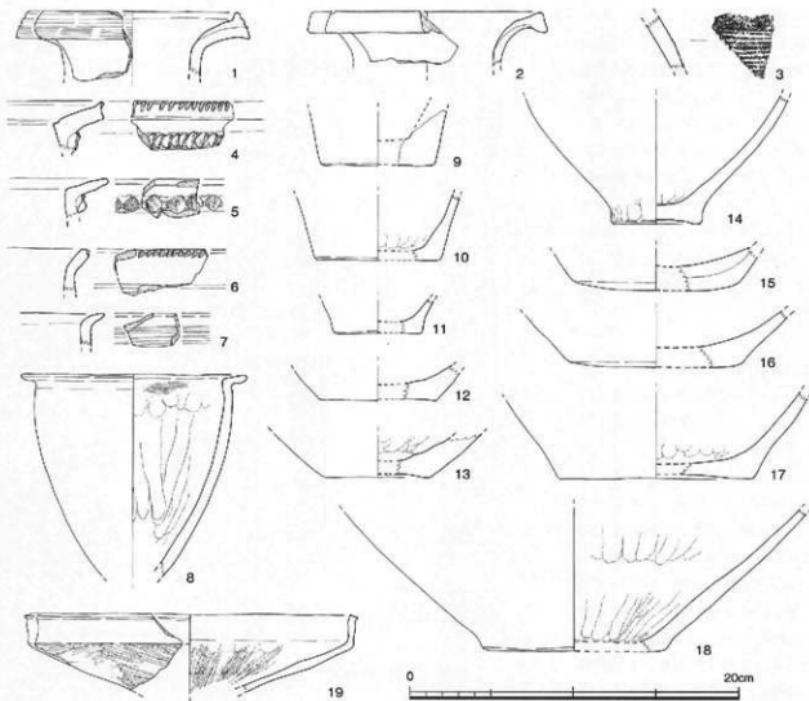


図65 A区 SR-400③層出土遺物実測図2（縮尺1/3）

上方の沈線は深く鋭い。脚端内面には幅3~4mm前後の平坦面ができる。充填円盤が接合面で剥離。内面から脚端部は黒変のままである。

図60-19は、砂礫混じりの砂質シルトが焼けかたまた塊である。側面には湾曲する面が形成される。片面側には大きな痘みがつくられる。造り付け窓などの焚き口周辺の残片か？

この他、図60-11は土師器皿の底部破片と考えられる。20は純文土器の深鉢の口縁部破片である。口縁部直下に爪による押捺文を施す。内外面ともに貝殻条痕調整で、器壁の芯部には厚く黒化層が残る。

図61-1・3は②i~②k層、2・4は②l・②m層から出土した。1は土師器皿で、内面には赤彩の痕跡がごくわずかに残る。2は土師器壊である。内面のごく一部にミガキと赤彩の痕跡が残る。胎土はかなり

精選された粘土を用いる。3は弥生中期後葉の壺。口縁端部を上下に拡張し、4条の沈線状の凹線文を1条ずつ巡らす。4の内面には口縁部の折り曲げ部に指頭痕が残る。

図62-63は②e層から出土した遺物である。図62-1・2は壺。1は、口縁部へ頸部が歪み、准定口径は15~17cm。口縁端部を横ナデで上下に拡張し、端面に断面U字形の凹線文を3条巡らす。頸部の付け根に粘土紐を貼り付け、平織りの布を巻いた指頭で刺目を施す。胴部中位~上半の内面には、指頭痕が帯状に集中する部分がみられる。黒斑が生じている破片と通常の焼き上がりの破片が接合・復元できる焼成時破損1種c土器である。2は、指頭痕が帯状に残る部分が2ヶ所みられ、胴部中位には接合線が不明瞭ながら残る。底部の内外面に不整形の黒斑が生じている。

図63-1は須恵器。器壁が薄く、小型品と考えられるので、短頸壺の蓋と考える。古墳後期の須恵器である。2は弥生前期の壺の胴破片である。胴部中位に3条の浅い沈線が巡る。3は弥生中期後葉の壺の平底破片。4は壺の肩部破片。内面には草本類の束を乱雑になでつけたような痕跡が観察できる。5の器壁の芯部に黒化層が厚く残る。4・5は弥生後期前葉に比定できる。

3) ③層出土の遺物

③c～e層では遺物は出土していない。③a・③b層を一括して報告する(図64・65)。

図64-1は土師器皿である。2は土師器環で、外底面は荒れが進み、切り離しの方法は明らかではないが、部分的に砂粒が移動している部分を観察でき、回転ヘラ切り離しの可能性が高い。3～5は奈良時代末～平安時代初めの須恵器の高台付き環である。4の内面には厚く自然釉が付着する。6は土師器の盤で、内面は赤塗り。これも奈良時代末～平安時代初めに比定できる。7・8は古墳後期の須恵器の壺蓋である。9は古代後半の土鍋。10は古墳後期の壺。口縁端部内面を小さく折り返して段部をつくる。11も古墳後期の須恵器の壺と考えた。口縁端部を肥厚させ玉縁状に形成する。12～14は古墳中期の土師器壺の口縁部片。15は弥生後期中葉～後葉の壺で、器壁の芯部に厚い黒化層が残る。16～18は古墳後期の須恵器。16の器壁の芯部には小豆色の黒化層が残る。19は土師質の丸瓦の破片である。凹面側に布目痕跡がわずかに残る。

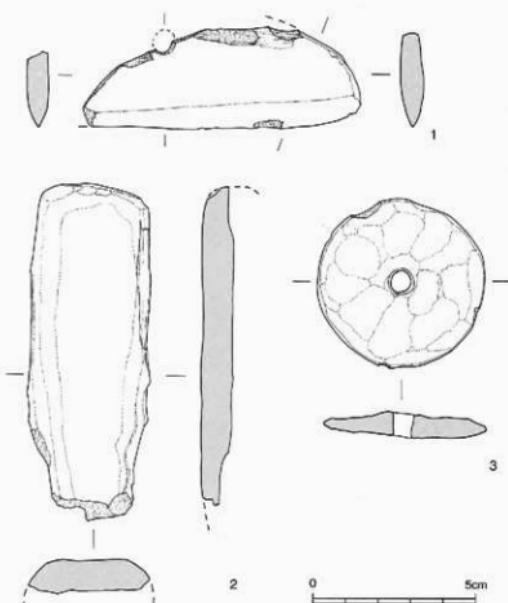


図66 A区 SR-400①・③層出土遺物実測図 (縮尺2/3)

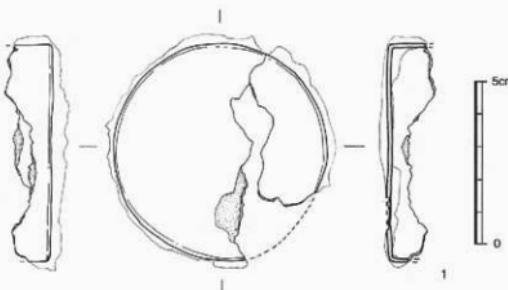


図67 A区 SR-400③層出土遺物実測図3 (縮尺2/3)

図65-1は弥生中期後葉、2は中期中葉、3は前期の壺である。1は、口縁内面に粘土を貼り付けて、口縁端部を拡張。端面に2条1単位の4条の凹線文を巡らす。上方の2条は太く深いが、下方の2条は浅く細いため部分的にしか残っていない。2は、口縁内面に薄く粘土を貼り付けて、下垂口縁をつくる。口縁端面には、浅く細い沈線状の窪みが数あるようにみえる。3は、小片であるが、器体の傾き具合から、壺の肩部と判断した。外面には3条1単位で3単位、計9条の櫛書き文を施す。

図65-4～8は壺。4は、口縁端部を横ナデで上方に擠み上げて、端面に刷毛目工具の小口部を押捺して刻目を施す。口縁屈曲部に粘土紐を貼り付け、爪で時計回りに刻目を押捺する。口縁内面の屈曲部には沈線が1条巡らす。5は、「く」字形口縁の屈曲部に断面三角形の突帯を貼り付け、平織りの布を巻いた爪先を押捺して太い刻目を施す。4・5は弥生中期後葉に比定できる。6は如意形口縁の壺である。口縁端部に刷毛目工具の小口部を押捺して刻目を施す。弥生前期。7は口縁部直下に櫛書き沈線文を巡らす。4条を確認した。弥生前期末に比定できる。8は小型壺で、弥生中期中葉のものか。

図65-9～18は底部片。9～11は壺、12～18は壺である。9・10は平底で、直線的にひろがる胴下半をも

ち、弥生前期末～中期初頭に比定できる。9は粘土接合面で剥離している。11は弥生中期後葉の小型壺と考えられる。二次的な火熱を受けて全面赤変する。12～14は、若干の上げ底。12は胎土に比較的大きな石英粒を含む点が中期の土器とは異なる。弥生前期～中期初頭のものと考えておく。14の胴部下半から外底面にかけて黒斑がみられる。15は、内底面側に粘土を貼り付けた分厚い凸レンズ底で、弥生後期後葉のものと考える。16も、凸レンズ底で、器壁の芯部には淡黒色の黒化層が残り、外底面には部分的に黒化層が染み出した黒変部が残る。これも弥生後期後葉に比定できる。17・18は弥生中期後葉～後期前葉の大型壺の底部片である。18の外底面周辺および内面には黒斑が生じている。

図65-19は、高坏の坏部片である。坏部外面は暗文を意識したミガキ仕上げ。胎土には角閃石が混じり、撒入品と考える。坏部の器壁の芯部には部分的に黒化層が残る。口縁端面の一部には黒斑がみられる。

図66-3は土製の紡錘車である。直径5.1～5.15cm、孔径0.75～0.8cm、重量18.4gを測る。指頭圧痕が全面に残る。

図67は、鉄製の容器の蓋である。扁平な天井部から口縁が直角に延びる。口縁端部は残存しない。鍛造品と考えられる。

IV A区の遺構・遺物の記録（その2）

-微高地上的遺構の調査-

1 出土遺構の概要

A区南半部の微高地には、II-2-③層以下の土層は堆積しておらず、II-2-②層の上層水田を掘り下げるに、基本層序IV層があらわれた。このIV層上面では、II-2-④層の褐色シルトで埋まつた幅が狭い溝状の窪みが斑文状にあらわれ、これに切られる黒褐色系の砂質シルトや、黄灰色・暗黄灰色砂質土・灰黄色等の砂質土や砂質シルトを埋土とする遺構も出土し始めた。II-2-④層の褐色シルトで埋まつた幅が狭い溝状の窪みは、後述するように犁による耕作痕跡である。これを除去すると、

掘立柱建物：15棟（SB-410～424）

土壙：8基（SK-401～404・406～408・425）

溝：1条（SD-405）

構列：1条（SA-409）

その他：柱痕跡や杭痕跡が確認できた柱穴・小穴といった数多くの遺構があらわれた（図版17・19・20）。これらの遺構は、基本層序のIV層上面で確認され、調査区壁面にかかった遺構は、いずれもII-2-②（上層水田）層の下面から掘り込まれている。また、II-2-④（中層水田）層に伴う畠状の耕作痕に切られている。II-2-⑥（下層水田）層以前の遺構と考えられる。

さらに、埋土の特徴から大きく3種に分類できた。

埋土a：黒褐色系の砂質シルト

埋土b：黒褐色系の砂質シルトを主体とし、黄灰色・暗黄灰色砂質土・灰黄色等の砂質土や砂質シルトが若干混じる

埋土c：黄灰色砂質土・黄灰色砂質シルト・暗黄灰色砂質土・暗黄灰色シルト・灰黄色砂質土などの灰色みをおびた堆積土を埋土の主体

したり、塊が混じる

埋土aの遺構からは、弥生時代～古墳時代の遺物が出土し、当該期の遺構と判断できる。これに対して、埋土bの遺構は、弥生時代の遺物ばかりが出土する例もあるが、古代の遺物が混じることもある。こうした灰色みをおびた堆積土は、下層水田（II-2-⑥）層やSR-400最上層に堆積した砂疊混じりの灰茶色土層から供給されたものと考え、古代の遺構と判断した。埋土cの遺構は、中層水田（II-2-④）層よりも上位の層準から掘り込まれた遺構で、古代後半～中世の遺構である。以上の埋土類型ごとの主要遺構は、以下の通りである。

埋土a：掘立柱建物5棟（SB-410～412・414・422）、
土壙2基（SK-402・403）

埋土b：掘立柱建物3棟（SB-413・415・423）、
土壙1基（SK-404）

埋土c：掘立柱建物7棟（SB-416・417～421・424）、
土壙5基（SK-401・406・407・408・425）、
構列1条（SA-409）、溝1条（SD-405）

なお、18次調査区内に位置する15次調査8トレンチでは、SP-1・2・4・SD-3が出土している。SP-4は18次調査のSP-550の一部である。また、SD-3はIV層の一部をII-2層と誤認していたため欠番とし、SP-1をSP-441、SP-2をSP-442と遺構番号を振り替えた。また、18次調査の概要を「愛媛大学埋蔵文化財調査室年報—1997・1998年度—」で報告しているが、遺物整理を進める過程で、掘立柱建物と土壙SK-406の一部について訂正・追加が必要が生じ、卷末の遺構一覧表に示したように遺構番号を振り替えた。

2 耕作痕跡

前述したように、調査区南西部のDV-DW-41・42区、DX～DZ-41～44区では、IV層上面で斑文状にII-2-

④層の褐色シルトが残る（図版11-1・2）。これを精査すると、ほぼ同じ方向でのびる溝状の窪みが一定の

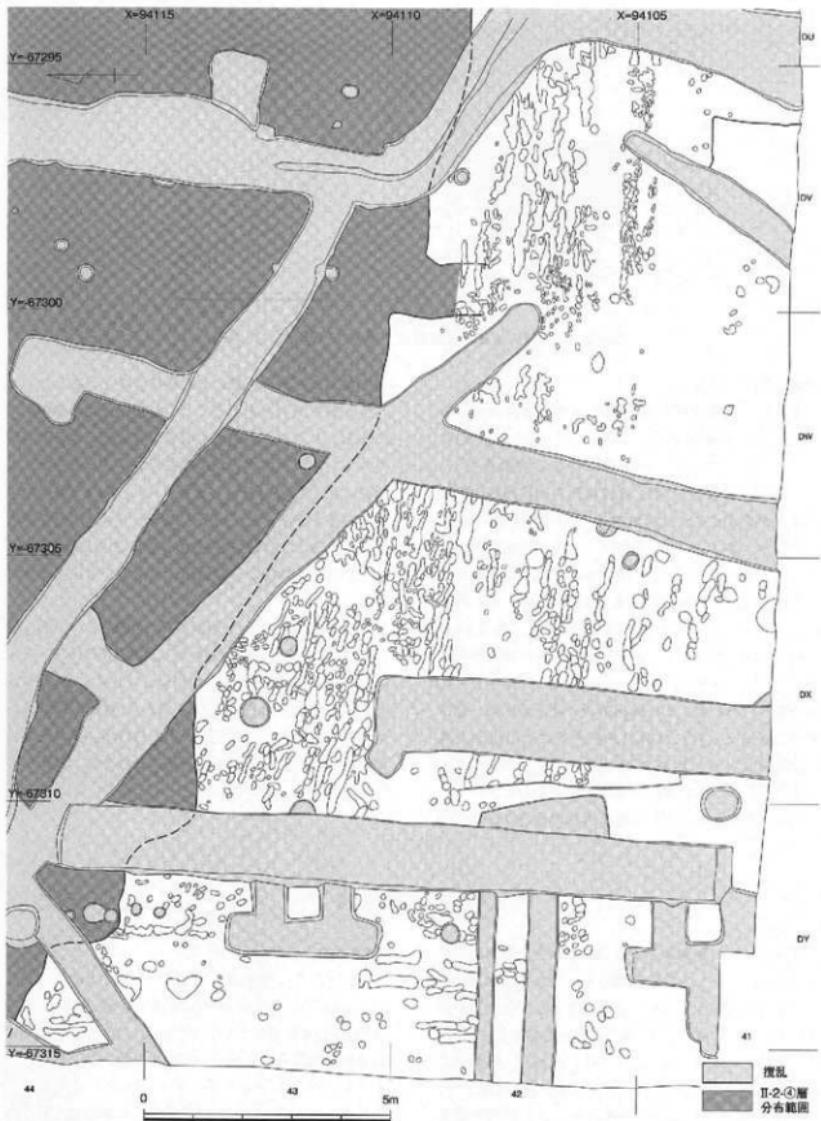


図68 A区 DV・DW-41・42区、DX～DZ-41～44区の耕作痕跡（縮尺1/100）

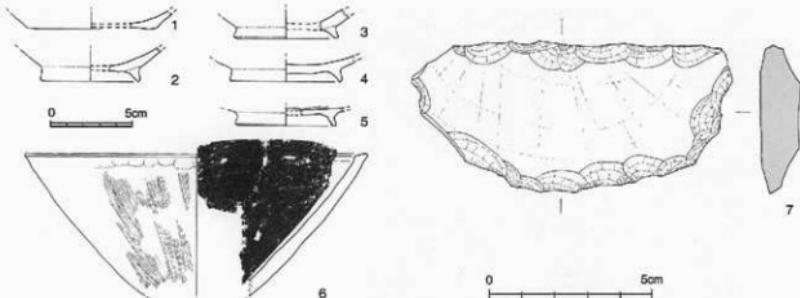


図69 A区拝による耕作痕跡出土遺物 1 (縮尺1/3、2/3)

間隔で並ぶ(図68)。

こうした基本層序IV層上面で出土した溝状の窪みは、DV～DX-42区周辺、DX-43区～DY-43・44区周辺、DY・DZ-41～43区で、それぞれ異なる特徴を持つ。DV～DX-42区周辺では、ほぼ東西方向に細長い溝状の窪みが集中する。大きな窪みは長さ1.7～1.8m、幅15～25cm、深さ2～5cmを測る。窪みの底面は凹凸が著しい。また、DV-41・42区境界部のように、小さな窪みが5mほど東西方向に連なる例もある。これらが一定の間隔で並ぶことを読み取れる。DX-43区～DY-43・44区周辺では、南東～北西方向の窪みが連続する。幅10～20cm、深さ2～5cmを測り、長さ1～1.5mの窪みもあるが、30～60cm前後の窪みが南東～北西方向に連なる。DY・DZ-41～43区では、出土した溝状の窪みは少ないが、長さ90～120cm前後、幅10～20cm、深さ3～5cmの南北方向の溝状の窪みが目立つ。

このように、ほぼ同じ方向で溝状の窪みが一定の間

隔で並ぶことから、犁による耕作痕跡と判断した。II-2・④層を埋土とするので、中層水田と同時期のものである。ところが、中層水田域では縦横に水路が開削されているが、こうした耕作痕跡がみられる範囲では水路は出土していない。上部II-2・②層の上層水田の耕作で多くが削られているとはいっても、水路が開削されているとすれば、底面近くが遺存するはずである。こうした検出状況から畠造構の可能性を考えておきたい。

耕作痕跡からは、土器部の坏(図69-1)や塊(図69-2～4)、瓦器塊(図69-5)、弥生土器(図69-6)、石庖丁の未成品(図69-7)が出土している。その中で、6は口縁部を折り曲げて段を造る。口縁部外面には、その際に残された指痕がわずかに残る。7は安山岩の縱剥ぎの剥片を利用して、周縁に剥離を施し整形している。

3 掘立柱建物

A区南半部の微高地では15棟の掘立柱建物が出土している。しかし、全形が明らかにできた建物は少なく、柱痕跡が確認できた柱穴を基準として復元した建物である。その点で、やや強引な復元も含まれている。また、埋土の特徴をみると、SB-410～412・414・422の5基は埋土a、SB-413・415・423の3棟は埋土b、SB-416・417～421・424の7棟は埋土cの柱穴で構成される掘立柱建物である。

SB-410

DY-44区では柱痕跡を確認できたSP-541が出土した。周囲で共通する形状・大きさの柱穴を探ると、SP-559、15次調査8トレンチで出土したSP-1がある。北側の塗壌部分にもう1つの柱穴を想定し、15次調査8トレンチで出土したSP-1をSP-441と遺構番号を振り替えて、SP-441・541・559から構成される掘立柱建物を復元した(図71)。梁間1間、桁行1間の建物で、

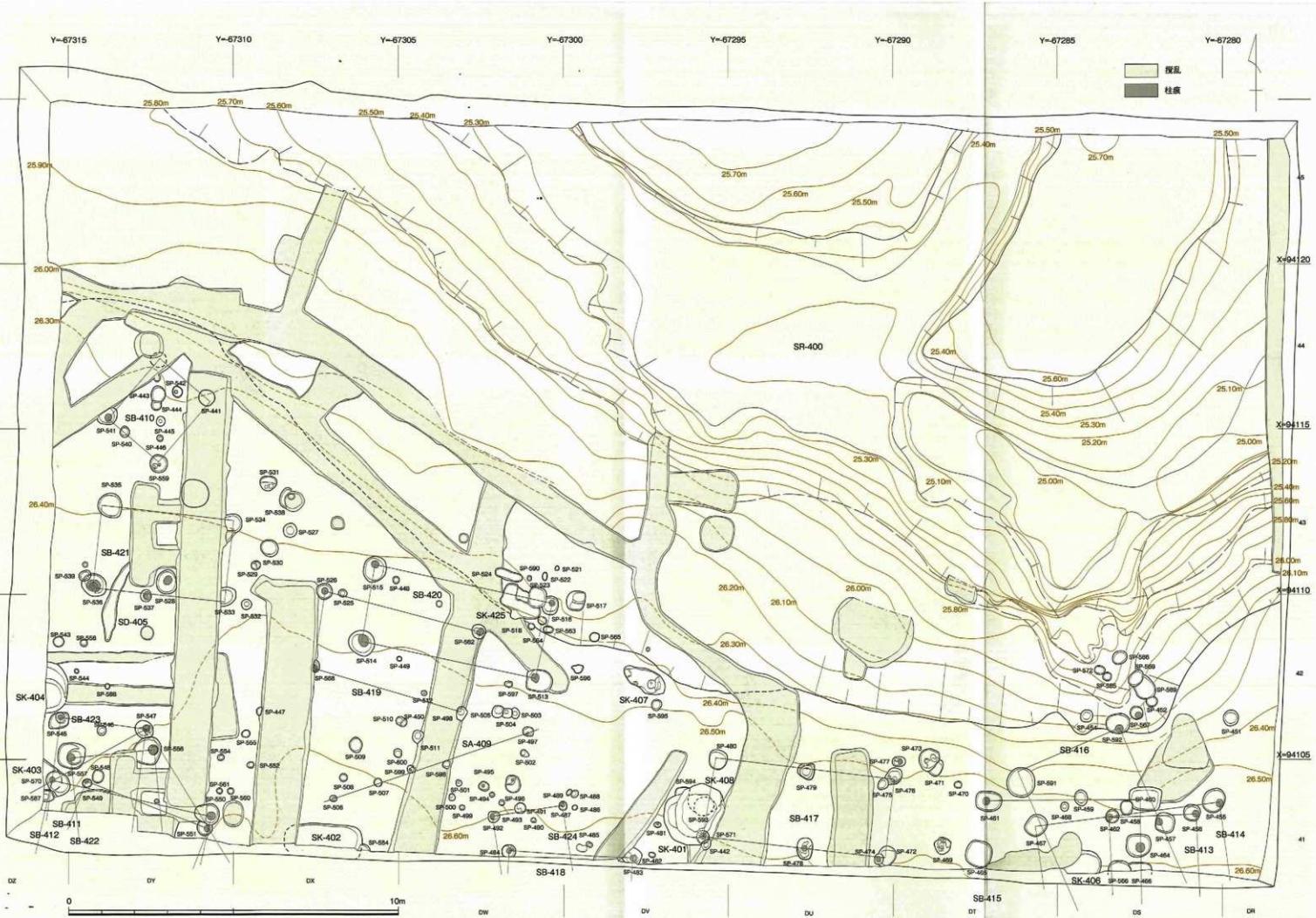


図70 A区 SR-400および微高地上の造構配置図（縮尺1/100）

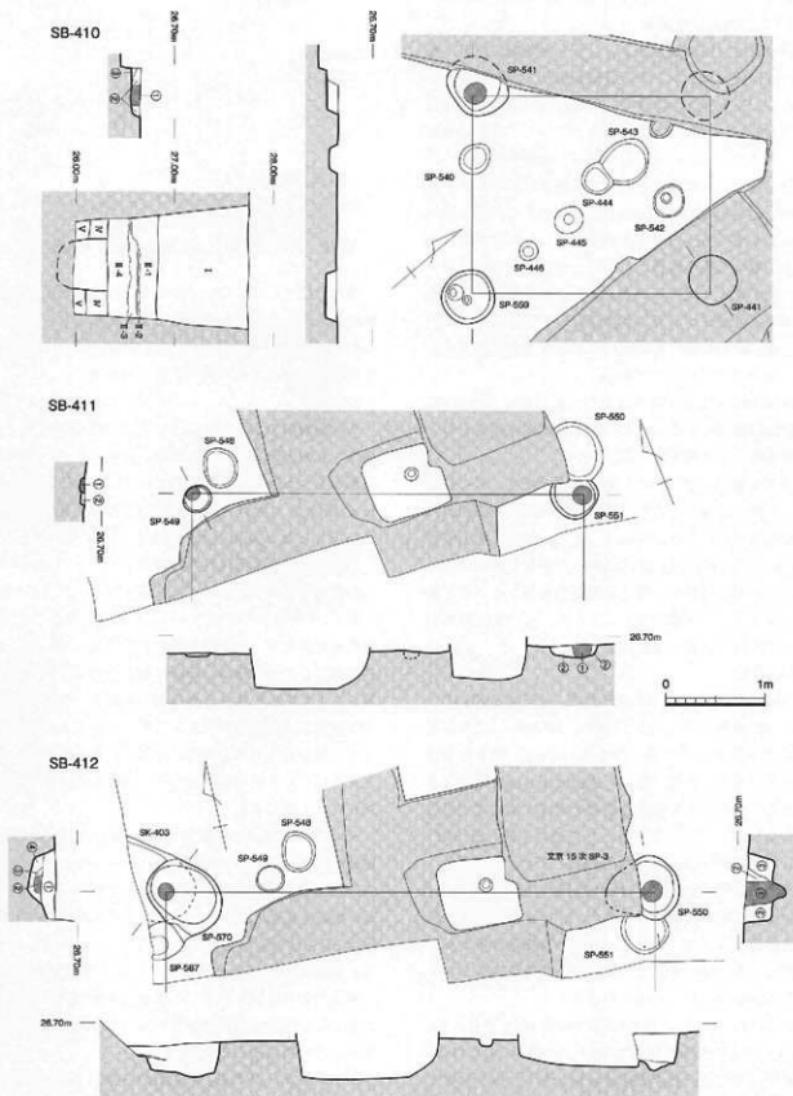


図71 A区 SB-410～412遺構実測図（縮尺1/50）

梁間長はSP-541・559間で2m、桁行長はSP-441・559間で2.4m前後を測る。

SP-441は、15次調査8トレンチを再発掘したが、表土剥ぎ作業中にトレンチの肩部が崩れて、全形は不明である。推定径55cm前後で、円形の掘り形をもつ。15次調査時には深さ35cmまで調査していた。埋土は黒褐色シルトで、にぶい黄褐色シルトの小塊が混じる。

SP-541は、北西部分を塗壕で破壊されているが、径65cm、深さ10cmの不整円形の掘り形をもつ。掘り形内の南よりで径21cmの立柱痕跡を確認した。柱痕跡にある①層は黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる。②・③層は掘り形埋土。②層は黒褐色砂質シルトで、親指先大の黄褐色シルト塊が混じる。③層は掘り形底面にみられる黒褐色砂質シルトのレンズ状ブロックである。

SP-559は径55cm、深さ16cmの円形の掘り形をもつ。柱痕跡は確認できなかった。埋土は黒褐色砂質シルトに黄褐色シルト塊が混じる。

出土遺物は、SP-441から弥生土器の細片、SP-541の掘り形埋土②層などから、弥生中期後葉～後期初頭の甕割部片6点が出土している。また、SP-441埋土中とSP-541の柱痕跡①層には炭化物小片が含まれていた。

以上の出土遺物と、埋土が黒褐色砂質シルトを主体とする埋土aに分類できることから、SB-410は弥生中期後葉前後の建物と考える。

SB-411

A区南西隅のDY・DZ-41区では、後述するSB-412・422・423を構成する柱穴以外に、SP-549・511で立柱痕跡が確認されている。SP-549・511は、掘り形や柱痕跡の大きさがかなり違う。検出面が8cmほど異なるとともに、これらと掘立柱建物を構成する柱穴が周辺にみられないで、SB-411として桁行1間(SP-549・511の柱間隔3.95m)の建物を想定しておく(図71)。

SP-549は径27cm、深さ4cmの円形の掘り形をもち、径14cmの立柱痕跡を確認できた。柱痕跡の①層は、黒褐色砂質シルトで、直径2～3cmの黄褐色砂質シルト塊が混じる。掘り形埋土の②層は、黄褐色砂質シルトと黒褐色砂質シルトが混じり合う。

SP-551は、径48cm、深さ13cmの円形の掘り形をもち、径18cmの立柱痕跡を確認できた。SP-550に切られる。柱痕跡にある①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が多く混じる。

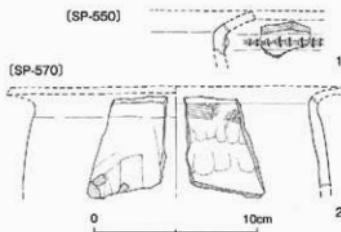


図72 A区SB-412出土遺物実測図(縮尺1/3)

遺物は出土していない。しかし、柱穴の埋土が黒褐色砂質シルトを主体とする埋土aであること、SB-412の柱穴SP-550から切られることから、SB-411は弥生中期後葉を前後する時期の建物と考える。

SB-412

A区南西隅のDY・DZ-41区では、柱痕跡が確認でき、南東～北西方向を向く楕円形で、ほぼ同じ大きさの掘り形をもつSP-550・570が出土している。柱間隔が5mと長いが、桁行1間の掘立柱建物を想定して、SB-412とした(図71、図版24-1)。

SP-550は、西半部は15次調査8トレンチでSP-4とした柱穴である。径65×80cm、深さ26cmの楕円形の掘り形で、やや東よりで径21cmの立柱痕跡を確認できた。柱の先端は尖り、掘り形底面に打ち込まれている。立柱痕跡にある①層は、小礫・小石が混じる黒褐色砂質シルトである。②・③層は掘り形埋土。②層は小礫が少量混じる黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊が点々とみられる。③層は、黄褐色砂質シルトを主体とし、黒褐色砂質シルトや黄灰色砂質土の小塊が点々と混じる。

SP-570は、SK-403の底面で検出した。径80×65cm前後の楕円形の掘り形である。SK-403底面からの深さは14cmを測る。掘り形の北西よりで径16cmの立柱先端の痕跡を確認した。図71に示した土層断面の中で①層はSK-403の埋土、②層はSP-570の立柱痕跡にあたる。黒褐色砂質シルトである。③・④層は掘り形埋土。③層は黒褐色砂質シルトで、黄褐色砂質シルトの小塊が混じる。④層も黒褐色砂質シルトで、黄褐色砂質シルトが薄い縞状にみられる。

出土遺物は、SP-550①～③層から弥生土器16点が出土。いずれも小片で、図示できたのは図72-1だけである。弥生中期後葉～後期初頭。SP-570の柱痕跡②層

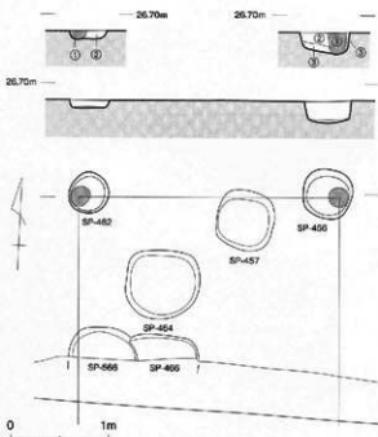


図73 A区SB-413遺構実測図（縮尺1/50）

と掘り形埋土から、それぞれ弥生中期後葉～後期初頭の土器が出土。図72-2は柱痕跡③層から出土した。また、柱痕跡には炭化物小片が点々と含まれている。

以上の出土遺物と、埋土が黒褐色砂質シルトを主体とする埋土aに分類できるので、SB-412は弥生中期後葉～後期初頭の建物と考える。

SB-413

A区南東部のDS-41区では立柱痕跡を確認できた柱穴が集中して出土している。この中で、SP-456とSP-462は、径40～50cmの円形の掘り形をもち、径20cm前後の立柱痕跡を確認できた。梁間1間のほぼ南北方向を向く掘立柱建物SB-413とした（図73、図版21）。梁間の柱間距離は2.6mを測る。

SP-456は、梁間東隅の柱穴で、径49cm、深さ22cmの掘り形をもつ。掘り形東半部で、径20cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡である①層は、黒褐色砂質シルトに径3～5cmの黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。掘り形埋土上部の②層は、黒褐色砂質シルトに親指先大の暗黃灰色や黄褐色の砂質シルト小塊が点々と混じる。下部の③層は黒褐色砂質シルトで、拉げた3～4cm幅の黄褐色シルト塊が混じる。

SP-462は、梁間西隅の柱穴で、径40×42cm、深さ10cmの円形の掘り形をもつ。掘り形西半部で径20cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡である①層は黒褐色砂質



図74 A区SB-414出土遺物実測図（縮尺1/3）

シルト。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルトで、小指先大の暗黃灰色砂質土の小塊が多く混じる。

SP-456①層から胴部破片1点、③層から窓枠の坏部と考えられる破片1点などが出土している。いずれも弥生中期後葉のものと考えられる。SP-462からは遺物は出土していない。

以上の弥生時代の遺物が出土してはいるが、SP-456・462の掘り形埋土は黄褐色や黒褐色の砂質シルト、暗黃灰色砂質土が混じる埋土bであることから、SB-413は古代後半の建物と判断できる。

SB-414

A区南東部のDR～DT-41区で、ほぼ同規模で長軸が北東～南西方向の長円形の掘り形をもつSP-455とSP-467で構成される掘立柱建物を復元し、SB-414とした（図75、図版21）。当初、SP-455とSP-467のほぼ中央に位置するSP-458を加えて桁行2間の建物を想定していたが、SP-455・467の埋土が黒褐色砂質シルトを主体としているのに対して、埋土上部に黄褐色砂質土や暗黃灰色砂質土の塊が多く混じることから、SP-455とSP-467の桁行1間の建物と判断した。桁行はほぼ東西方向を向き、桁行全長は5.63m。SP-455では立柱痕跡を確認したが、SP-467では柱は抜き取られていた。

SP-455は桁行東隅の柱穴で、長軸長76cm、短軸長65cm、深さ15cmの長円形の掘り形をもつ。掘り形東半部の底面に31×20cmの扁平な板石が敷かれ、その上部で径23cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡の①層は小礫が多く混じる黒褐色砂質シルト。掘り形埋土は、黒褐色砂質シルトに、親指先大の拉げた楕円形の黄褐色シルト小塊が点々と混じる。下部③層は、上部②層よりも黄褐色シルト小塊の量が少ない。

SP-467は桁行西隅の柱穴である。長軸長69cm、短軸長59cm、深さ24cmの長円形の掘り形をもつ。埋土上部の①層は、黄褐色砂質シルトの薄いレンズ状ブロックを含む小礫が混じる黒褐色砂質シルトで、周囲から流れ込んだように堆積しており、立柱が抜かれた後に流入した土層と考えた。②・③層は掘り形埋土で、黒褐色砂質シルトである。②層には小指先大の黄褐色砂質

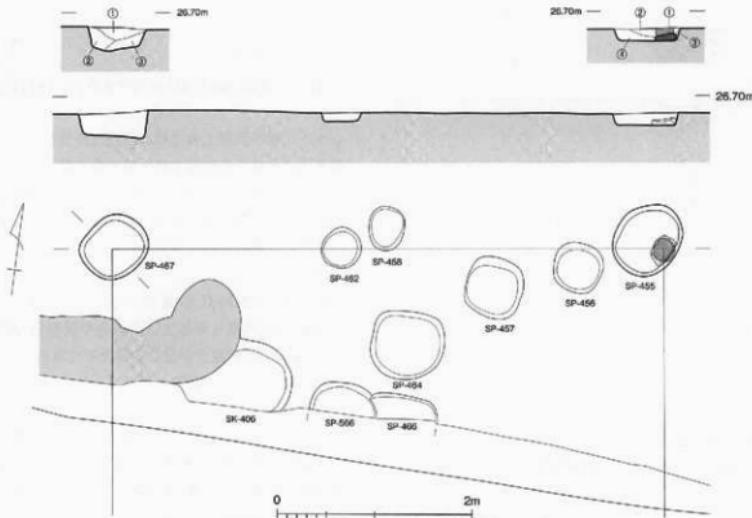


図75 A区 SB-414遺構実測図（縮尺1/50）

シルト塊が転々と混じる、③層には径3~4cmの黄褐色シルト塊が非常に多く混じる。

SP-455の掘り形埋土の②・③層から弥生土器の壺の口縁部片1点(図74-1)と胸部片2点が出土している。いずれも弥生中期後葉のものと考えられる。SP-467からは遺物は出土していない。

こうした出土遺物に加えて、黒褐色砂質シルトを主体とする埋土の特徴から、SB-414は弥生中期後葉の建物と判断した。

SB-415

A区南東部のDS・DT-41区では、ほぼ同規模の隅丸長方形で長軸方向が東西を向くSP-460とSP-461が出土した。これに直交する南側にはSP-464・465があり、さらにSP-460・461間のほぼ中央にSP-468が位置する。そこで、SP-460・461・464・465・468で構成される掘立柱建物を復元し、SB-415とした(図76、図版21)。(ほぼ南北方向を向く梁間2間、桁行き2間以上の建物である。梁間全長は4.66m(SP-460・468間2.3m、SP-461・468間2.36m)、桁行方向のSP-460・464間は1.47m、SP-461・465間は1.7mを測る。

SP-460は建物北東隅の柱穴で、SP-458に切られる。

立柱痕跡は確認されていない。長軸長93cm、短軸長71cm、深さ22cmの隅丸長方形を呈する。東側の底面がやや深い。埋土上部は、黒褐色砂質シルトと黄褐色砂質シルトが縦状に互層堆積する①層である。下部は、小礫が多く混じる黒褐色砂質シルトの②層、黄褐色砂質シルトの中に黒褐色砂質シルトが縦状堆積する③層である。

SP-461は建物北西隅の柱穴で、長軸長80cm、短軸長61cm、深さ50cmの隅丸長方形の掘り形をもつ。底面に板石を2枚重ねて敷いている。その上部で径23cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土は親指先大の暗黃灰色砂質土塊が混じる黒褐色砂質シルトで、上部の②層は下部の③層と比べて暗黃灰色砂質土塊の量が目立って多い。

SP-464は、径70×74cm、深さ26cmを測る不整円形の掘り形をもつ。底面に、径3~4cmの拉げた梢円形の黄褐色シルト塊が混じる黒褐色砂質シルトで埋め、その上面に扁平な板石を敷いて柱を立てる。掘り形埋土②層は、小指先大の黄褐色シルト塊が点々と混じる黒褐色砂質シルト。立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルトである。

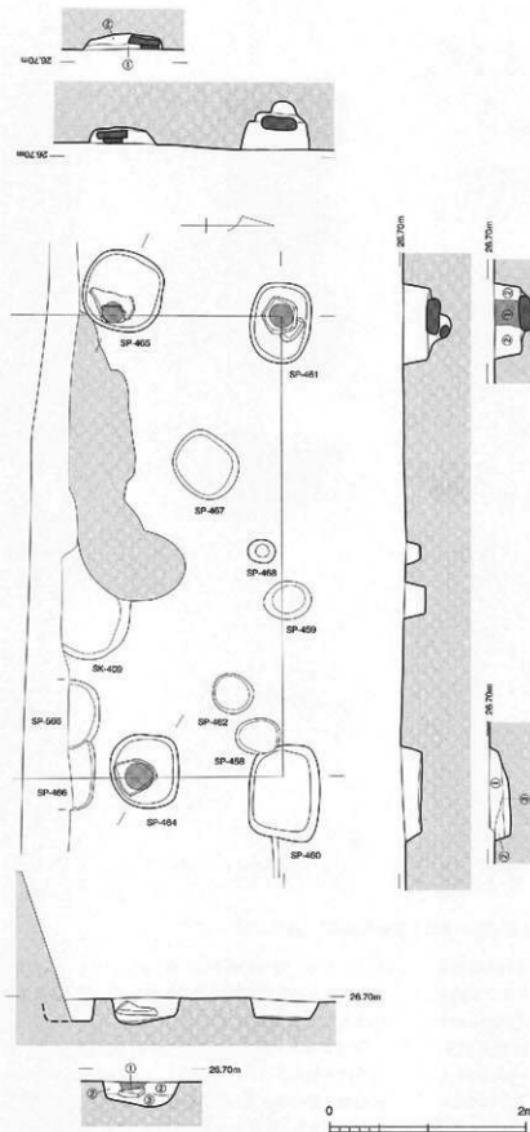


図76 A区SB-415遺構実測図（縮尺1/50）

SP-465は径80cm、深さ16cmの不整円形の掘り形を持つ。立柱痕跡は確認できなかったが、掘り形南東部に2枚の板石が敷き重ねられているので、立柱の位置を推定できる。掘り形埋土の①層は、黒褐色砂質シルトを主体として、暗黄灰色や黄褐色のシルトが多く混じり、全体として白っぽい土色である。②層は黒褐色砂質シルトと黄褐色シルトが混じり合う。

SP-468は、長径28cm、短径24cm、深さ12cmほどの梢円形を呈する。立柱痕跡は確認されていない。埋土は、黒褐色砂質シルトで、親指先大の黄褐色砂質シルトや暗黄灰色砂質土の小塊が多く混じる。

SP-460③層からは弥生土器の刷毛片5点が出土し、他に、埋土出土遺物として古代の土師器と土鍋の破片5点がある（図78-1～3）。図78-1は土師器の皿で、外底面には回転糸切り離し痕跡が残る。2は土師器の塊、3は土鍋の底部片である。

SP-461では、②層から弥生土

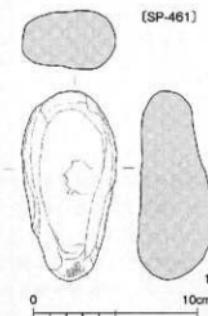


図77 A区SB-415出土遺物実測図1（縮尺1/3）

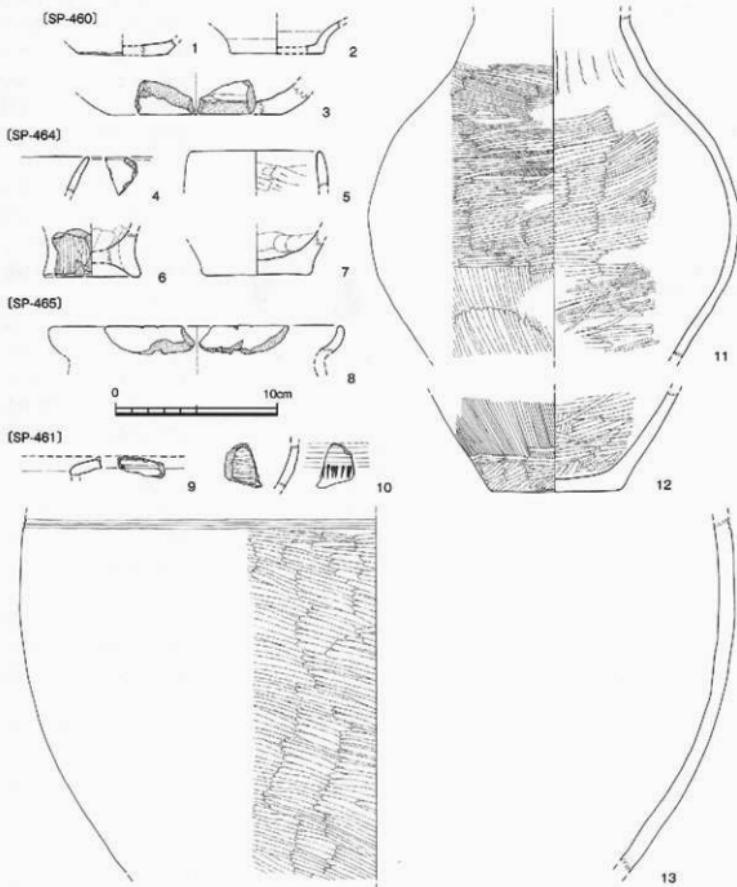


図78 A区 SB-415出土遺物実測図2 (縮尺1/3)

器の壺や甕の胴部片5点、2枚敷き重ねられた板石直下から弥生土器の甕口縁部片や高坏坏部片など10点が出土した(図78-9~13)。とくに、埋土②層から出土した図77-11~13は、比較的大形の破片に復元でき、11・12は同一個体の可能性が高い。11はSR-400から出土した破片と接合する。13もSP-568・569の埋土から出土した破片と接合する。胴上半部にヘラ状工具による2条の沈線を施す。接合する破片間の色調が異なる

ことから、焼成時破損品の可能性がある。この他、SP-461からは花崗岩の棒状の円窓を利用した敲打工具が出土している(図77-1)。

SP-464では、①層から弥生土器の甕口縁部片4点、奈良時代の須恵器環の口縁部片1点(図78-4)、③層から弥生土器の甕底部(図78-6)や胴部片8点が出土した。また、図78-5・7は根石東側下部埋土から出土している。

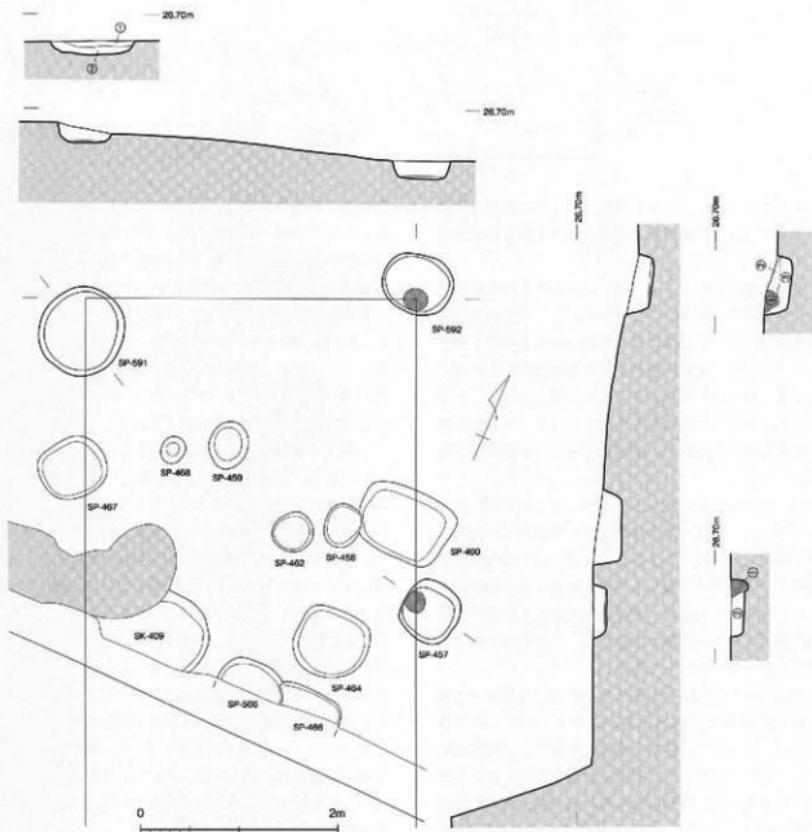


図79 A区SB-416遺構実測図（縮尺1/50）

SP-465では、①層から弥生土器の甕口縁部片1点(図78-8)を含む4点の破片が出土している。SP-468から出土した遺物はない。

以上、出土遺物には弥生土器片が多い。ほとんどが弥生中期後葉～後期初頭の遺物である。しかし、古代の遺物が混じり、黄褐色砂質シルトや暗黃灰色砂質土が混じる埋土の特徴から考えて、SB-415は古代後半の掘立柱建物と判断した。

SB-416

A区南東部のDS～DT-41・42区では、SB-573～

575を構成する柱穴以外に、SP-457とSP-592で立柱痕跡を検出した。SP-457・592を結ぶ線にはば直交する南北側にSP-591がある。やや矩形の建物となるが、SP-457・591・592で構成される掘立柱建物としてSB-416を復元した(図79、図版21)。

SP-457は、径58×60cm、深さ18cmの不整円形の掘り形をもつ。掘り形の西壁沿いで径22cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡である①層は、小礫が多く混じる暗黃灰色砂質土を主体として、小指先大で輪郭がほやけた梢円形の黒褐色砂質シルトや黄褐色砂質シルト塊が

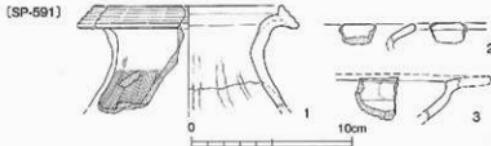


図80 A区SB-416出土遺物実測図
(縮尺1/3)

非常に多く含まれる。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルトで、拉げた梢円形の黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。

SP-591は、径85×91cm、深さ14cmの不整円形を呈する。SP-457・592と比べてやや大きく、立柱痕跡も確認できなかった。上部には、①層は黒褐色砂質シルトを主体として、暗黃灰色砂質土や黄褐色シルトが多く混じる。柱を抜いた後に流入した土層と考える。そうなると、下部の②層は掘り形埋土となる。黒褐色砂質シルトに拉げた梢円形の黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。

SP-592は、径60×72cm、深さ25cmほどの不整円形の掘り形をもつ。掘り形の南壁に接して径22cmの立柱痕跡を検出した。掘り形下部を、拉げた梢円形の黄褐色砂質シルト塊が多く混じる黒褐色砂質シルトの③層で埋め、柱をたてた後に、黄褐色砂質シルトが混じる黒褐色砂質シルトの②層で固定する。立柱痕跡である①層は黒褐色砂質シルトである。

SP-591からは、弥生中期後葉の壺の口縁部片や、後期終末の鉢など、弥生土器14点が出土している(図80-1~3)。1は、弥生中期後葉の壺で、口縁端部に粘土を貼り付けて上下に拡張し、端面に浅い3条の凹線文を施す。胴部内面に絞り痕や粘土紐の接合痕が残る。2は小片のため傾きは不確実だが、口縁が「く」字形に屈曲する鉢と考えた。3は高杯で、逆L字形の口縁部である。

SP-457・592からは遺物は出土していない。

出土遺物は偏っているが、SP-457やSP-591の埋土に暗黃灰色砂質土が混じることから、SB-416は古代後半の建物と考える。

SB-417

A区南壁沿いのほぼ中央のDT~DV-41・42区では、立柱痕跡が検出できたSP-476・478・571があり、柱の抜き跡が確認できたSP-479・480や、板石の礎盤が出土したSP-472を加えて、SB-417を復元できる(図81、図版22)。ほぼ東西方向に向く梁間1間、桁行2

間の掘立柱建物である。梁間全長2.4m(SP-476・472間2.4m、SP-480・571間2.4m)、桁行全長5.45~5.55m(SP-476・479間2.6m、SP-479・480間2.85m、SP-472・478間2.45m、SP-478・571間3.1m)を測る。

また、東側乗梁間のSP-472・476に近接してSP-474・477がある。SP-474はSP-472を切っているが、ほぼ接するように柱が立てられている。SP-477で確認された柱はSP-476側へ傾くように埋設されている。添え柱、もしくは補強用の柱の可能性を考えることができる。

主柱穴のSP-472は、建物南東隅の柱穴で、SP-474に切られる。長軸長65cm、短軸長52cm、深さ24cmを測る不整梢円形の掘り形をもつ。立柱痕跡は、SP-474との切り合いの確認で混乱し、土層断面の観察時に気がついた。そのため、立柱痕跡の直径は不明である。底面に板石の礎盤を敷いて、柱を据えている。掘り形上部を埋める①・②層は、柱が抜き取られた後に流入した土層である。①層は、砂疊混じりの暗灰黃色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が少量混じる。②層は浅黃色砂質土の中に黄褐色砂質土のレンズ状ブロックがみられる。③層は立柱痕跡。④層は灰黃色砂質土の中に灰黃色砂質土の小塊が混じる。④・⑤は掘り形埋土。④層は、灰黄色や明黄褐色、黄褐色の砂質土が混じりあう。⑤層は、黄褐色と明黄褐色の砂質土が織状に互層堆積する。

SP-476は、建物北東角の柱穴である。SP-475に切られ、南側の壁が一部崩れている。長軸長55~60cm、短軸長50cm、深さ36cmの掘り形をもつ。底面に板石を敷き、その上に径14cmの柱を据えている。平面検出時には立柱痕跡が明確でなく、断面で検出した後に、再度確認したために、断面図は立柱の中心線から少しずれた位置でしか作成できなかった。立柱痕跡にあたる①層は暗灰黃色シルト。②~④層は掘り形埋土。②層は、砂疊混じりの褐灰色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の小塊を含む。全体にしまりがある。③層は、砂疊混じりのにぶい黄橙色砂質土を主体とし、にぶい黄褐色砂質土の凸レンズ状ブロックが少量みられる。④層は、

③層と近似するが、にぶい黄褐色砂質土の割合が少ない。

SP-478は、南側桁行中央の柱穴である。長軸長65cm、短軸長47cm、深さ42cmの不整橿円形の掘り形をもつ。二段掘りとなつた中位以下で、径17cmほどの立柱痕跡が残されていた。上部の①～③層は、柱が抜き取られた後に流入した土層である。①層は、砂礫混じりの暗灰黄色砂質土で、灰黄色砂質土の小塊を含む。②層は、暗灰黄色砂質土と灰黄色砂質土が混じりあう。③層は、砂礫混じりの暗灰黄色砂質土を主体とし、灰黄色や明黄褐色砂質土の小塊が混じる。④層は立柱痕跡で、灰黄色や浅黄色の砂質土で、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックが含まれる。⑤層は掘り形理土で、④層と土質は同じであるが、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックが大きく、全体にしまりがある。

SP-479は、北側桁行中央の柱穴である。長径52cm、短径50cm、深さ27cmの不整隅丸長方形の掘り形をもつ。底面の中央が10cmほど掘り込まれている部分が柱の抜き跡である。

柱の抜き跡を埋める④層は、灰黄色砂質土を主体として、明黄褐色や暗黄灰色の砂質土の小塊が混じる。上部には、暗灰黄色が混じる明黄褐色砂質土の③層、にぶい黄褐色砂質土の小塊が混じる暗灰黄色砂質土の②層、砂礫が多く混じる黄灰色と浅黄色の砂質土が混じ

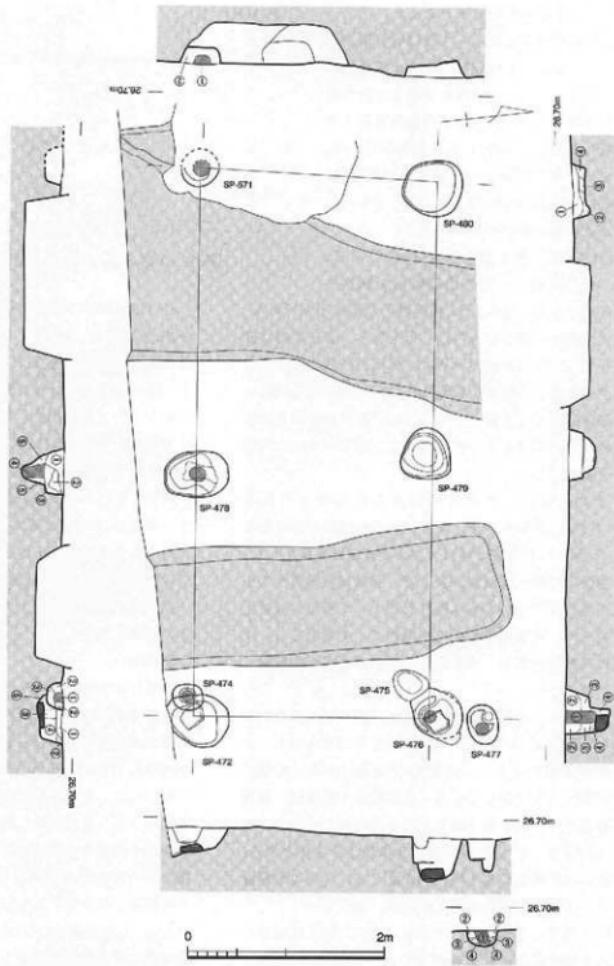


図81 A区 SB-417遺構実測図（縮尺1/50）

る①層が流れ込む。

SP-480は、建物北西角の柱穴で、長径59cm、短径55cm、深さ17cmの不整円形の掘り形をもつ。東壁沿いに底面が窪む部分があり、窪みに向かって流れ込んだように①・②層が堆積する。柱が抜き取られた後に流入

した土層と判断した。そうなると、③・④層は掘り形埋土となる。①層は灰黄褐色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。②層は、にぶい黄橙色砂質土と灰白色砂質土が混じり、さらに灰黄褐色砂質土が斑状に混じる。③層は、灰黄褐色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の小塊が少量混じる。④層は、灰黄褐色砂質土を主体として、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。

SP-571は、建物南西角の柱穴である。

SK-408を切るが、その土層断面を観察中

に確認できた。そのため、西半部の状況は不明である。推定径40cm、深さ17cmの掘り形をもち、立柱痕跡は推定径17cm。立柱痕跡の①層は、黒褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が少量混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質土を主体として、にぶい黄橙色や明黄褐色の砂質土の小塊を多く含む。また、径3~4mmの円礫が少量混じる。

また、添え柱または補強用の柱と考えられるSP-474は、径30×27cm、深さ15cmの長円形の掘り形をもつ。掘り形の中央で径11~12cmの柱痕跡を検出した。柱痕跡の①層は灰黄色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。②・③層は掘り形埋土。②層は、浅黄色砂質土で、灰黄色砂質土の小塊がごく少量混じる。③層は褐褐色砂質土。明黄褐色砂質土の小塊が少量混じる。

SP-477は、長径40cm、短径30cm、深さ16cmの長円形の掘り形をもつ。径14cmの柱痕跡を確認できたが、土層断面を観察すると、南側のSP-476に向かって傾いた状態で柱を埋設している。立柱痕跡の①層は、黒褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が多く混じる。②~④層は掘り形埋土で、明黄褐色砂質土を主体とする。②層には黒褐色砂質土の小塊が混じる。③層は砂礫混じり。④層は黒褐色砂質土が斑状に混じる。

出土遺物は小片ばかりである。SP-472埋土②層から弥生土器の胴部破片2点が出土している。SP-476埋土上半部から弥生土器9点と古代~中世の土器1点(図82-1)、埋土②層から弥生土器の胴部片2点が出土。埋土上半部から出土した弥生土器には甕(図82-2)や壺(3)がある。1は土器器皿の底部片で、外底面は回転糸切り離し痕が残る。2は脚台状の底部で、3は「く」形口縁をもつ無頸壺である。2・3は弥生土器後葉に比定できる。混入品である。

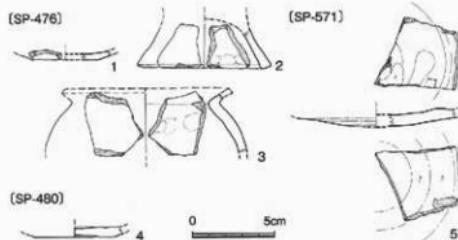


図82 A区SB-417出土遺物実測図(縮尺1/3)

SP-478の北側の壁際からも弥生土器の壺の底部破片が出土したが、小片のために図示できなかった。SP-479①層からは弥生土器の壺の肩部破片1点が出土。SP-480埋土中から、古代~中世の土器器皿の皿・壺・土鍋の小片8点が出土。図82-4は土器器皿の底部破片である。外底面には回転糸切り離し痕が残る。SP-571埋土②層からは古墳後期の須恵器(図82-5)が出土している。壺類の底部と考えた。また、添え柱または補強用の柱と考えられるSP-474の掘り形埋土②層から弥生土器の小片2点が出土。ともに壺で、1点は胴部、他は口縁部屈曲部周辺の破片である。

以上の出土遺物と埋土の特徴から、SB-417は古代後半の建物と判断した。

SB-418

調査区中央の南壁沿いのDV・DW-41区で、ほぼ同じ大きさの柱痕跡を確認できたSP-483・484があり、南側が調査区外にのびるSB-418を復元した。SP-483・484間は3.77mで、桁行方向と考える。

SP-483は、北西部を塹壕で破壊され、南端は調査区外にのびる。北西側の小穴を平面的に検出できず、土層断面を観察する際に切り合いを確認した。そのため、掘り形の平面形は円形と考えられるが、詳細不明で、土層断面では少なくとも径は40cmと考えられる。深さは12cm。立柱痕跡は径17cm。立柱痕跡にあたる①層は、砂礫混じりの褐灰色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が含まれる。②・③層は掘り形埋土である。②層は、砂礫が多く混じる明黄褐色砂質土で、褐灰色砂質土の小塊が含まれる。③層は、砂礫混じりのにぶい黄色砂質土で、褐灰色砂質土の小塊が少量含まれる。④~⑥層はSP-483に切られる小穴の埋土。④層は砂礫が多く混じる灰黄色砂質土。⑤層は褐灰色砂質土に明黄褐色砂質土の小塊が混じる。⑥層は、明黄褐色砂質土で、

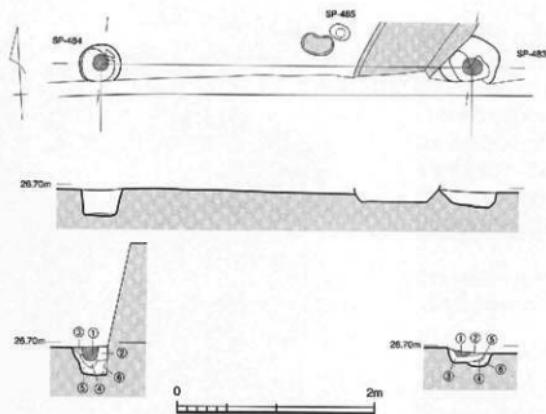


図83 A区 SB-418遺構実測図
(縮尺1/50)

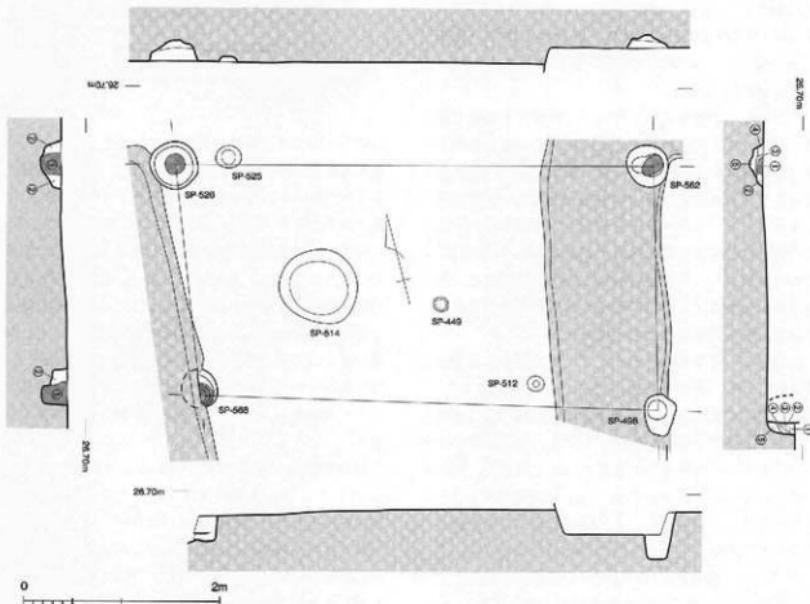


図84 A区 SB-419遺構実測図 (縮尺1/50)

褐灰色砂質土の小塊が少量混じる。

SP-484は、径43cm、深さ29cmの不整円形の掘り形をもつ。径16cmの立柱痕跡を検出した。柱痕跡の①層は灰褐色砂質土で、砂礫がほとんど混じらない。②～⑥層は掘り形埋土。②層は砂礫混じりの褐灰色砂質土。③層は砂礫混じりの灰褐色砂質土で、浅黄色砂質土の小塊を含む。④層は灰黄褐色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。⑤層は、褐灰色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。⑥層は灰黄褐色砂質土に褐灰色砂質土が混じる。

出土遺物はSP-484⑤層から弥生土器の胴部小片2点が出土しただけである。しかし、埋土の特徴から、SB-418は古代後半の建物と考える。

SB-419

A区南西部のDW・DX-42・43区に位置する。SP-498・526・562・568で構成されるほぼ東西方向を向く掘立柱建物である(図84、図版23-1)。梁間は1間で、東側梁間のSP-498・562間は2.5m前後、西側梁間のSP-526・568間は2.35mを測る。桁行は1間で、北側桁行のSP-526・562間は4.83m、南側桁行のSP-498・568間は4.64mを測る。

SP-498は、建物南東角の柱穴で、西半部を壊壙で破壊されている。推定径40～50cmの掘り形と考えられるが立柱痕跡は確認できなかった。埋土①層は、褐灰色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。②層は褐灰色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の小塊を含む。③層は褐灰色と明黄褐色の砂質土が混じりあう。④層は、褐灰色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。⑤層は褐灰色砂質土とにぶい黄橙色砂質土が混じりあう土層で、明黄褐色砂質土の小塊を含む。

SP-526は、建物北東角の柱穴で、西端部を壊壙で破壊されている。径48～49cm、深さ21cmの掘り形をもち、ほぼ中央部で径20cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡にあたる①層は、黒褐色砂質シルトで、輪郭がはやけた小指先大の暗灰褐色砂質土塊が点々と混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトに黄褐色シルト・黄灰色砂質土の小塊が混じる。①層と比べてやや白っぽい土色である。

SP-562は、建物北東角の柱穴で、壊壙底面で出土した。径40～43cm、深さ14cmの不整円形の掘り形をもつ。幅17cm、長さ25cmの柱の抜き跡を検出した。柱の抜き跡にあたる①層は褐灰色砂質土。②～⑤層は掘り形埋土。②層は褐灰色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の小

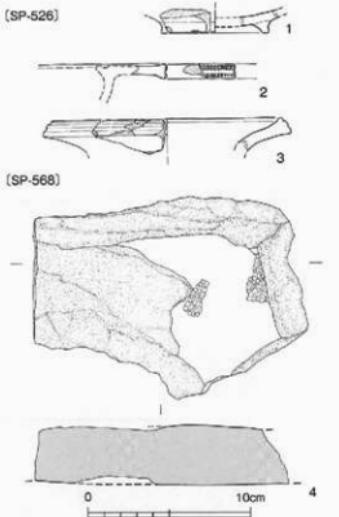


図85 A区SB-419出土遺物実測図(縮尺1/3)

塊が多く混じる。③層は褐灰色砂質土を主体とし、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。④層は、③層と共通する土質であるが、やや粘性をおびる。⑤層は褐灰色砂質土を主体とし、明黄褐色砂質土の小塊が少量混じる。

SP-568は、建物南西角の柱穴である。西半部を壊壙で破壊されている。推定径35～40cm、深さ26cmの不整円形の掘り形をもつ。推定径20cmほどの柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色シルトで、輪郭のはやけた径3～4cmの黄褐色砂質土塊が混じる。掘り形埋土の②層は暗黄褐色砂質土で、黒褐色砂質シルト・黄褐色シルトの親指先大の小塊が非常に多く混じる。

出土遺物は、SP-526の埋土中から、土師器塊(図85-1)と、弥生土器の高坏(2)や壺(3)などの破片が出土した。1の外面は回転ナデを施し、内面に一部ミガキが残る。2は口縁端部を横ナデによって上下に肥厚させる。端面には1条の凹線文を施し、その上から刷毛目工具の小口を用いた刻目を左から右へ施す。3は、口縁端部を摘み上げるように横ナデし、端面に1条ずつ2条の凹線文を施す。1条目は棒状工具、2条目はヘラ状工具で施す。2・3は弥生中期後

葉に比定でき、混入品である。

SP-562の掘り形埋土②層から弥生中期後葉～後期初頭と考えられる弥生土器の壺胴部片が出土している。SP-568の掘り形埋土①層から弥生土器の壺の口縁部片や壺の胴部片、砂岩の角礫の一面を砥面として利用した図85-4が出土している。壺はSP-547出土の破片と接合（図93-1）する。この他、SP-498埋土とSP-568①層から炭化物片が出土している。

以上、SP-526から土師器の輪高台をもつ壺が出土していること、埋土に灰黄褐色や褐灰色の砂質土が混じることから、SB-419は古代後半の建物と判断した。

SB-420

A区南西部のDW・DX-42・43区に位置する。SP-513・514・515・516で構成されるほぼ東西方向を向く掘立柱建物である（図87、図23-1）。梁間は1間で、東側梁間のSP-513・516間は2.3m、西側梁間のSP-514・515間は2.25mを測る。桁行は1間で、北側桁行のSP-515・516間は5.5m、南側桁行のSP-513・514間は5.35mを測る。

SP-513は、建物南東角の柱穴で、長径78cm、短径66cm、深さ26cmの不整な丸九方形の掘り形をもつ。掘り形北西部で立柱痕跡を確認した。立柱痕跡は壘塹で部分的に破壊されているが、全体に南に向かって緩やかに立ち上がっているため、柱は抜き取られていると考えた。①層は、柱の抜き跡で、褐灰色砂質土。②～⑥層は掘り形埋土。②層は、灰黄褐色砂質土で、にぶい黄橙色砂質土の小塊を含む。③層は、褐灰色砂質土で、にぶい黄橙色の砂質土の小塊が混じる。④層は、褐灰色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。⑤層は④層と類似する土層で、親指先大の明黄褐色砂質土塊が混じる。⑥層は、明黄褐色とにぶい黄橙色の砂質土が混じり合い、褐灰色砂質土の小塊が混じる。

SP-514は、建物南西角の柱穴で、長径80cm、短径73cm、深さ18cmの不整円形の掘り形をもつ。掘り形北半

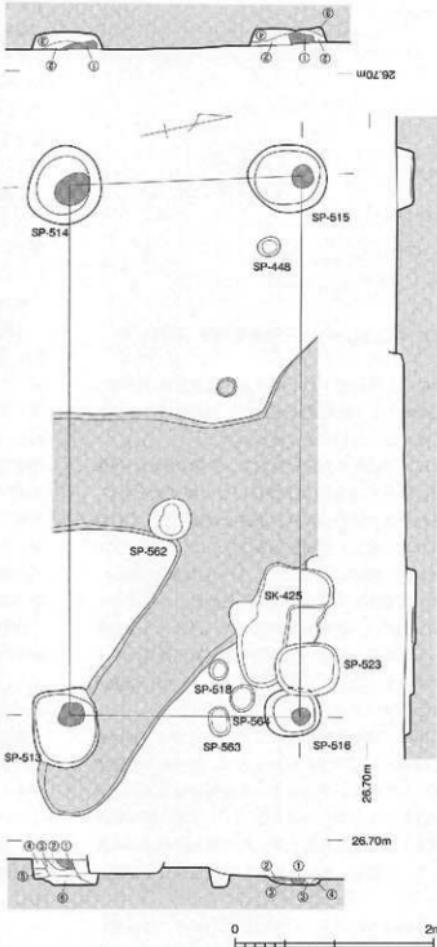


図86 A区 SB-420遺構実測図（縮尺1/50）

部で、柱を南側に引き倒した痕跡を確認できた。推定される立柱痕跡の直径は20～25cm。柱痕跡の抜き跡にあたる①層は、黒褐色砂質シルトで、親指先大の黄褐色シルトや黄灰色砂質土の小塊が多く混じる。②・③層は掘り形埋土。②層は、暗灰褐色砂質土で、径3～

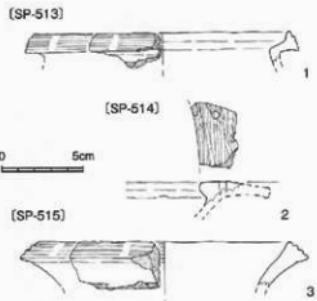


図87 A区SB-420出土遺物実測図（縮尺1/3）

4cmの抜けた黄褐色シルト塊が点々と混じる。③層は、黒褐色砂質シルトに暗黃灰色砂質土が混じる。全体として明るく白っぽい土色である。

SP-515は、建物北西角の柱穴で、長軸長80cm、短軸長68cm、深さ17cmを測る不整橢円形の掘り形をもつ。掘り形北半部で径23cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡にあたる①層は、黒褐色砂質シルトで、親指先大の黄褐色シルト塊が少量混じる。②～④は掘り形埋土。③層は、黒褐色シルトで、暗黃灰色砂質シルトが多く混じる。③層は、暗黃灰色砂質土で、径3～5cmの黄褐色シルト塊や、小指～親指先大の黒褐色砂質シルト塊が非常に多く混じる。④層は③層に近いが、暗黃灰色砂質土の割合が高い。

SP-516は、建物北東角の柱穴で、長径55cm、短径48cm、8cmの隅丸方形の掘り形をもつ。掘り形北東部で径18cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡にあたる①層は、砂礫混じりの褐灰色砂質土。②・③層は掘り形埋土。②層は、褐灰色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。③層は、褐灰色砂礫に褐灰色砂質土が混じる。

出土遺物は少ないが、SP-513埋土中から、口縁部に凹線文を施す甕の胴部破片（図87-1）をはじめ、弥生土器片10点が出土した。1は、口縁端部に粘土紐を貼り付けて上下に拡張し、端面に3条の凹線文を施す。他の破片を含めて、弥生中期後葉～後期初頭の時間幅で捉えられる。また、立柱痕跡や掘り形埋土からは炭化物片が出土した。SP-514②・③層から、弥生中期後葉の高杯の口縁部片（図87-2）と、外面に縦方向のミガキ、内面にケズリを施した後にヘラ状工具による

ナデで調整した甕の胴部破片が出土している。2は、口縁部に小孔を焼成前に穿孔している。弥生中期後葉と考えられる。立柱痕跡からは炭化物の小片が出土。SP-515②～④層をはじめとして、甕の口縁部破片（図87-3）など、弥生中期後葉～後期初頭と考えられる弥生土器が出土し、立柱痕跡からは炭化物小片が出土している。3は、口縁端部を上下に肥厚させて横ナデし、端面に3条の断面U字状の凹線文を施す。

以上、出土遺物は弥生時代のものばかりであるが、埋土に灰黃褐色や褐灰色の砂質土が含まれているので、SB-420は古代後半の建物と判断した。

SB-421

A区南西部のDY-42・43区で、方形に並ぶSP-533・534・535・536が出土した。また、SP-533・536を結ぶ線上にはSP-537が位置する。いずれも立柱痕跡を検出できなかったが、配置関係からSP-533・534・535・536・537で構成される掘立柱建物を復元した（図88、図版23-2）。梁間1間、桁行2間以上のほぼ東西方向を向く。梁間長は、東側のSP-533・534間で2.48m、西側のSP-535・536間で2.51mを測る。桁行長は、北側のSP-534・535間で4m、南側のSP-533・536間で4.02mを測る。また、南側桁行のSP-533・537間は2.37m、SP-537・536間は1.65mを測る。

SP-533は、建物南東角の柱穴で、西半部を欠く。短軸長55cm、推定長70cm前後、深さ22cmの楕円形の掘り形を持つ。埋土上部は黒褐色砂質シルトで、径2～3cmの黄褐色シルト小塊が非常に多く混じる①層と、やや黄褐色シルト塊が少ない②層に分層できる。埋土下部は黒褐色シルトで、親指先大の黄褐色砂質シルト塊が多く混じる。黄褐色砂質シルト塊の混じり具合から③・④層に分層できる。③・④層はかなりしまっており、掘り形埋土と判断できる。一方、①・②層に混じる黄褐色シルト塊は東側から流れ込んだようにみられることから、東側から埋め戻し、もしくは流入した土層と考えた。そうなると、柱は掘り形の西よりに立てられてきたことになる。

SP-534は、建物北東角の柱穴である。西半部を欠く。推定径60×70～80cmの楕円形の掘り形をもつ。埋土上部は黒褐色砂質シルトの①層で、小指先大の黄褐色砂質土塊が周囲から流れ込んだように多く混じる。埋土下部の②層は黄褐色砂質土で、黄褐色砂質土や黒褐色砂質シルトの小指先大の小塊が多く混じる。③層は黄褐色砂質土に小指先大の黒褐色砂質シルト小塊が多く

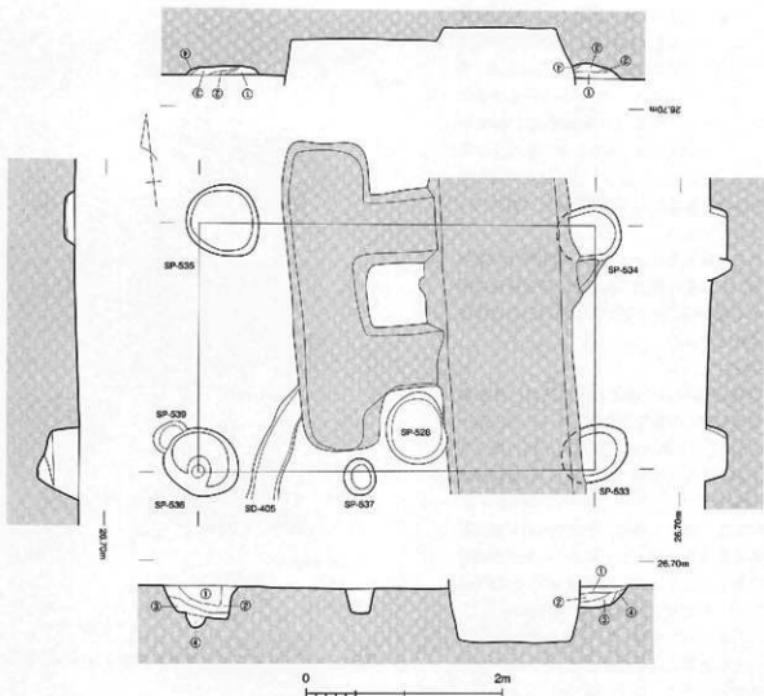


図88 A区 SB-421遺構実測図（縮尺1/50）

混じる。(3)層は黒褐色砂質シルトである。

SP-535は、建物北西角の柱穴で、径73×77cm、深さ9cmの不整円形の掘り形をもつ。平面形を確認できなかつたが、柱の抜き取り痕と考えられる黒褐色砂質シルトの溜まりを、掘り形東半部で確認でき(1)層とした。(2)・(4)層は暗黄灰色砂質土。(3)層は黒褐色砂質シルトで、暗黄灰色砂質土の小塊が多く混じる。

SP-536は、建物南西角の柱穴で、SP-539に切られる。長軸長80cm、短軸長67cm、深さ34cmの掘り形をもつ。掘り形の中央東よりで、柱の抜き跡と考えられる黒褐色砂質シルトの(1)層を確認できた。径3~4cmの黄褐色砂質土塊が多く混じる。炭化物片が多くみられた。(2)・(3)層は掘り形埋土で、(2)層は黒褐色砂質シルトに黄褐色砂質土が混じる。(3)層は黄灰色砂質土に黒褐色砂質シルト土が混じる。掘り形の底面には、径24cm、

深さ16cmほどの小穴があり、黄灰色砂質土・黒褐色シルト・黄褐色砂質シルトが混合する(4)層で埋まっている。樹根の痕跡である。

SP-537は、径33×36cm、深さ26cmの掘り形を持ち、黄灰色砂質土が混じる埋土である。

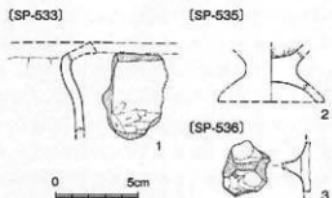


図89 A区 SB-421出土遺物実測図（縮尺1/3）

出土遺物は、SP-533埋土③層から、弥生後期初頭と考えられる壺の口縁部近くの胴部片（図89-1）、胴部破片3点が出土。SP-534では、①層から炭化物小片が出土。SP-535の埋土中からは、脚台付き鉢と考えられる図89-2、弥生中期後葉～後期初頭と考えられる壺の胴部片が出土。SP-536埋土②・③層からは、弥生中期と考えられる壺の胴部片8点、把手破片（図89-3）が出土している。

これらの出土遺物はいずれも弥生時代の遺物である。しかし、埋土に黄灰色や暗黄灰色の砂質土の小塊が混じることから、SB-421は古代後半の建物と考える。

SB-422

A区南西隅のDY・DZ-42・43区で、柱痕跡が検出され同じ平面形と大きさをもつSP-556・557が出土した。南北方向の梁間1間の掘立柱建物を復元する（図90、図版24-1）。梁間長は2.5mを測る。

SP-556は、径80×85cm、深さ33cmの不整方形の掘り形をもつ。掘り形下部で立柱先端が残存していることを確認した。立柱痕跡の径は20cm。埋土①～④層は柱を抜き取った後に埋め戻し、あるいは流入した土層。⑤～⑦層は掘り形埋土、⑥層は立柱先端の残存部である。①・②層は黒褐色砂質シルトで、拉げた梢円形の黄褐色シルト塊が非常に多く混じる。②層は黄褐色シルト塊の量がやや少ない。③層は黄褐色砂質シルトに黒褐色砂質シルトが少量混じる。④層は黒褐色砂質シルトで、径2～3cmの黄褐色砂質土塊が多く混じる。⑤層は黒褐色砂質シルトで、黄褐色砂質土塊が多く混じる。⑥層は黒褐色砂質シルトに小指先大の黄褐色シルト塊が少量混じる。⑦層は黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色シルト塊がごく少量混じる。

SP-557は、径80cmの不整な隅丸方形の掘り形。掘り形西半部は深さ5cm、東よりに深さ27cmの掘り込みがあり、その中に径24cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にあたる①層は黒褐色砂質シルト。②・③層は掘り形埋土。④層は黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色砂質土塊が多く混じる。⑤層も黒褐色砂質シルトで黄褐色砂質土塊が混じるが、黄褐色砂質土塊は径2～4cm。

出土遺物は、SP-556①～④層から11点、⑤・⑥層か

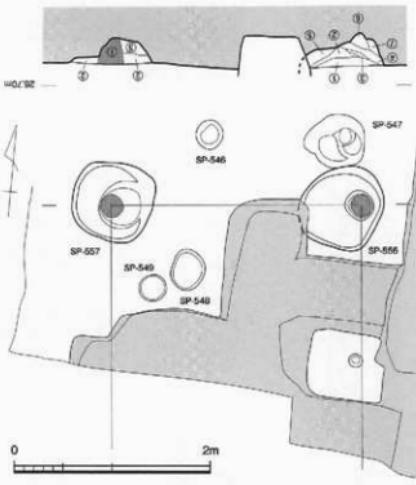


図90 A区SB-422遺構実測図（縮尺1/50）



図91 A区SB-422出土遺物実測図（縮尺1/3）

ら4点、その他埋土中から12点の弥生土器が出土している。この中で、図化できたのは、図91-1の壺の口縁屈曲部周辺の破片だけである。弥生中期後葉を前後する時期のもの。SP-557①層から弥生土器の胴部小片2点が出土しているのみである。

以上、出土遺物がすべて弥生土器であり、埋土も黒褐色砂質シルトを主体とした埋土aに分類できるので、SB-582は弥生時代、とくにSP-556から出土した弥生中期後葉の壺から、SB-422は当該期の建物と考える。

SB-423

A区南西隅のDZ-42区で、底面に扁平な円窓を埋設し、その上部で柱痕跡を確認できたSP-545が出土した。立柱痕跡が確認でき、SP-545と同じ大きさの掘り形をもつ柱穴として、SP-547がある。SP-545・547間は2.6mで、これに直交する線上に25m離れて位置するSP-587では柱痕跡を確認できなかったが、これも

加えて、SP-545・547・587から構成される梁間1間、桁行2間の掘立柱建物を復元した（図92、図版24.1）。

SP-545は、長径60cm、短径47cm、深さ34cmの不整な隅丸方形の掘り形をもつ。底面に扁平な円礫を置き、柱を立てている。立柱痕跡の径は17cm。立柱痕跡にあたる①層は、黒褐色砂質シルトで、径3~4cmの黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。②・③層は掘り形埋土。②層は黒褐色砂質シルト層で、下部に黄褐色あるいは黄灰色砂質シルトの塊が集中する。③層は、径3~5cmの黄灰色砂質シルト塊が詰まり、その間に黒褐色砂質シルトが埋める。

SP-547は、径58×55cm、深さ39cmの不整円形の掘り形をもつ。掘り形のやや東よりで径20cmほどの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡にあたる①層は、黒褐色砂質シルトで、小指先大の黄褐色砂質シルト塊がごく少量混じる。②・③層は掘り形埋土。②層は、黒褐色砂質シルトに黄褐色砂質シルト塊が混じる。③層も同様であるが、黄褐色砂質シルト塊は極端に少ない。

SP-587は、SK-403・SP-570を切る。推定長径50cm、短径38cm、深さ23cmの梢円形の掘り形をもつ。立柱痕跡は確認できていない。埋土は黒褐色砂質シルトを主体とし、下半には黄灰色砂質土・黄褐色シルトの塊が多く混じる。

出土遺物は、SP-545の掘り形埋土②層から、弥生土器の副部小片が2点出土。弥生中期のものか？ また、②層には炭化物片が多く含まれる。SP-547では埋土②層から弥生土器の副部片4点、③層から弥生中期後葉の壺口縁部片（図93-1）や副部片2点が出土している。壺は、口縁端部を上方に摘み出すように横ナデを施す。その結果、口縁端面がやや凹む。肩曲部内面には浅い沈線が残る。壺はSP-568埋土①層から出土した破片と接合する。

以上の出土遺物は、いずれも弥生土器ばかりである。

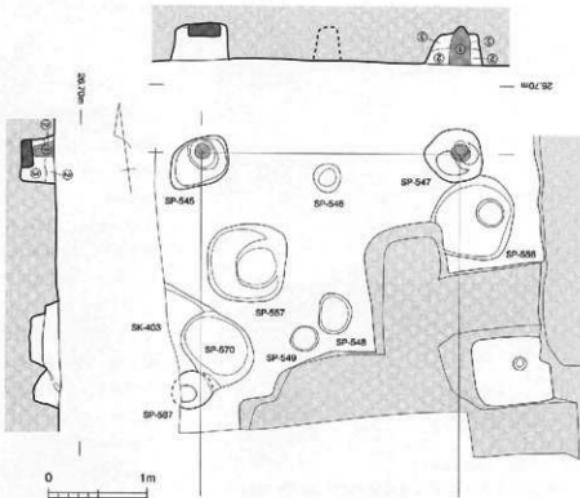


図92 A区SB-423遺構実測図（縮尺1/50）

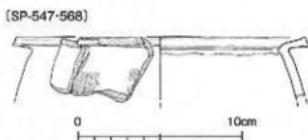


図93 A区SB-423出土遺物実測図（縮尺1/3）

しかし、埋土に黄灰色の砂質シルトや砂質土が含まれることから、SB-423は古代後半の建物と判断できる。

SB-424

A区南辺のはば中央のDW-41区では、立柱痕跡が確認されたSP-487とSP-492が2.15m離れて出土した。深さはかなり異なるが、柱痕跡の径が12~14cmとはば共通することから、SP-487・492を梁間1間とする掘立柱建物を復元した。他の掘立柱建物と比べて、立柱痕跡が細いので、簡易の建物と考えられる。

SP-487は、27×24cm、深さ48cmの不整円形の掘り形をもち、径12cmの立柱痕跡を検出した。立柱痕跡の①層は、砂礫混じりの褐灰色砂質土である。②~⑤層は掘り形埋土。②・③層は、灰黄褐色砂質土に、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。②層と比べて、③層にはにぶい黄橙色砂質土塊が少ないと。④・⑤層は灰黄褐色

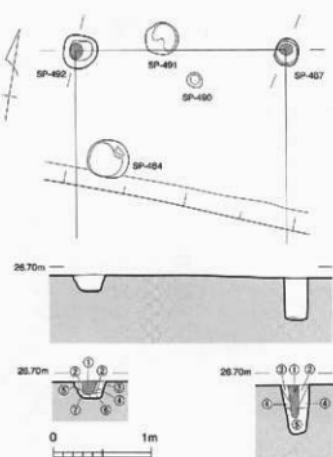


図94 A区 SB-424造構実測図（縮尺1/50）

[SP-487]



図95 A区 SB-424出土遺物実測図
(縮尺1/3)

砂質土で、にぶい黄橙色砂質土のレンズ状ブロックが少量みられる。⑤層には径2~3mmの礫や小石が多く混じる。

SP-492は、径35×32cm、深さ17cmの不整円形の掘り形をもつ。径14cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は、砂混じりの暗灰黄色シルトである。②～⑥層は掘り形埋土。②層は砂礫が多く混じる黄褐色シルト。③層は、灰黄色砂質土に黄褐色シルトの小塊が混じる。④層は灰黄色砂質土、⑤層は黄褐色砂質シルトである。⑥層は灰黄色砂質土で、黄褐色シルトの小塊がみられ、さらに下部には明黄褐色の小塊が混じる。⑦層は灰色砂層。

出土遺物は、SP-487の掘り形埋土⑤層から、土器器塊の胴部片（図95-1）が出土している。他に、埋土①層から弥生中期後葉を前後する時期と考えられる壺の胴部片1点がある。SP-492からは、遺物は出土していない。

SB-424は、出土遺物と埋土の特徴から、古代後半の建物と判断できる。

4 土壙

SK-401～404・406～408・425の8基の土壙が出土している。この中で、SK-402・403の2基は埋土a、SK-404の1基は埋土b、SK-401・406・407・408・425の5基は埋土cの土壙である。

SK-401

A区中央のDV-41区に位置する。当初、1基の土壙と考え、西半部を掘り下げて、土層を観察したところ、土壙2基と小穴・柱穴2基が切り合っていることを確認できた。そこで、もっとも大型で先行する土壙をSK-401とし、その北側で切り合う小型土壙をSK-408とした。また、SK-408埋土を切り込むSP-571・593の中で、SP-571はSB-417を構成する柱穴である。

SK-401は、径1.65～1.7mの不整円形の土壙である。埋土は7層から構成される。①・②層は、灰黄褐色砂

質土を主体として、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。①層には砂礫が多く混じるが、②層には砂礫はほとんどみられない。③層は灰黄褐色砂質土とにぶい黄橙色砂質土が混じり合う。親指先大の小円礫を多く含む。④層は明黄褐色砂質土のブロック。⑤層は、にぶい黄褐色砂質土を主体として、にぶい黄橙色砂質土や明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックが多くみられる。⑥層は褐色砂質土で、小指先大の小円礫が混じる。土質はそれほど締まっていない。

埋土の上部から弥生土器片22点が出土した。壺の口縁部片・壺の突帯部・ジョッキ型土器の口縁部などがある。埋土下部からも弥生土器が17点出土。口縁部片4点などがある。図97・98に示した中で、図97-1～5、図98-1・2はSK-401の埋土から出土した。図

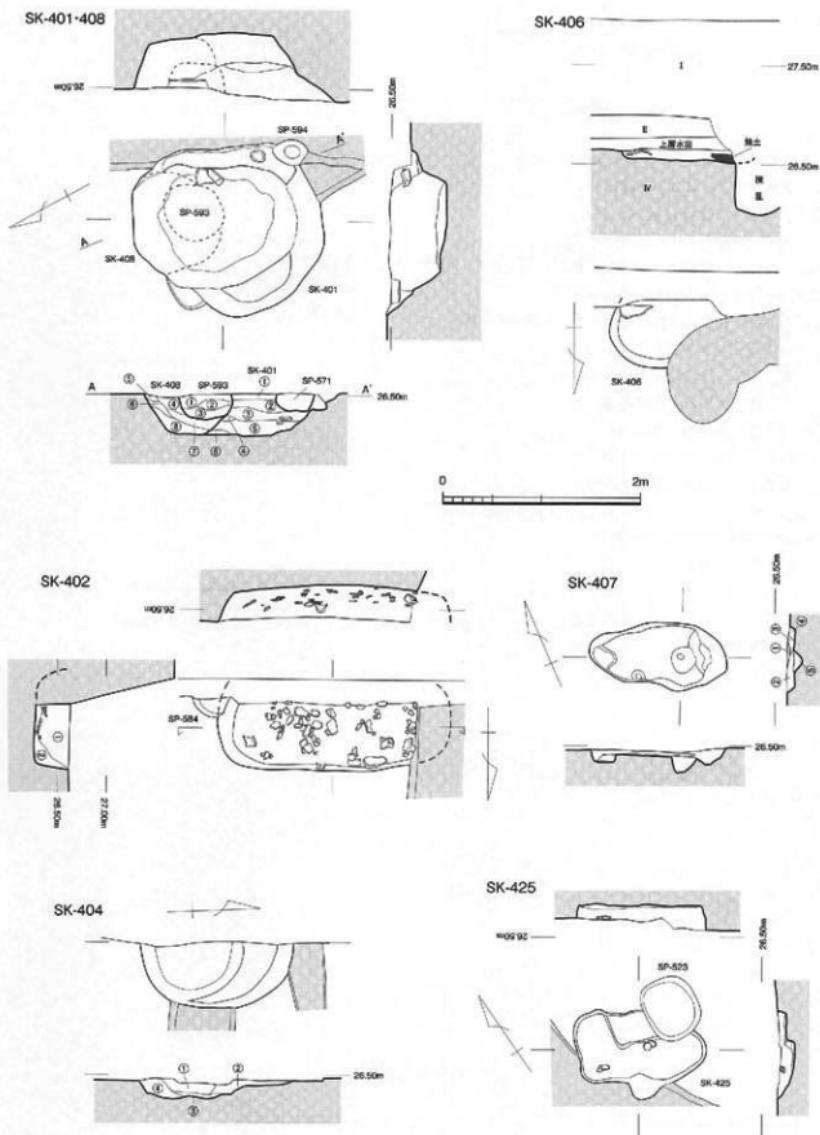


図96 A区 SK-401・402・406・407・408・425遺構実測図（縮尺1/50）

97-9はSK-408の埋土、図97-6～8はSK-401かSK-408かを確定することはできなかった。

図97-1・2は壺。1は、口縁端部を摘み出すような横ナデによってわずかに拡張する。その結果、端面はわずかに凹む。2は、口縁端部を横ナデによって上方に摘み上げる。その結果、端面がわずかに凹む。3は鉢で、口縁部に横ナデを施し、端部に面を作り出す。胴部外面は横向のミガキを施し、内面は指頭を少しづつらしながら押捺する。4・5は甕。4は、口縁端部を跳ね上げるように横ナデする。その結果、端面には3条の細い擬凹線風の沈線が見られる。5は、口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、指頭を押捺して刻目を施す。

図98-1は柱状片刃石斧の破片で、上半と下半の両面を欠損し、刃部の一部が残存するのみである。暗灰色の粘板岩製。2は敲石。扁平な花崗岩の円錐を利用している。上面と側

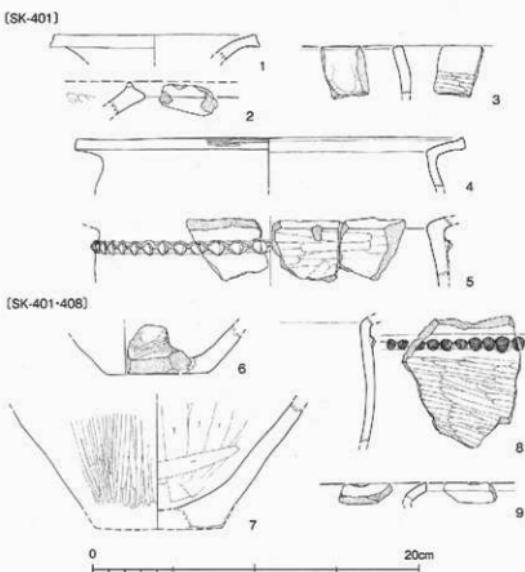


図97 A区SK-401・408出土遺物実測図（縮尺1/3）

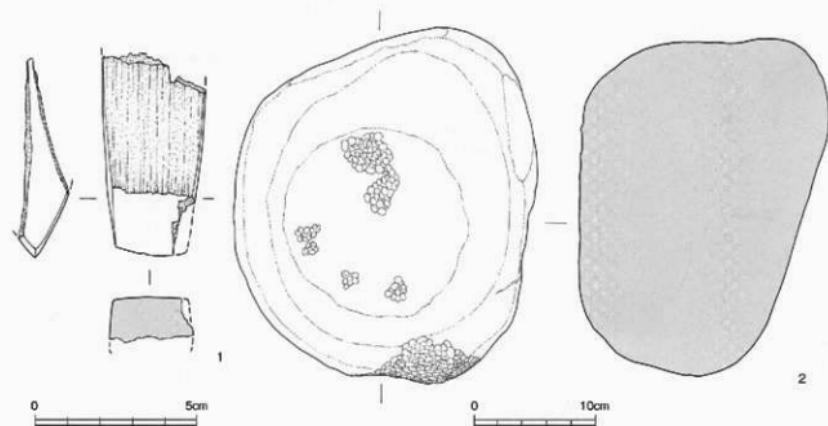


図98 A区SK-401出土遺物実測図（縮尺2/3、1/3）

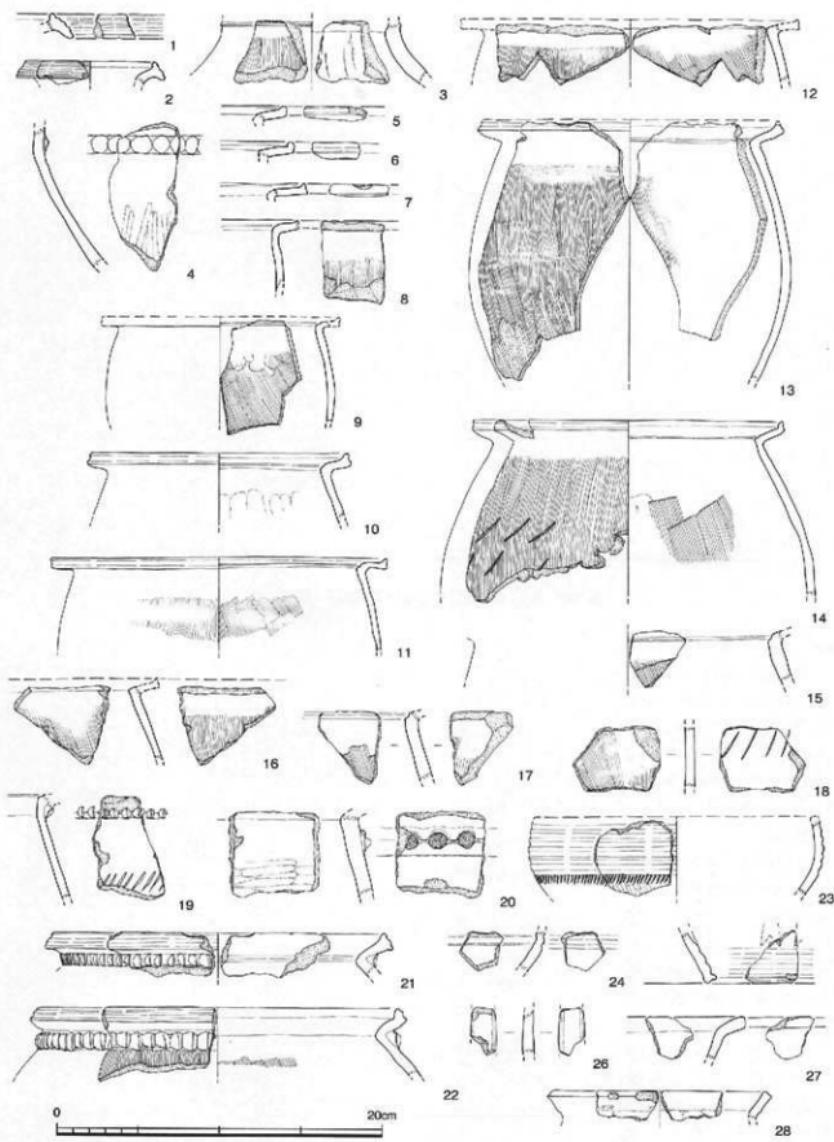


図99 A区 SK-402出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

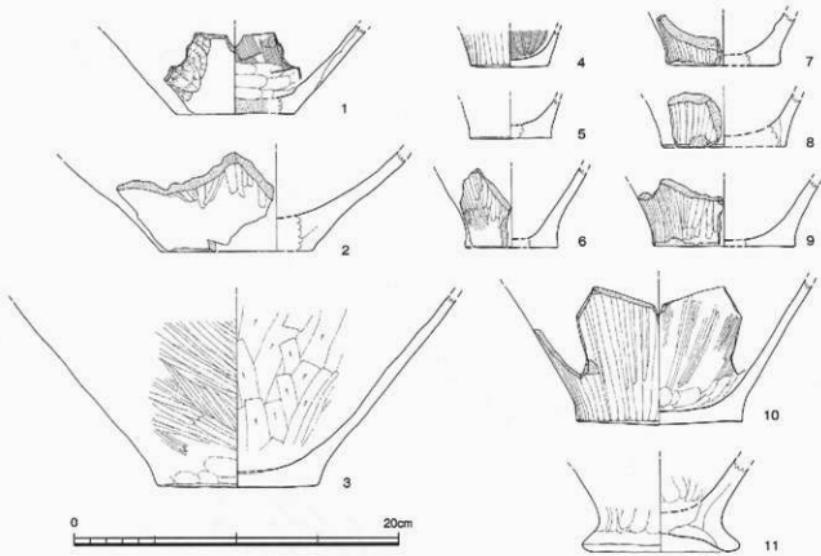


図100 A区SK-402出土遺物実測図2（縮尺1/3）

縁の一部に敲打痕が残る。

以上の出土遺物はいずれも
弥生時代のものばかりである
が、埋土が灰黄褐色砂質土を
主体とすることから、SK-401
は古代後半の土壤と判断した。

SK-402

A区南西部の調査区南壁沿
いのDX-41区に位置する（図
96、図版24-2）。細長い楕円
形の土壤で、上層水田（Ⅱ-
2-②）層の下面から掘り込
まれている。南側は調査区外
にのび、西端部は塹壕で破壊
されている。残存する長軸長
は2m、幅66cm以上を測る。
土壤底には、径1～3cmの黄
褐色砂質土塊が非常に多く混
じる黒褐色砂質シルトの②層

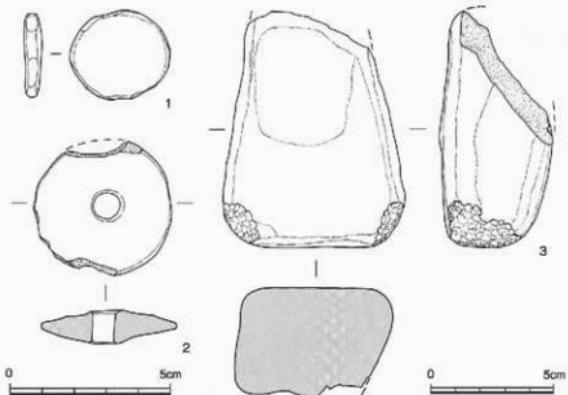


図101 A区SK-402出土遺物実測図3（縮尺 1・2:2/3、3:1/2）

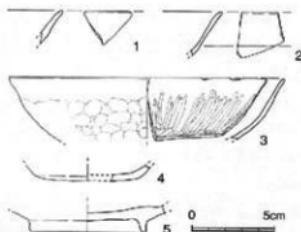


図102 A区 SK-402出土遺物実測図4 (縮尺1/3)

が流れ込む。その上部には黒褐色砂質シルトの①層が厚く堆積する。調査時には、東端部でSP-584がSK-401を切っていることに気づかず、一緒に掘り上げてしまい、若干遺物が混乱しているが、ほとんどの遺物は①層下半部から出土している。

図示した遺物の中で、図99-11・14、図100-3は埋土①層、図99-1・2・4・13・16・18・22・26、図100-2・7・9～11、図101-1は埋土②層、図99-20・27は土壤底面から出土しているが、埋土中として取り上げた遺物も含めて、土壤が埋没する過程で一気に投棄されたものと考えられる。

図99-1～4は壺である。1は、粘土紐を貼り付けて口縁部を上下に拡張し、断面波板状の四線文を4条施文する。2も、粘土紐を貼り付けて口縁端部を上下に拡張する。端面には2条一組の四線文を、下半に施文した後、上半に強く施文し、下半の1条目が消されている。3は頸部に断面三角形の細い突帯が巡る。4は、頸部に突帯を貼り付け、刻目を施す。器面が荒れているが、刻目は指頭の押捺によるものと考える。

図99-5～20は壺。5は、口縁端部を上方に摘み上げるように横ナデを施し、丸く仕上げる。端面にはヘラ状工具による浅い沈線を施す。屈曲部内面に沈線が巡る。6は、口縁端部を跳ね上げるように横ナデし、丸く仕上げる。端面には棒状工具による四線文状の沈線を施す。7は、口縁端部を跳ね上げるように横ナデを施し、その結果、端面が凹む。8は、口縁端部を上方に摘み出すように横ナデを施す。屈曲部内面には浅い沈線が巡る。9の屈曲部内面には段状の沈線が巡る。10は、口縁端部を跳ね上げるように横ナデを施し、端面にはヘラ状工具による一条の四線文状の沈線を施す。屈曲部内面には浅い沈線が巡る。11は、口縁端部を上方に摘み上げるように横ナデを施す。その結果、端

面にナデによる2条の擬凹線文が見られる。屈曲部内面に段状の沈線が巡る。13は、口縁端部を跳ね上げるように横ナデし、端面がわずかに凹む。屈曲部内面には浅い沈線が巡る。14も、口縁端部を跳ね上げるように横ナデし、端面に1条の四線文を施す。胴部には板状工具によって2列の刺突文が施される。刺突文は全周せず、上下で刺突の間隔が異なる。屈曲部内面は横ナデによってわずかに沈線状に凹む。15・17の口縁屈曲部の内面には段状の沈線が巡る。18は胴上部の破片で、刷毛目工具で「ノ」の字状の刺突文を施す。19は、口縁部直下に突帯を貼り付け、指先を押捺して刻目を施す。屈曲部内面には段状の沈線が巡る。胴部に板状工具の小口による刺突文を施す。20は、口縁下に断面三角形の突帯を貼り付け、平織りの布を巻いた指頭を押捺して刻目を施す。21・22は甕もしくは鉢である。21は、横ナデによって口縁端部を上下に拡張し、2条の四線文を施す。上段は深く、下段は浅い。口縁部は「く」字形に屈曲し、直下に突帯を貼り付け、ヘラ状工具を押捺して刻目を施す。屈曲部内面は浅く沈線状に凹む。22も、口縁端部を跳ね上げるように横ナデを施す。口縁端面に2条の四線文を施す。「く」字形に屈折する口縁部の直下に突帯を貼り付け、指先を押捺して刻目を施す。

図99-23～26は高杯。23は、口縁部外面に6条の浅い凹線文を施し、その下方に刷毛目工具を押捺して短斜線文を施す。24は、外面にヘラ状工具による断面U字の四線文を2条施す。内面は細い板状の工具による強い横ナデによって凹む。25は、脚部外面に3条、脚端部に1条の四線文を施す。矢羽根透孔の下部が残るが、貫通の有無は不明。26は、方柱状の脚部の小片で、両側部に平行する透孔をもつことから、長方形透孔を持つ高杯の脚部と考えた。

図99-27は、口縁部が「く」字形に屈折し、口縁端部は面取りされる。鉢と考えた。28は、甕もしくは鉢。

図100-1～11は底部片。1～3は壺、4～11は甕と考えられる。1の外側には焼成時破裂痕が残る。2・3は大型壺の平底の破片で、3の底部付近は胎土が土塊となって崩れ、焼成不完全品と考えられる。5～10は平底、11は脚台状の上げ底。10・11の外側には黒斑が生じている。また、11は、円盤状の粘土を土台に常状の粘土紐を巻き付けた後、内底面に粘土を充填して成形している。

図101-1は、扁平な砂岩円礫を利用した磨石で、側

縁に研磨痕が残る。2は土製紡錘車。周縁の一部を欠損するが、径4.2cm、孔径0.95cm、現存重量14.1gを測る。3は砂岩の円窓の一面前を砥面として利用している。

以上の遺物は、いずれも弥生中期後葉に比定できる。図102に図示した遺物は、もともとSP-584に伴う遺物をSK-402として誤認して取り上げた遺物である。いずれも古代後半の土師器である。図102-2の外面上には沈線が1条遡る。3には精良粘土が用いられている。4の皿の外底面には回転糸切り離し痕が残る。5の高台の外底中央にも回転糸切り離し痕が残る。

以上の出土遺物と、埋土が黒褐色砂質シルトを主体とする埋土aに分類できることから、SK-402は弥生中期後葉の土壤と判断した。

SK-403

A区南西角のDZ-41区に位置する。当初、SP-570との切り合いで気がつかず、土層断面を観察する時にSK-403がSP-570を切っていることを確認した。そのため、細長い梢円形の土壤と考えられるが、規模は不明である。

埋土は、黒褐色砂質シルトで、小指～親指先大のにぶい黄褐色砂質シルト塊が非常に多く混じる。出土遺物は弥生土器片が3点出土しただけである。1点は、外面をミガキ調整して内面をナデ仕上げした壺の胴部片、2点は外面を刷毛目調整し内面には刷毛目調整後にナデを施す壺の胴部破片である。ともに、弥生中期後葉の可能性が高い。

以上の出土遺物と、埋土が黒褐色砂質シルトを主体としていることから、SK-403は弥生中期後葉を前後する土壤と考えられる。

SK-404

DZ-42区の調査区西壁際で出土した。西半部は調査区外にのびる。長径1.56mを測る不整円形の掘り形をもつ。南半部は深さ20cmで、底面はかなりの凹凸がある。北半部は深さ6cmほどのテラス状となっている。

埋土は①～④層に分層できる。①層は黒褐色砂質シルトに黄褐色シルトが混じる。②層も黒褐色砂質シルトを主体とするが、黄褐色砂質シルトの小塊が点々と混じる。③層は黄褐色砂質土で、黒褐色砂質シルトが縞状に混じる。④層は黄褐色砂質土と黒褐色砂質土塊が混じり合う。

埋土下半部から、弥生土器の壺の口縁部片1点(図103-1)、その他胴部小片20～30点が出土している。胴部片には、内外面に刷毛目調整を施すものや、外面

を刷毛目調整し内面にナデ調整を施すもの、外面をミガキ調整し内面に板状工具におけるナデ調整を施すものなどがある。

出土遺物はいずれも弥生土器ばかりである。しかし、埋土に黄灰色砂質土が多くみられることから、古代後半の土壤と考えてよい。

SK-406

『年報』でSK-406として報告した遺構は、SR-400の落ち込みを部分的に誤認したもので、調査時に番号を付け忘れていた土壤にSK-406を付与した。調査区南東隅のDS-41区に位置し、西半部を擾乱で破壊され、南半部は調査区外にのびる。残存長1.25m、深さ10cmの土壤で、梢円形の掘り形をもつものと考えられる。上層水田(II-2-②)層の下面から掘り込まれている。

埋土は黄灰色砂質土を主体として、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。

埋土から、弥生土器2点、瓦質土器2点が出土した。弥生土器は、平底の大型壺の底部から胴部にかけての破片で、もう1点も同一個体と考えられる(図103-5)。瓦質土器2点は同一個体と考えられる。また、調査区壁面から焼土塊が出土している。出土遺物と埋土の特徴から、SK-406は古代後半の土壤と判断できる。

以上の出土遺物と埋土の特徴から、SK-406は古代後半の土壤と判断できる。

SK-407

DV-42区に位置する径68×139cmの不整形の土壤である。深さ16cmを測るが、底面はかなり凹凸がある。埋土は、灰黄褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土を主体とする。①・②層は、砂礫混じりの灰黄褐色砂質土を主体として、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。②層は、砂礫が多く混じり、にぶい黄橙色砂質土の小塊も多い。③・④層は、にぶい黄褐色砂質土に、にぶい黄橙色砂質土塊が混じる。④層は、にぶい黄橙色砂質土塊の割合が高く、砂礫が混じる。⑤層は、砂礫混じりのにぶい黄褐色砂質土に、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じり合う。

埋土中から、古代後半の土師器塊や皿、胴部1点が出土している(図103-2～4)。2は塊で、外面は二次的な被熱を受け赤変している。3は皿。4は輪高台をもつ塊。また、②層には炭化物片が含まれていた。

出土遺物と埋土の特徴から、SK-407は古代後半の遺構と考えてよい。

SK-408

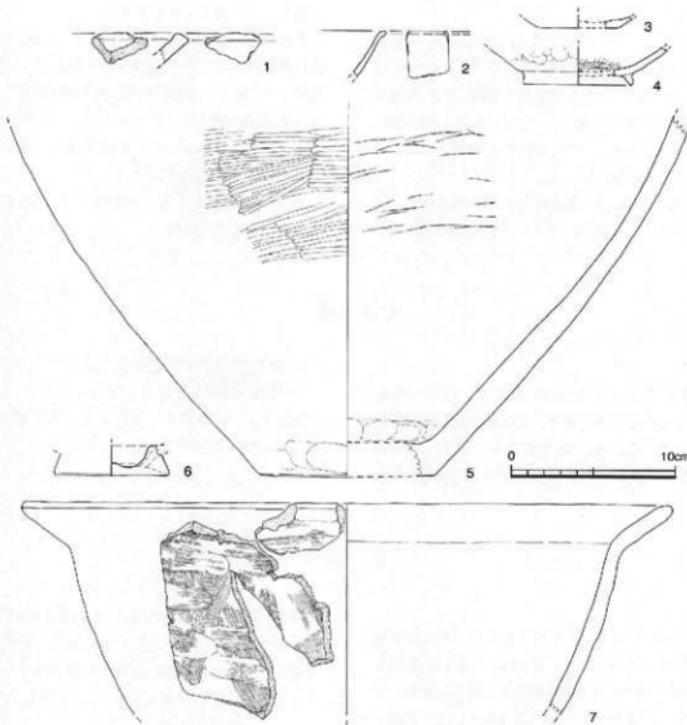


図103 A区SK-404・406・407・425出土遺物実測図（縮尺1/3）

DV-41区のSK-401を調査中に、土層断面だけで確認したため、北端の一部の掘り形しか検出できなかつた。南北径90cmほどの小型土壙で、SK-401を切る。SP-593が埋土を切り込み、遺構実測図の埋土①～③層はSP-593、④～⑧層がSK-408の埋土である。

埋土④～⑧層はいずれも北側から流れ込んだように堆積する。④層は、灰黄褐色砂質土・灰白色・明黄褐色砂質土が混じり合い、砂礫を多く含む。⑤層は、黒褐色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。⑥層は、灰黄褐色砂質土を主体として、明黄褐色砂質土の小塊を含む。⑦層は灰黄褐色砂質土・灰黄褐色砂質土・灰白色砂質土のレンズ状ブロックが互層状態で堆積する。⑧層は、灰黄褐色砂質土と黄褐色砂質土が混じり

合い、浅黄色砂質土のレンズ状ブロックを少量みられる。

埋土⑤層から弥生土器の壺胴部片2点、⑥層から弥生中期後葉の甌口縁部小片1点と胴部片4点が出土した。

いずれも弥生時代の遺物であるが、埋土が灰黄褐色砂質土・灰白色・明黄褐色砂質土で構成されることから、SK-408は古代後半の土壙と考えてよい。

なお、SP-593の埋土部分である①～③層は、灰黄褐色砂質土を主体とする。①層は小砾や小石が径3～4cmの塊で混じる。②層は明黄褐色砂質土の小塊が少量混じり、③層には明黄褐色砂質土や灰白色砂質土のレンズ状ブロックが多くみられる。

SK-425

A区中央の南よりのDW-42・43区に位置する。当初、SP-519・520と2つの小穴が重複していると考えていたが、埋土の観察から1基の土壙と判断した。長軸長1.3m、短軸長70cmの不整形の土壙である。SP-523に切られる。浅い土壙で、埋土は褐灰色砂質土ににぶい黄褐色砂質土の小塊が混じる。

遺構検出面で土師器の柱状高台土器の底部破片（図103-6）、埋土中から土鍋（7）、弥生土器の小片など

が出土している。6は粘土紐巻き上げと左回りの回転ナデによって底部を中空に成形する。器壁の芯部には黒化層が残る。7の口縁部外面は布を当てて横ナデを施す。そのため、端部に明確な稜線が確認できる。胴部は縱方向の板またはヘラ状工具による調整の後、横方向に指ナデを施す。これらの調整の一部に細密条線が見られる。内面は不定方向のナデである。

以上の出土遺物と埋土の特徴から、SK-425は古代後半の土壙と判断する。

5 溝

SD-405

A区西半部のDY-42・43区に位置する。幅30~43cm、深さ2~3cmの浅く細い溝で、北端部は壘壠で破壊されている。残存長2.5m。埋土はにぶい黄灰褐色砂質土を主体とする埋土cの遺構に類別できる。白色砂砾

やにぶい黄橙色砂質土塊が多く混じる。

SD-405から遺物は出土していない。しかし、灰色系の埋土をもつことから、古代後半の溝と判断した。また、溝の性格は不明である。

6 構列

SA-409

調査区南西部のDW・DX-41・42区で、杭痕跡を確認したSP-497・599がある。周辺をみると、東からSP-497・598・599・507・506がほぼ一直線に並ぶ。いずれも埋土cの遺構で、構列SA-409とした。北西-南東方向にのび、全長は6.1m。各杭穴の間隔は、東からSP-497・598間が2.63m、SP-598・599間が1.1m、SP-599・507間が1.05m、SP-507・506間が1.45mである。

SP-497は32×27cm、深さ25cmの不整な長円形の杭穴である。埋土中位で径7cmの杭痕跡を確認できた。埋土①層は、杭を抜き取った後に流入した土層で、褐灰色砂質土で、径2~3cmのにぶい黄橙色砂質土塊が混じる。②は杭痕跡で、灰黃褐色砂質土を主体として明黄褐色砂質土の小塊が混じる。③・④層は灰黃褐色砂質土・明黄褐色砂質土が混ざり合う土層で、④層は明黄褐色砂質土が多く、やや黄色みが強い。

SP-598は、壘壠の底面で出土した。径25cmほどの円形を呈し、壘壠底面からの深さは10cmを測る。杭痕跡は確認できなかったが、埋土は褐灰色砂質土である。

SP-599は東半部を壘壠で破壊されている。推定径24cm、深さ17cmの円形の掘り形をもち、径8cmの杭痕跡

を確認できた。杭痕跡にある①層は褐灰色砂質土。②~④層は褐灰色砂質土ににぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。②層のにぶい黄橙色砂質土塊は、③層と比べて小さく不定形である。また、④層のにぶい黄橙色

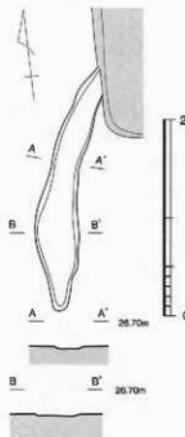


図104 A区 SD-409
遺構実測図
(縮尺1/50)

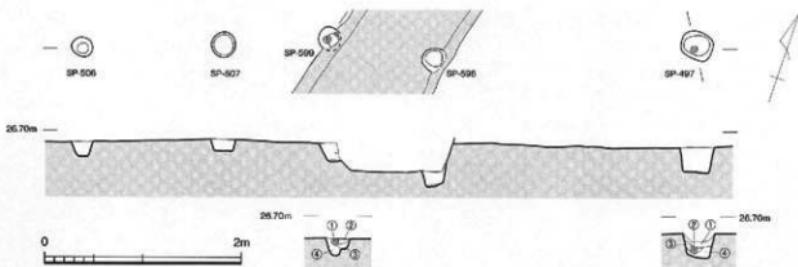


図105 A区SA-409遺構実測図（縮尺1/50）

砂質土塊は径2~3cmと大きい。

SP-507は径25cm、深さ10cmの小穴である。杭痕跡は確認できなかった。埋土は灰色みが強い灰褐色砂質土である。

SP-506は径21cm、深さ17cmの小穴である。杭痕跡は

確認できなかった。埋土は灰色みが強い灰褐色砂質土である。

いずれの杭穴からも遺物は出土していない。しかし、埋土が灰褐色砂質土を主体とすることから、SA-409は古代後半のものと考える。

7 小穴・その他

以上の遺構に加えて、A区では多くの小穴が出土している。の中でも、柱痕跡や杭痕跡が確認できたが周囲に掘立柱建物や柵列を構成するものがないもの、遺物が出土している小穴については、以下に報告する。他の小穴については、巻末の遺構一覧表を参照されたい。

SP-443

DT-44区に位置する。径43×50cmの梢円形の小穴である。SP-444を切る。埋土は砂礫混じりの灰茶色砂質シルト。検出時に径20×15cmほどの花崗岩円盤が出土した。埋土の特徴から古代後半の小穴と判断できる。

SP-466

DS-41区の調査区南壁際で確認した。南半部は調査区外にのびる。上層水田（II-2-②）層の下面から掘り込まれている。推定径75cm、深さ11cm。調査時にはSP-566に切られると思ったが、埋土の特徴とSP-466出土遺物から逆にSP-566を切るものと判断した。

埋土は、黒褐色砂質シルトに暗黄灰色砂質土や黄褐色砂質シルトが多く混じる。検出面で凹石（図107-17）、埋土中から弥生土器の口縁部片1点と胴部片2点が出土している。出土土器は弥生土器ばかりで

あるが、埋土に暗黄灰色砂質土が多く混じることから、古代後半の小穴と考える。

SP-471

DT-41区に位置する。SP-473に切られる。長径53cm、深さ29cmの不整梢円形の掘り形をもつ。埋土は、黒褐色砂質シルトを主体として、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。埋土中から、弥生時代中期後葉～後期初頭の甕口縁部片（図107-1）と胴部片2点が出土している。埋土の特徴から弥生中期後葉～後期初頭の小穴と考えてよい。

SP-473

DT-41・42区に位置する。SP-471を切る。長径66cm、短径62cmの不整円形の掘り形をもつ。底面は凸凹が著しく、深さ33cm。埋土は、褐灰色砂質土を主体として、明黄褐色砂質土や灰黃褐色砂質土、褐灰色砂質、褐灰色砂質土、暗褐色砂質土が混じる。

埋土は、全体を埋める①・②層と、底面の窪みを埋める③・④層に分層できる。①・②層には砂礫混じりの褐灰色砂質土、①層には明黄褐色砂質土の小塊、②層には灰黃褐色砂質土の小塊が含まれる。③層は、褐灰色砂質土を主体として、明黄褐色砂質土の小塊が混じる。④層は、砂礫混じりの暗褐色砂質土と明黄褐色

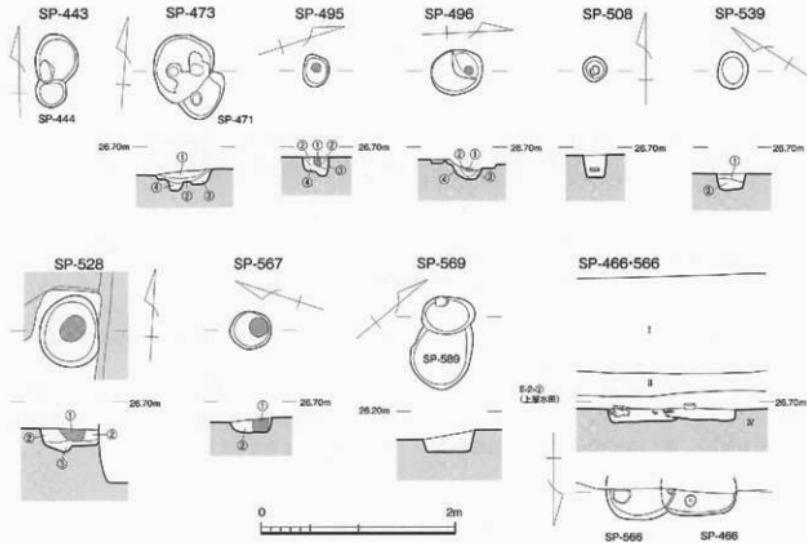


図106 A区 SP-443・466・473・495・496・508・528・539・566・567・569遺構実測図（縮尺1/50）

色砂質土が縦状に互層をなす。

埋土①層から図107-3の甕口縁部片を含む弥生土器15点、埋土③層から図107-2の甕口縁部片などの弥生土器片6点が出土している。時期を特定できる資料は、いずれも弥生中期後葉～後期初頭のものであるが、埋土の特徴から古代後半の小穴と考えられる。

SP-495

DW-41区に位置する。径31×26cm、深さ19cmの長円形の掘り形をもち、径10cmの杭痕跡を確認できた。杭痕跡は先端が尖る。杭痕跡の①層は、褐灰色砂質土で、明黄褐色砂質土の小塊が少量混じる。②層は、にぶい黄橙色、褐灰色砂質土、灰白色砂が塊となって混じりあう。不定形炭化物を含む。③・④層は、にぶい黄橙色と褐灰色砂質土が塊となって混じり、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックがみられる。④層には、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックが多い。

埋土②層から出土した炭化物片があるだけで、遺物はない。埋土の特徴から古代後半の杭穴と考える。

SP-496

DW-41区に位置する。先に報告したSP-495から東へ90cmほど離れる。長径54cm、短径45cmの不整な長円

形の掘り形をもつ。北側をSD-18に切られる。南半部は深さ4cm、北半部がさらにならに16cm掘り込まれた二段掘りの掘り形をもつ。北半部で径10cmの杭痕跡を検出した。

杭痕跡の①層は、黄灰色砂質土で、小指先の大い小石が混じる。②層は、灰黄色砂質土とにぶい黄橙色砂質土が混じり合う。径2～3mmの砾を含む。③層は、黄灰色砂質土を主体とし、にぶい黄橙色砂質土の小塊が混じる。④層は、黄灰色砂質土に褐灰色砂質シルトの小塊がみられる。

埋土②層から炭化物片が出土した。他に時期を決定できる遺物はないが、埋土の特徴から古代後半の杭穴と考える。

SP-508

DX-41区に位置する。径24cm、深さ20cmの円形の掘り形をもつ。小片ではあるが、埋土中位から土師器片がかたまって出土した。埋土は灰色みが強い灰褐色砂質土である。

出土遺物には、土師器皿（図107-5）や壺、塊（6）、外面に幅広のタタキ目が残る土鍋の胴部片（7）がある。土師器壺の外底面には回転糸切り離し痕が残る。

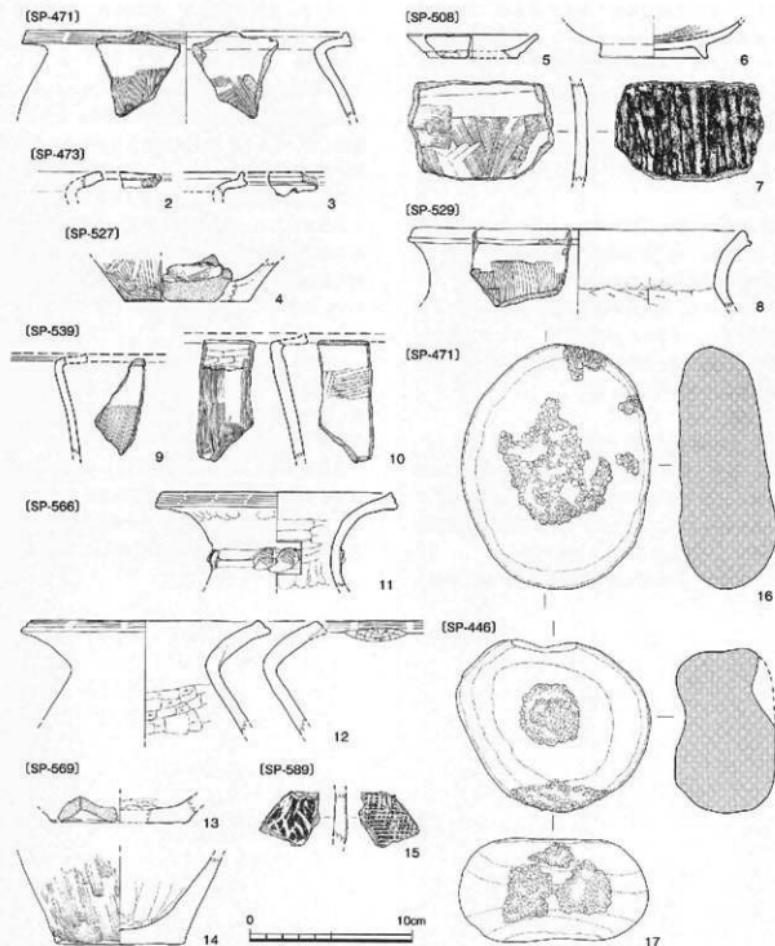


図107 A区 SP-446・471・473・508・527・529・539・566・569出土遺物実測図（縮尺1/3）

出土遺物と埋土の特徴から、古代後半の小穴と判断できる。

SP-528

DY-43区で出土した立柱痕跡をもつ柱穴である。周囲には掘立柱建物を構成する柱穴がみあたらない。長

径74cm、推定短径63cmの長円形の掘り形をもつ。底面はかなりの凹凸があり、深さ23cm。掘り形のほぼ中央で径23cmほどの柱痕跡を確認できた。

立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルトで、親指先大の黄褐色砂質シルト塊が点々と混じる。②・③層は掘り

形埋土。②層は黒褐色砂質シルトであるが、黄褐色砂質シルト塊が径3~4cmと大きい。③層は、黄褐色砂質シルトに径3~4cmの黒褐色砂質シルト塊が点々と混じる。①・②層と比べて砂礫が多く混じる。

遺物は出土していない。しかし、埋土が黒褐色砂質シルトを主体としているので、弥生時代~古墳時代の柱穴と考える。

SP-539

DY-43区に位置する径30×37cmの楕円形の小穴である。深さ17cm。SB-421を構成するSP-536を切る。埋土は黒褐色砂質シルトである。

埋土上部から、弥生中期後葉の甕（図107-10）を含む胴部片3点、下部から同時期の甕（9）や胴部片が出土している。出土遺物と埋土の特徴から、弥生時代中期後葉前後の柱穴と考える。

SP-566

DS-41区の調査区際際で確認した。上層水田（II-2-②）層の下面から掘り込まれている。長径73cmほどを測る。南半部は調査区外にのびる。調査時にはSP-466を切ると考えていたが、埋土の特徴と出土遺物から逆にSP-466に切られるものと判断した。

埋土中位から、弥生土器やサヌカイトの破片が出土

している。弥生中期後葉~後期初頭の壺口頸部（図107-11・12）や胴部小片がある。

SP-567

DS-42区に位置する。径42×39cm、深さ14cmの不整円形の掘り形をもち、南壁沿いで径17cmの立柱痕跡を確認した。しかし、周囲には掘立柱建物を構成する柱穴がみあたらない。

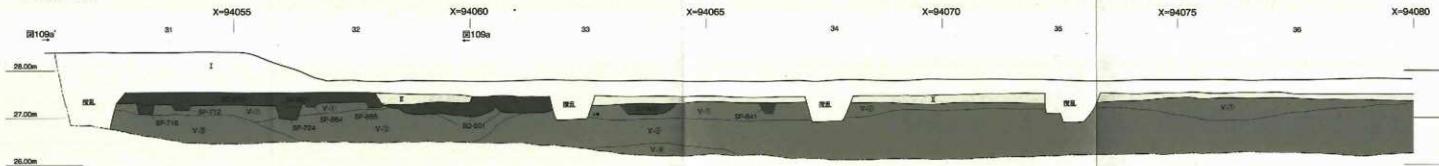
立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルトで、黄褐色シルトが少量混じる。掘り形埋土の②層も黒褐色シルトであるが、黄褐色砂質シルトが不整形な塊で多く混じる。出土遺物はないが、埋土が黒褐色シルトを主体とするので、弥生時代~古墳時代の柱穴と考える。

SP-569

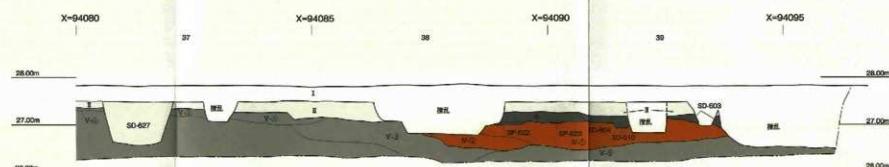
DS-42区に位置する。径54×34cm深さ12cmの楕円形の掘り形をもつ。SP-589に切られる。埋土は黒褐色砂質シルトを主体として、下半部に黄灰色砂質土や黄褐色シルトの塊が多く混じる。

遺構検出時に弥生土器の壺底部片（図107-13・14）、埋土中からも弥生土器の壺の胴部破片が出土している。出土遺物は弥生土器ばかりであるが、埋土に黄灰色砂質土が混じることから、古代後半の柱穴と考える。

1:B区西壁断面



	I層
	II層・近傍の造構
	III層・その他の造構
	IV層
	V層



2:B区東壁土層断面



A horizontal number line starting at 0 and ending at 5π . The line is divided into segments by tick marks. The first segment ends at $\pi/4$, the second at $\pi/2$, the third at $3\pi/4$, the fourth at π , the fifth at $5\pi/4$, and the sixth at $3\pi/2$.

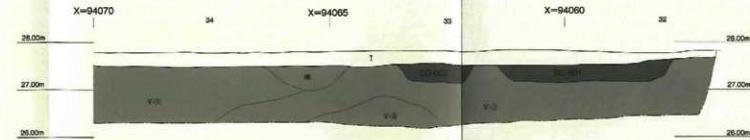


図108 B区土層断面図（縮尺1/80）

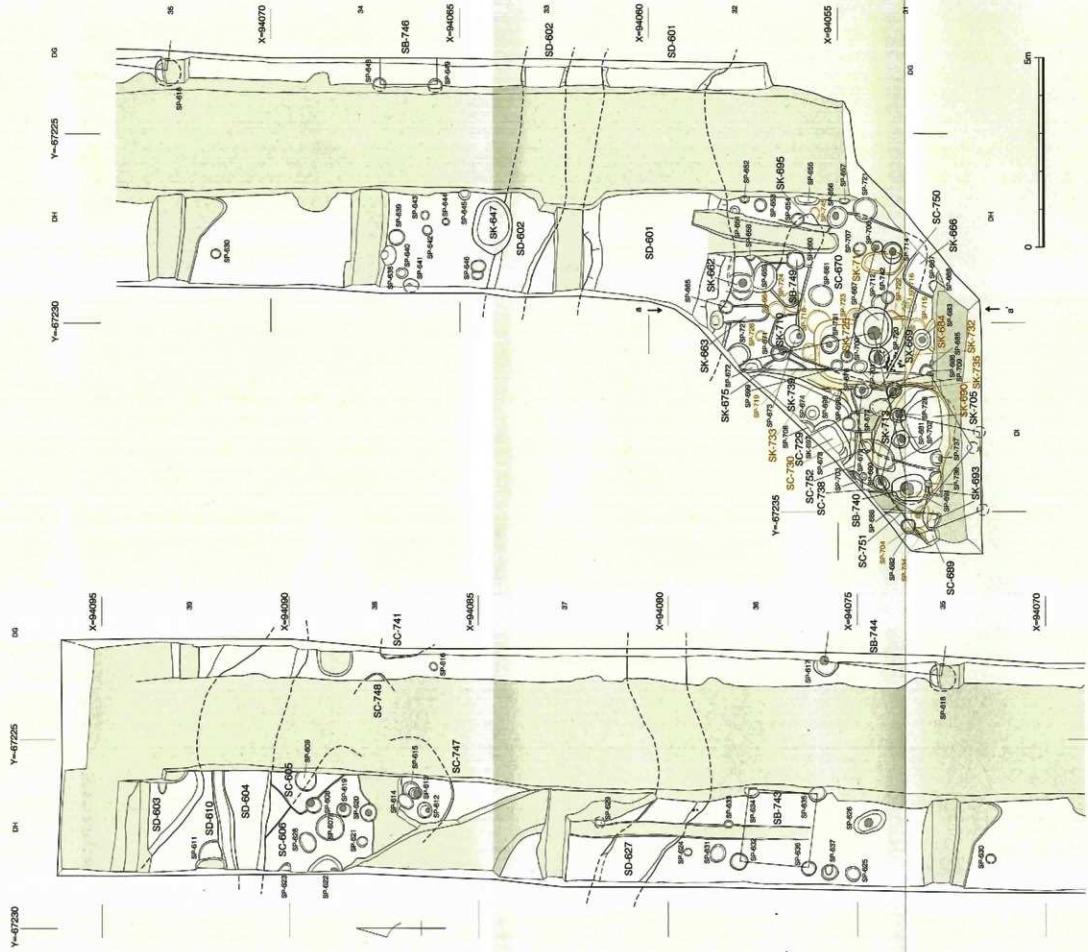


図109 B区造樹配置図(縮尺1/100)

V B区の遺構・遺物の記録

1 層序と出土遺構の概要

B区では、基本層序のI～V層を確認できた（図108、図版25・26）。造成土のI層の下層には、砂礫混じりの灰色系のシルト層が堆積する。基本層序のII層で、A区のII-1層に対応する城北團地造成以前の近世～近代の水田層である。B区では、北端から中央のDH-33区にかけてみられ、北端部では層厚約55cmを測り、南にいくにつれて次第に薄くなる。DH-33区以南はI層によって削平されている。

III層にあたる黒色～暗褐色系の土層は、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物を包含する。B区では、中央で下層のIV層が盛り上がっており、DH-38・39区とDH-DI-31・32区の調査区の南北にしか分布していない。20～25cmの層厚を測る。また、B区南部のDH-DI-31・32区では、III層は炭化物や土器片を多く含んでいる。掘り形ラインを検出できていないが、遺構土である可能性が高い。

IV層は、黄褐色系のシルトおよび砂質シルト層で構成され、下部には礫が混じる。B区北部のDH-37～39区付近で、V層上面に形成された窪地に南北幅約5mと部分的にしか堆積していない。IV-①層とIV-②層に分層できる。IV-①層は、にぶい黄褐色砂質シルトで、西壁DH-38・39区、東壁DG-37・38区にみられる凹部に、南北幅約5m、最大厚60cmほど堆積している。IV-②層は、にぶい黄褐色砂質シルトで、IV-①層とはほぼ同質であるが、直径3～4cm大的花崗岩円礫が多く混じる。調査区北部のDH-38区の凹部に、南北約13m、最大厚30cmほど堆積する。東壁にみられないことから、調査区西壁近くのV層上面に形成された窪地に部分的に堆積したものと考えられる。

V層にあたる土層は、花崗岩を主体とする砂礫あるいは礫層から構成され、B区全面に広がる。V-①～V-⑨層に分層できる。V-①層は、黒褐色砂礫層で、調査区北端近くのDH-37区から、調査区南端までみられる。最大層厚50cmほどで、馬の背状に大きく波打ちながら堆積する。東壁にはみられず、西壁のみにみられる。B区から西に向かって堆積していると考えられる。V-②層は暗灰色砂礫層。B区北端のDG-38～40区で、南北幅7mにわたってみられる。下部は未検出

であるが、60cm以上堆積する。西壁に対応する土層はみられないで、南東から北西方向に堆積していると推定される。V-③層はにぶい黄褐色細砂層。V-③層によってDH-31・32区とDH37・38区に形成された凹部に堆積する層。西壁だけでみられる部分的な堆積である。V-④層は黄灰色砂質土。東壁DG-37・38区で南北幅約5mにわたってみられる。V-⑤層によって形成された窪地への堆積である点で、V-③層と共通するが、砂礫の粒度が大きいことや西壁で対応する土層がみられなかったため、別の層とした。V-⑤層は、灰白～灰褐色砂層で、東西両壁にみられる。東壁では、調査区中央のDG-35～37区で南北12mにわたって南から北に堆積する。下部は未検出だが、調査では約13mの堆積を確認している。大きく波打ちながら、馬の背状に調査区全面に広がっているものと考えられる。V-⑥層は灰黄色砂質土。東壁DG-34・35区で南北10mにわたり堆積する。北から南にかけて層は厚くなる。西壁近くで下部に深くもぐり込んでいると考えられる。V-⑦層は、暗灰色砂質土で、径10cm大の円礫が混じる。調査区東壁の南端DG-32～34区にみられる。北から南にかけて層は厚くなる。V-⑧層は、黄灰色砂質土で、東壁DG-33・34区で南北3mにわたってみられる高まりである。V-⑦層内のブロックの可能性もある。V-⑨層は、灰褐色砂質土で、西壁DH-33・34区で南北3mほどの幅で確認した。部分的な堆積層である。

B区では、IV層あるいはV層上面で、弥生時代から近世の集落関連の遺構を検出した。遺構の多くは、調査区の北端と南端に集中する。

遺構の埋土には、A区の遺構埋土の区分にしたがうと、埋土a・cがある。埋土aは、黒褐色系の砂質シルトである。埋土aには砂礫や砂粒が多く混じるものとほとんど混じらないものとがある。文京遺跡13次調査・20次調査では、弥生時代の遺構埋土に砂礫・砂粒があり混じらないのに対して、古墳時代後期の遺構に砂礫・砂粒が多く混じることが指摘されている。しかし、18次調査B区では、弥生時代に位置づけられる遺構埋土にも砂礫・砂粒が多く混じるものがあり、埋

土に混じる砂礫・砂粒の多寡を指標とした時期区分は困難である。これらの区分が可能な地点は、文京遺跡13次調査・20次調査などのように、文京遺跡南部に限定される。

埋土cは黄灰色砂質土・黄灰色砂質シルト・暗黃灰色彩砂質土・暗黃灰色シルト・灰黃色砂質土などの灰色みをおびた堆積土を埋土の主体とした塊が混じる。埋土cの遺構は、A区と同じく、古代～近世の遺構である。

埋土類型ごと、時代ごとの主要遺構は、以下の通りである。

埋土a：弥生時代

　　竪穴式住居跡8棟 (SC-670・689・729・
730・738・750・751・752)

掘立柱建物1棟 (SB-749)

土壙15基 (SK-663・666・675・684・690・
695・705・710・711・713・
725・732・733・735・739)

土器溜り1基 (SX-669)

埋土a：古墳時代

　　竪穴式住居跡5棟 (SC-605・606・741・
747・748)

掘立柱建物3棟 (SB-740・744・746)

溝2条 (SD-603・610)

土壙4基 (SK-647・662・693・697)

埋土c：古代～近世

掘立柱建物1棟 (SB-743)

溝4条 (SD-601・602・604・627)

2 竪穴式住居跡

B区では13棟の竪穴式住居跡が出土した。いずれも埋土aの遺構である。その中でも、SC-670・689・729・730・738・750・751・752の8棟は弥生時代、SC-605・606・741・747・748の5棟は古墳時代の竪穴式住居跡である。

SC-605

B区北端のDH-38・39区で出土した(図110)。I・II層を除去した後、DH-31・32区にIII層が面的に広がることを確認した。III層を少しづつ削りながら精査した結果、方形あるいは長方形竪穴式住居の北西隅部と考えられる掘り形ラインを検出でき、SC-605とした。東側は南北に走る搅乱溝によって破壊され、北側部分をSD-604に切られる。南北残存長1.6m、東西残存長1.4m、深さは最深部で5.1cmを測る。SP-608に切られ、SC-606を切る。

埋土は、やや灰色みをおびた茶褐色シルトで、小礫・粗砂はあまり混じらない。

床面はほぼ平坦で、床面上でSP-609を検出した。SP-609の埋土は茶褐色シルトで、SC-605の埋土とはまったく異なる。そのため、SC-605に付設された遺構の可能性は低い。SP-609の他に、柱穴が確認されておらず、主柱穴は不明である。

遺物は埋土中から出土していない。そこで、SC-605遺構検出以前に、III層掘り下げ作業中に出土したDG・DH-38・39区III層出土遺物を検討する。これら

の遺物は、III層の掘り下げ過程でSC-605の掘り形ラインを確定できなかったため、III層として遺物の取り上げたもので、本来はSC-605ならびにSC-606埋土に包含されていた可能性が高い。

同化した遺物は8点である(図111-1～8)。1は弥生中期中葉から後期に見られる直口壺の口縁部で、口縁部には面取り調整を施す。2～8は須恵器である。2～5は短頸壺の口縁部あるいは肩部の破片、6～8は須恵器蓋あるいは壺の胴部破片である。いずれも古墳後期の須恵器である。

SC-605は、後述するように、後出するSC-606が古墳前期前半に比定されることと、SC-605上部のIII層出土遺物が古墳後期までの時間幅があることから、古墳

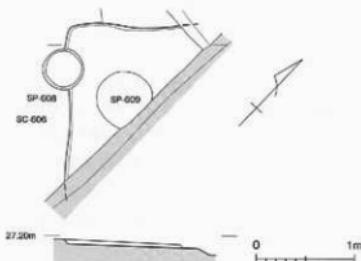


図110 B区SC-605遺構実測図(縮尺1/50)

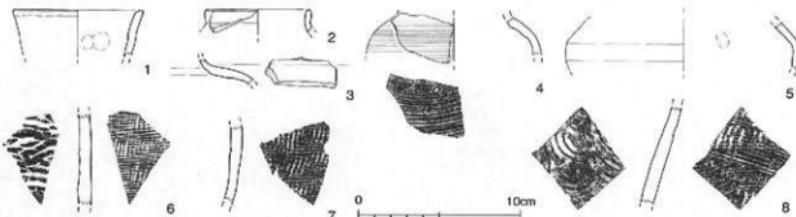


図111 B区 SC-605・606 (DG · DH-38 · 39区) 上面Ⅲ層出土遺物実測図 (縮尺1/3)

時代の堅穴式住居跡と考えておく。

SC-606

B区北端のDH-38・39区で、北西方向から南東方向に約165m延びる掘り形を検出できた。西は調査区外にのび、東と南は搅乱層で破壊されている。方形の堅穴式住居跡と考え、SC-606とした(図113、図版27)。

SC-606北東掘り形ラインを南東方向に延長した地点に、方形あるいは長方形を呈する遺構の隅部を確認できた。平面プランからはSC-606と一連の遺構とも考えられる。しかし、床面の高さが大きく異なることから、別遺構(SC-748)とした。搅乱を挟んだSC-606南側でも、隅丸長方形の隅部を確認したが、これも床面の高さが異なるので、別遺構(SC-747)としている。

SC-606の埋土は、やや茶色みをおびた黒褐色砂質シルトである。

床面はほぼ平坦である。床面を精査し、SP-607・SP-619～SP-623などの柱穴を検出した。しかし、配置関係からSC-606の主柱穴と特定できるものはない。

SC-606の埋土からは、弥生土器・土師器の小片が散発的に出土している。埋土と埋土下部に分けて遺物の取り上げを行った。埋土下部からは、弥生前期の重弧文が描かれた壺の胴部破片(図112-1)、弥生中期後葉～後期の平底の壺の底部破片(図112-3)、弥生土器の胴部破片2点が出土している。

埋土として取り上げた遺物には、弥生中期後葉の口縁端部を上方に摘み上げた壺の口縁部破片(図112-2)、壺あるいは壺の胴部片2点、土師器壺の頸部から肩部にかけての破片(図112-4)がある。埋土出土の遺物の中では、土師器の壺が最も新しい遺物である。径はもう少し大きくなるものと考えられる。「く」字

形に屈折する口縁部がつくものとみられ、器壁は薄く、内面にはヘラケズリと考えられる調整痕跡を観察できる。古墳前期前半に比定できる。SC-606の掘り形は深いところでも約4cmほどである。埋土下部および埋土として取り上げた遺物は、床面直上出土とは言えないが、床面直上に埋積された遺物と言える。SC-606の報告部分でも検討したが、SC-606上部にあたるDG · DH-38 · 39区Ⅲ層では、古墳後期までの遺物が出土している。このことから、SC-606は古墳後期まで下る可能性を残すものの、埋土から出土した最も新しい遺物が古墳前期前半に比定できるので、SC-606は当該期の堅穴式住居跡と考える。

SC-606の床面で確認したSP-619・SP-620・SP-620 · SP-622については、立柱痕跡を確認できたので、ここで報告しておく。

SP-619は、長径38cm、短径35cm、深さ13cmの楕円形掘り形をもつ。径16cmの立柱痕跡の①層を確認した。やや茶色味をおびた黒褐色シルトである。掘り形埋土の②層は黒褐色砂質シルト。径3mm前後の小礫が多く混じる。遺物は出土していない。

SP-620は、長径46cm、短径42cm、深さ14cmの不定円形の掘り形をもつ。掘り形中央で、径18cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡の①層は、やや茶色みをおびた

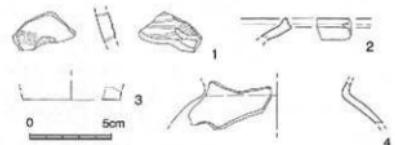


図112 B区 SC-606出土遺物実測図 (縮尺1/3)

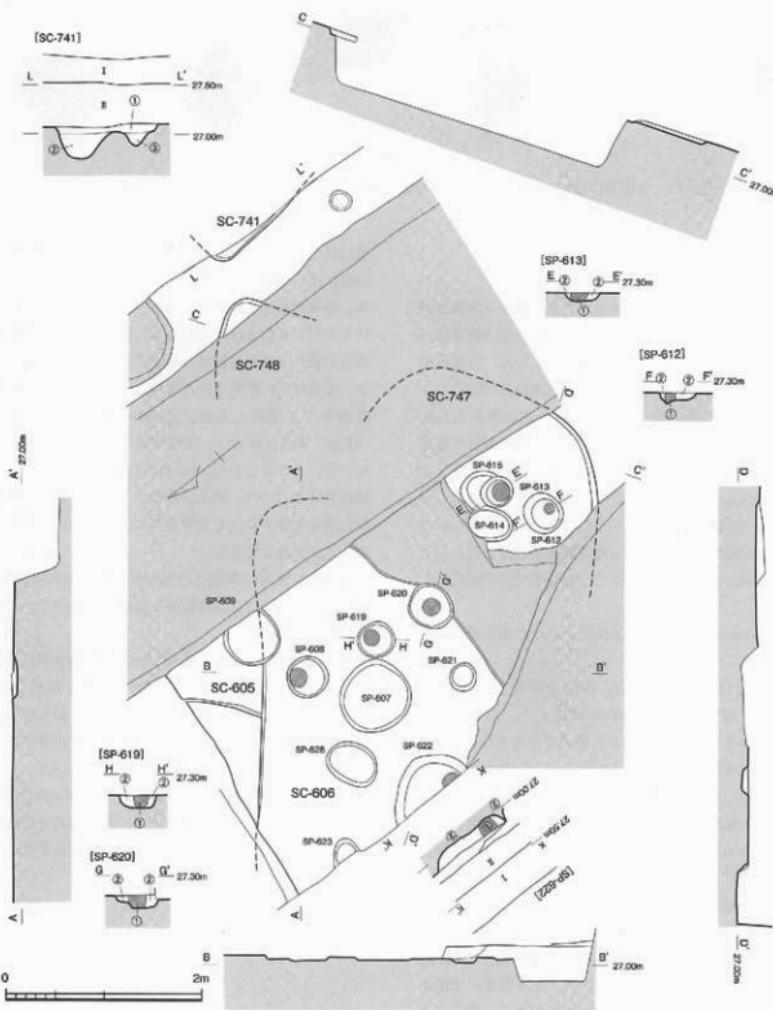


図113 B区 SC-606・741・747・748構造実測図（縮尺1/50）

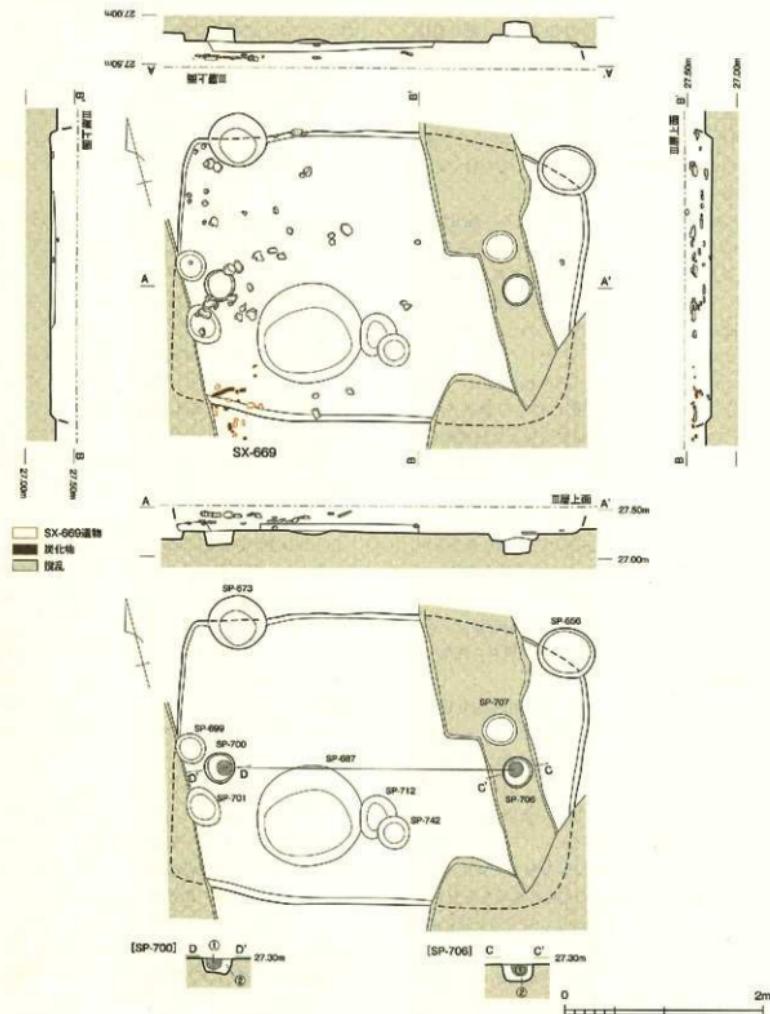


図114 B区SC-670遺構実測図（縮尺1/50）

黒褐色砂質シルトである。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、小石や小礫が多く混じる。遺物は出土していない。

SP-622は、SC-606の西壁沿いで出土した。掘り形は、残存部で最大幅92cm、深さ12cmを測る。残存部の形状から、長辺円形の掘り形と考えられる。径18cmの立柱痕跡が確認できた。①層は立柱痕跡である。掘り形埋土の②層を含めて、観察記録を取り忘れていた。遺物は、埋土中から自然縛が1点出土しているだけである。

SC-670

B区南端部 DH・DI-31・32区に位置する。長辺41m、短辺29.5mの胴張りの長方形堅穴式住居跡である（図114、図版29-1）。遺構の残存状況は最深部で8cmほどである。南西部及び東半部の一部を擾乱によって欠く。SK-666・SP-656・673・687に切られ、SK-695・710・725を切っている。

床面で柱穴 SP-699～701・712を検出した。また、擾乱部分の底面でも、住居跡に伴う可能性をもつ SP-706・707を検出できた。配置関係と立柱痕跡の有無から、SP-700・706を主柱穴とする2本柱構造を考えた。

SC-670の埋土は黒褐色砂質シルトである。

SP-700は、径30cm、深さ15cmの円形掘り形をもつ。中央よりやや東よりで径14cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡の①層は、黒褐色砂質シルト。炭化物小片が少量混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトに、暗灰色粗砂小礫が多く混じる。②層から弥生中期の壺胴部破片が1点出土している。

SP-706は、径30～32cm、深さ15cmの円形掘り形をもつ。中央からやや北側にずれた位置で、径15cm以上の立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は、黒褐色砂質シルトで、炭化物片が多く混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。遺物は出土していない。

SC-670を検出する際、DI-31区Ⅲ層中で弥生土器片と長さ25cm、幅5cmの棒状の炭化物の集積を確認した。分布範囲がSC-670外にも広がり、SC-670上部に掘り込まれた別遺構としてSX-669とした。

このSX-669以外でも、SC-670の埋土から炭化物の塊や焼土塊が比較的集中して出土している。SC-670の床面では、焼土面や炭化物の集積などは見られなかった。埋土中の炭化物や焼土塊は、住居廃絶後に投棄されたものと考える。

これに加えて、SC-670上面のⅢ層部分、埋土、床面上から遺物が出土している。

床面上から出土した遺物は、十数点あるが、図化できたのは1点のみである（図115-14）。口縁部の上面が内湾する壺で、弥生中期後葉に比定できる。

埋土から出土した遺物は、150点以上を数える。弥生土器壺・壺の小片・細片や石器があり、時期比定が可能なものを中心として図示した（図115・116）。図115-1は縄文土器深鉢の肩部破片で、外面には条痕調整が施される。

図115-2～35は弥生土器である。2～12は壺。2は口縁部から頭部の破片。口縁端部を上下に拉張し、端面には幅広で深い凹線文が3条施される。3・4は口縁部から頭部の破片で、口縁端部を上下に拉張し、端面に3条の凹線文を施す。5は壺の口縁部の破片で、壺部を上下に拉張し、波板状の凹線文を3条施す。6の口縁端面はナデにより、凹線状を呈する。7は口縁部から頭部の破片。口縁端部を上方に摘みあげる。8・9は肩部破片。10～12は頭部～肩部の破片である。10は、頭部の付け根にヘラ状工具を用いた深い刻目が施された突帯が巡る。11の頭部付け根には指頭による押圧文、12には先端の鋭利な工具で刺突文が施される。

13～18は壺の口縁部の破片。13の口縁部は「く」字形に屈曲し、壺部を上方に摘みあげる。19・20は胴部上半の破片である。21は壺の平底の破片。22は壺の底部である。23は壺の胴部下半の破片である。24は壺の平底、25・26は壺の上げ底の破片である。27は深鉢形の手づくね土器。脚台状の上げ底をもつ。28は壺の底部破片である小さな上げ底である。28は直接切り合った関係にないSP-659上部Ⅲ層出土遺物と接合関係にある。

29は高杯の杯部破片か？口縁部が反転して直立した後、さらに外方に広がる。外面には沈線状の凹線文が施される。30は高杯の杯部破片で、外面上部に沈線が1条巡る。31は高杯の脚端部の破片で、端部は面取りされている。この他、Ⅲ層出土の破片と接合したものとして図117-14の高杯がある。杯部上半が反転して、湾曲しながらひろがり、口縁端面は面取りされている。

32は壺の肩部破片で、外面を刷毛目調整した後、竹管文が押捺される。33は壺の口縁部から胴部の破片で、短い「く」字形口縁をもち、口縁端部は上方に摘み上げられている。34は鉢の胴部下半～底部片である。台状の底部である。

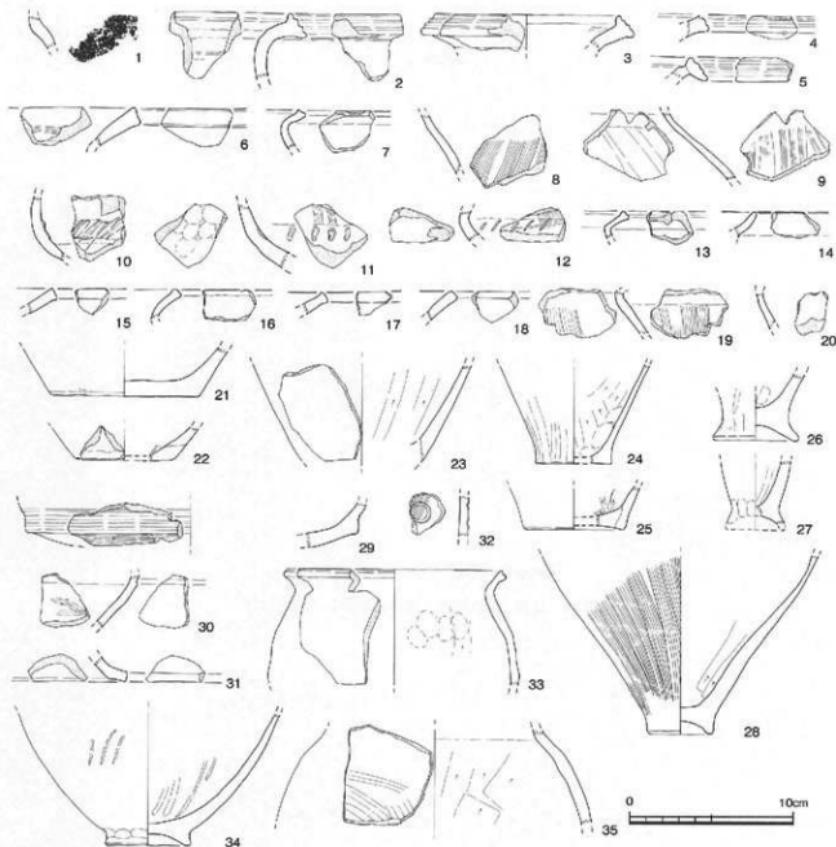


図115 B区SC-670出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

35は壺の肩部破片である。なで肩の肩部で、外面は刷毛目調整、内面は強いケズリ調整が施されている。

こうした埋土から出土した遺物は、1の縄文土器を除くと、弥生中期後葉～後期前葉に比定できるものばかりである。

この他、埋土中から石器が4点出土している(図116)。1は花崗岩の円錐を利用した叩き石。2は花崗岩の円錐を利用した磨石で、先端部には擦過痕跡がみられる。3は下半部を欠損する堆積岩製の砥石。4は

砂岩製の有溝石錘である。

SC-670上部のⅢ層から出土した遺物には、小片だけでなく比較的大形の破片も含まれる(図117-1~18)。1は弥生土器壺の口縁部の破片で、口縁端部がわずかに肥厚する。2~6は壺の頸部から肩部にかけての破片。2~4の頸部付け根には突帯が貼り付けられている。5~6は壺の肩部破片で、6の肩部には刺突文が巡る。7は壺の平底の破片である。

8~10は壺の口縁部破片。8の口縁端部は面取り調

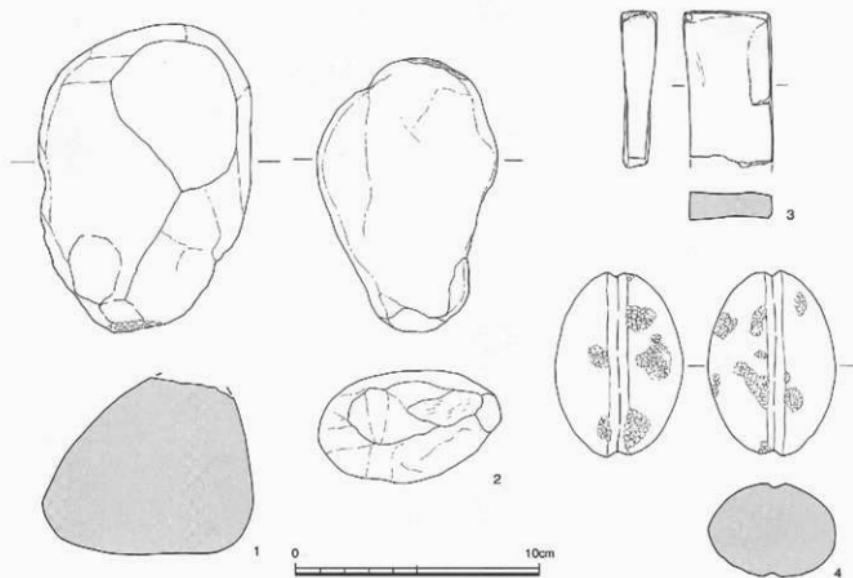


図116 B区SC-670出土遺物実測図2（縮尺1/2）

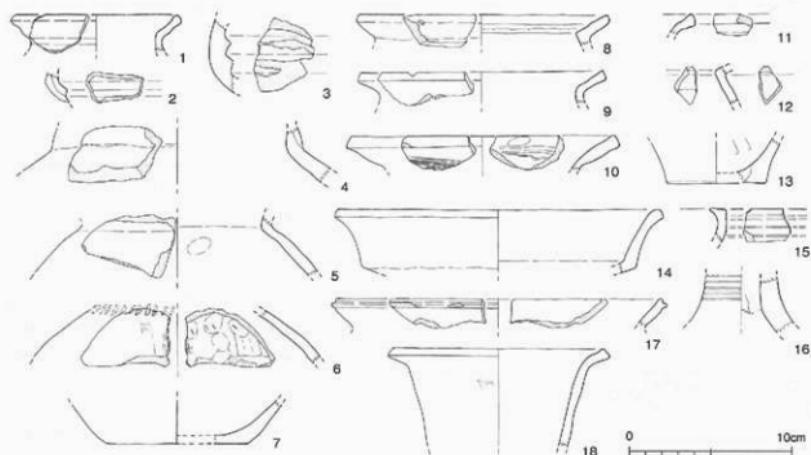


図117 B区SC-670上面Ⅲ層出土遺物実測図（縮尺1/3）

整を施され、内面には爪による押圧痕が見られる。9は「く」字形に屈曲する口縁部である。10も「く」字形口縁の壺。11は壺あるいは壺の口縁部片である。12は壺の肩部上半の破片で、内面には頸部との境に明瞭な稜をもつ。13は壺の平底の破片。

14は、前述のように、SC-670の埋土出土の破片と接合。15は高坏の坏部の口縁部破片で、口縁端部は面をなし、内側に突出する。外面には幅狭の凹線文が4条巡る。16は高坏の脚部破片で、外面には沈線が5条施される。17は壺あるいは鉢の口縁部片で、口縁端部は凹線状にくぼむ。18は長頸壺の口頭部の破片で、口縁端部をわずかに上下に拡張する。

Ⅲ層部分出土の遺物はいずれも弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。

以上、SC-670出土遺物は、中期後葉のものと後期前葉のものがある。上部のⅢ層出土遺物も同様であり、SC-670が廃棄され埋没する時期は、弥生後期前葉と考えられる。

SC-689

B区南端のDI・DJ-31区で、南西から北東にかけて直線的に約2.4mのび、北東端で南東方向にわずかに屈曲する掘り形を検出した。方形または長方形の竪穴式住居跡と考え、SC-689とした(図118)。深さは13cm。南に隣接する14次調査区へのびるが、関連する遺構は確認されていない。SK-693・713・751、SP-680・682・688・702・736に切られ、SK-690・SC-738を切る。

床面はほとんど残存しておらず、主柱穴と考えられる柱穴は検出できていない。

埋土は暗褐色シルトで、灰白色砂質土が混じる。親指大の円礫を含む。

壺から散発的に弥生土器壺・壺胴部小片・細片が20点以上出土している。この他、外面に横方向にヘラミガキを施し、内面に刷毛目調整を施す壺の胴部破片がある。これらは、いずれも小片であるが、弥生中期～後期の遺物と考えられる。

以上の出土遺物と切り合い関係から、SC-689は弥生中期末～後期初頭の竪穴式住居跡である可能性が高い。

SC-729

B区南端のDI-31区に位置する。擾乱をはさみながら、北東から南東にかけて、ほぼ直線的に約1.4mのびる掘り形ラインを確認できた。周辺の遺構から切り取られるが、方形の竪穴式住居跡と考えた(図119)。

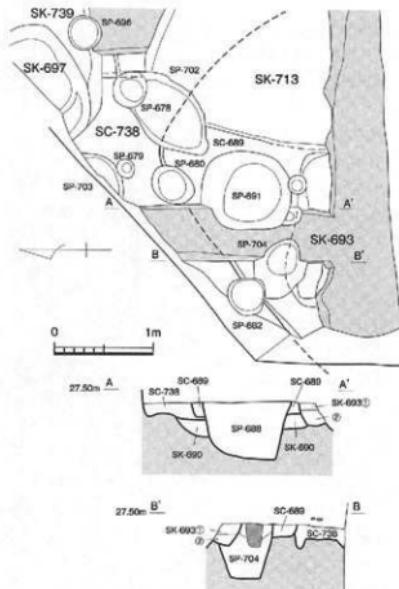


図118 B区 SC-689・738遺構実測図(縮尺1/50)

深さ12cm。SK-713・SB-740、SP-677・678・702・709に切られ、SC-730を切る。また、SC-670との切り合い関係は不明である。

床面はほとんど残存しておらず、埋土は、径2～3mmの砂礫が混じる暗褐色砂質土である。径1cmほどの丸い明黄褐色砂質土塊が含まれる。

SC-729の埋土から出土した遺物は、いずれも小片である(図120-1～3)。1は口縁上面が内湾する壺の口縁部破片で、弥生中期後葉に特徴的なものである。2は高坏の脚部破片である。外面にはヘラ状工具による沈線が2条施される柱状の脚であり、弥生中期中葉～後期前葉の時間幅で捉えられる。3は古代の土師器皿の底部破片である。SC-729上面のⅢ層中からは古代の遺物が出土しているので、上部遺構からの混入品と考えた。この他、弥生土器壺・壺胴部片が10点出土している。胴部破片の多くは、外面に刷毛目調整を施した壺や、外面にナデ調整を施して内面に刷毛目調整した壺など弥生中期～後期の特徴をもつ。

出土遺物と切り合
い関係から、SC-729
は弥生後期前葉の堅
穴式住居跡と判断し
た。

SC-730

B区南端部のDI-31区で、南北に
約50cmのびる掘り形
ラインを検出した。
堅穴式住居跡と考え
て、SC-730とした
(図121)。深さは最
深部で約3cm。周辺
の造構に切られ、壁
面のごく一部と床面
が残っているにすぎ
ない。SC-729、SK-
739、SP-698に切ら
れ、SC-738を切る。

主柱穴は確認でき
ていない。床面の下
には暗褐色砂質土が
斑状に混じる灰色砂
質土層が観察でき
た。貼り床部分と考
えられる。

埋土は、暗褐色砂
質土で、直径2~3mm
の砂礫や小指先大の
円礫が混じる。

埋土から、小指先
大の炭化物片と弥生
土器片2点が出土し
ている。弥生土器片

の1点(図120-6)は、壺の口縁部破片で、端部を上
方に捕み上げる。弥生中期後葉～後期前葉に比定でき
る。他の1点は、外面に横方向のヘラミガキを施した
弥生土器壺胴部片である。また、貼り床部分からは、
弥生土器壺・壺胴部小片4点が出土している(図120-
5)。壺の肩部破片で、内面には指頭痕が残る。小片
であり、明確な時期は比定できないが、弥生中期後葉
～後期の時期幅に収まるものと考える。

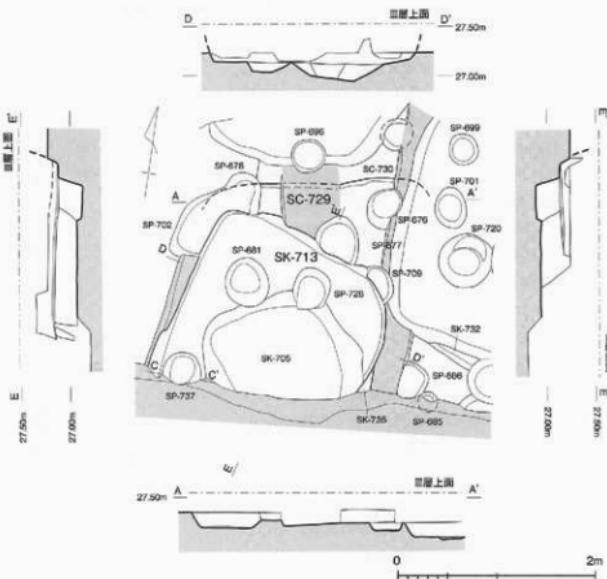


図119 B区 SC-729、SK-713遺構実測図(縮尺1/50)

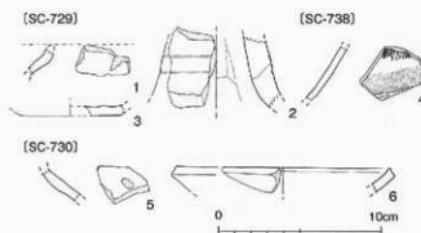


図120 B区 SC-729・SC-730・SC-738出土遺物実測図(縮尺1/3)

埋土および貼り床部分から出土した遺物は弥生中期
後葉～後期と考えられ、切り合い関係を含めて、
SC-730の時期は弥生後期前葉の堅穴式住居跡と判断
した。

SC-738

B区南端のDI-DJ-31区に位置する。調査時には
SC-687として調査していたが、整理作業の段階で遺構
番号の重複に気づき、SC-738とした(図118)。調査区

の西壁沿いである上に、搅乱が著しく、床面を検出したのみである。SK-690を切り、SC-689・729・730、SK-739、SP-678・680・702に切られる。埋土は黒褐色砂質土で、明黄褐色砂質土および灰白色のレンズ状ブロックが混じる。

床面で立柱痕跡をもつSP-703・SP-734が出土したが、SC-738に伴う柱穴からは明らかでない。調査区北西壁に沿って、床面には小さな凹凸が目立つ。貼り床を考えておく。

埋土からは、弥生土器の破片数点と、小形の土器品かと考えられる粘土塊1点が出土している。いずれも小片である。図化できたのは、高坏の坏部破片1点（図120-4）だけである。坏部中位の破片で、ヘラ状工具で短線文列を施す。弥生中期後葉に比定できる。この他、壺の胴部破片2点、壺の胴部破片1点がある。壺の1点は、逆L字形に屈折する壺の口縁部破片である。また、壺の胴部には、外面にヘラミガキを施した破片などが見られる。

以上の出土遺物と切り合い関係から、SC-738は弥生中期後葉の堅穴式住居跡と考えた。

SC-741

B区北半部のDG-38区の調査区東壁際で緩やかにカーブする掘り形を確認した。壁の立ち上がりが急で、後述するように、埋土①層がほぼ水平に埋積しているので、堅穴式住居跡の北西隅部分と考え、SC-741とした（図113）。ただし、土壤である可能性も残る。深さは検出面から22cmを測る。

埋土は灰白砂質土と暗褐色砂質土が混ざる①層である。②・③層は掘り形地業部分と考えた。②層は明黄褐色砂質土で、暗褐色シルトの丸いブロックが混じる。③層は暗灰シルトで、明黄褐色砂質シルトのブロックが混じる。

遺物は出土していない。

SC-741の埋土は、周囲に営まれたSC-605・606・747・748とは異なり、灰白色砂質土が混じり、全体としてやや白っぽい土色で、埋積時期の違いを示している。周囲の調査地点でも同様な埋土の特徴をもつ遺構

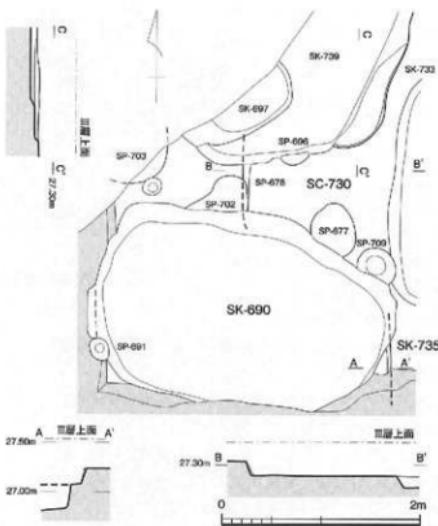


図121 B区SC-730・SK-735遺構実測図（縮尺1/50）

は発見されていない。もっとも類似するのは、A区で出土したSR-400最上部を埋める灰茶色系の土層のSR-400①層である。SR-400は、B区北側にものびていると考えられ、SC-741の埋土にSR-400①層が混じり込んだ可能性が高い。SR-400①層は古代に埋積するので、SC-741は古代の遺構と考えておく。

SC-747

B区北半部のDH-38区に位置する。周囲を擾乱で破壊され、島状に残っているにすぎない。小型の隅丸方形の堅穴式住居と考えられる（図113）。調査段階ではSC-606と一連の遺構と考えていたが、SC-606との床面のレベル差が8cm近くあり、別の遺構と考えて、SC-747とした。

床面はほぼ平坦である。床面では、SP-612・613・614・615が出土した。SP-612・613は立柱痕跡をもち、配置関係からもSC-747の主柱穴の可能性もあるが、確定できなかった。

SP-612は、径38~42cm、深さ10cmの円形の掘り形をもつ。径10cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色

砂質シルトに灰色砂粒あるいは小礫を少量含む。そのため、①層よりやや白っぽい色調をおびる。遺物は出土していない。

SP-613は、長径34cm、短径29cm、深さ10cmの楕円形の掘り形をもつ。径18cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は黒褐色シルト。掘り形埋土の②層は、砂礫が少量混じる黒褐色砂質シルトである。遺物は出土していない。

SC-747埋土は、やや茶色みをおびた黒褐色砂質シルトで、SC-606と共通した土質である。

出土遺物がなく時期を特定することは難しいが、配置関係と、SC-606と共通した埋土をもつことから、古墳時代の竪穴式住居と考えておく。

SC-748

B区北端のDG-38区で、方形あるいは長方形と考えられる土壙あるいは竪穴式住居跡の隅部分を検出した。調査段階では、SC-606と一連の遺構の可能性を考えていたが、SC-696との床面差が10cm、SC-747とは18cmの差がある。別遺構と考え、SC-748とした(図113)。

埋土は、やや茶色みをおびた黒褐色砂質シルトであり、SC-606やSC-747と共通する。

遺物は出土していない。

前述したSC-747と同じく、時期は特定でない。配置関係と埋土の特徴から、古墳時代の竪穴式住居跡と考えておく。

SC-750

整理作業の段階で、B区南端部のDH-DI-31区で出土した立柱痕跡をもつSP-714とSP-720を主柱穴とする2本柱構造の竪穴式住居跡を復元し、SC-750とした(図122)。周壁は確認できていない。

SP-714は、径55~57cm、深さ20cmの楕円形の掘り形をもつ。掘り形中央で径18cmの立柱痕跡を検出した。SK-711に切られる。柱抜き取り後の流入土である①層は、黒褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルトで、暗灰色の粗砂や砂礫、径3~4cm大

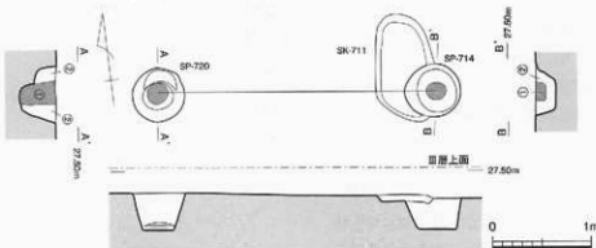


図122 B区SC-750遺構実測図(縮尺1/50)

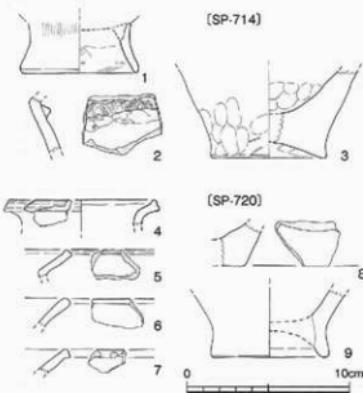


図123 B区SC-750出土遺物実測図1(縮尺1/3)

の円礫が多く混じる。

SP-720は、径55cm、深さ37cmの円形掘り形をもつ。掘り形北側にはテラス状の段をもつ。径20cmの立柱痕跡をもつ。SK-725を切り、SC-670・SP-687に切られる。立柱痕跡の①層は黒褐色砂質土。炭化物片・小石が混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質土に暗灰色の砂礫が多く混じる。

SP-714の①層からは、弥生土器の壺や鉢の破片が3点出土した。1点は壺あるいは鉢の底部片(図123-3)。上げ底で、弥生後期前葉に見られるものである。②層から脚台付鉢の脚台部の破片(図123-1)、壺の胴部破片2点、砂岩製の叩き石(図124-1)が出土している。この他、埋土から、壺の肩部片(図123-2)、壺の頸部片が出土。2は、頭部の付け根には指頭による

刻みが施された突帯が巡る。弥生中期後葉から後期前葉に見られるものである。

SP-720①・②層には炭化物片が大量に混じる。炭化物の多くは1辺5mmにもみたない小片だが、中には1辺1.5cmほどの木材片も見られる。また、①層からは弥生土器の壺や甕の胸部破片が出土。②層からは、甕の口縁部破片(図123-5)、壺の平底の破片(図123-8)、甕の上げ底の破片(図123-9)を含めて、10点の弥生土器が出土している。5の口縁端面に浅い擬凹線文が2条施される。いずれも弥生後期初頭～前葉に位置づけられる。加えて、SP-720の埋土として取り上げた遺物には、弥生土器片30点前後、砂岩の磨石(図125-1)、叩き石(図125-2)がある。弥生土器の中で、3点を陶化できた(図123-4・6・7)。4は甕の口縁部片で、端部を拡張し、口縁端面に凹線文を3条施す。弥生中期後葉。6は「く」字形口縁の甕で、口縁端部は面取りされている。弥生後期前葉。7も「く」字形口縁の甕で、口縁端部を下方に拡張する。6・7は弥生後期前葉に比定できる。この他、中期後葉の甕や後期の波状文

が施された大型壺の
破片がある。

SC-750は主柱穴のみの検出であるが、SP-714からは弥生後期前葉、SP-720からも後期前葉の遺物が出土している。弥生後期前葉の竪穴式住居跡と考えられる。

SC-751

整理作業の段階で、立柱痕跡をもち、弧を描いて配置される柱穴を確認できた。B区南西端部のDI-31区にあたる。

円形もしくは梢円形の竪穴式住居跡を推定して、SC-751とした。柱穴は、SP-680・728・734で、配置関係から6本柱構造の径5mほどの竪穴式住居跡と考える

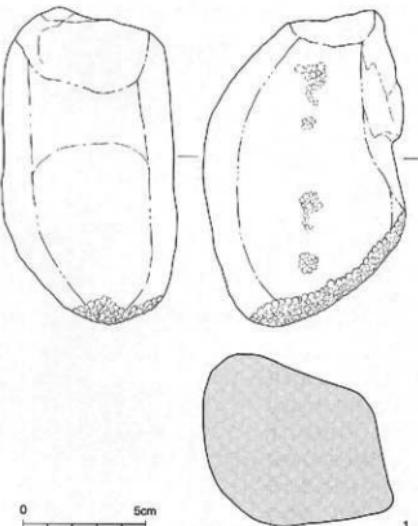


図124 B区SC-750出土遺物実測図2 (縮尺1/2)

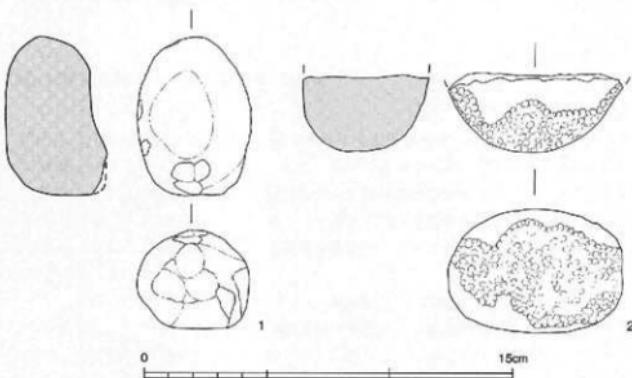


図125 B区SC-750出土遺物実測図3 (縮尺1/2)

(図126)。また、隣接する文京遺跡14次調査地点では関連する柱穴は確認されていない。

SP-680は、短径35cm、長径46cm、深さ21cmの梢円形

の掘り形をもつ。立柱痕跡は径15cmを測る。立柱痕跡にある①層は暗褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、暗褐色砂質土で、径1~2mmの灰白色砂礫が多量に混じる。

SP-728は、SK-713底面で検出し、南側はSK-705に切られてい。径37cm~43cm以上、深さ25cmの長円形の掘り形をもつ。掘り形中央よりやや東よりで径20cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡にある①層は暗褐色砂質シルトである。掘り形埋土の②層は、暗褐色砂質シルトで、明黄褐色砂質土の丸いブロックを混じる。

SP-734はB区の北西壁際で出土した。径62cm、深さ40cmの半円形の掘り形をもつ。径23cmの立柱痕跡を確認

できた。立柱痕跡にある①層は暗褐色シルトである。②~⑤層は掘り形埋土。②層は暗褐色シルト。径3~4cmの円窪が混じる。③層は暗褐色砂質土。④層は暗褐色砂質シルト。明黄褐色砂質土のレンズ状ブロックを混じる。⑤層は暗褐色砂質シルト。明黄褐色砂質土の不定形ブロックを混じる。

SP-680②層からは、弥生土器片4点(図127-3~5、7)と、外面に刷毛目調整を施した大型壺の胴部破片が1点、壺の胴部端片1点が出土している。3~5は「く」字形口縁の壺である。3は口縁端部を上方に摘みあげ、4は口縁部がわずかに内湾し、端部を丸くおさめる。5の口縁端部は面取りされている。7は鉢の口縁部と考えた。口縁端部を丸くおさめる。いずれも弥生中期後葉~後期前葉に比定できる。この他、埋土として一括して取り上げた遺物として、壺の口縁部(図

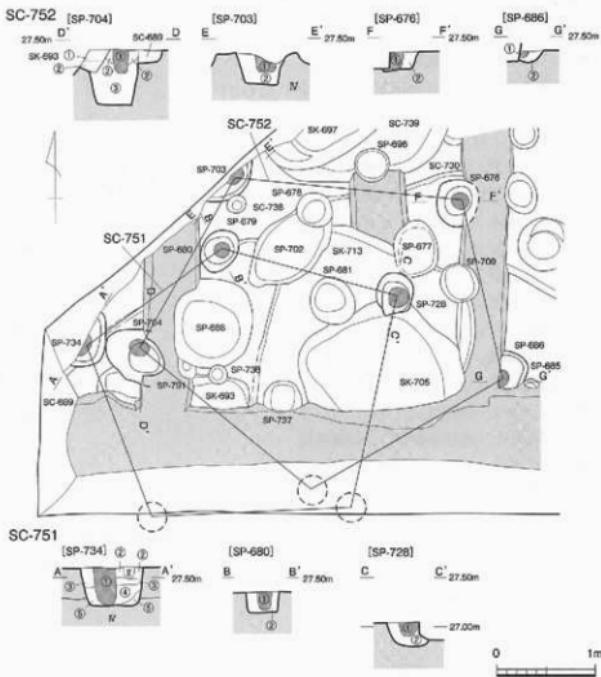


図126 B区SC-751・752遺構実測図(縮尺1/50)

127-6)、壺の肩部(図127-8)、壺の胴下半部(図127-9)の破片や、甕あるいは壺の胴部破片14点がある。6は逆L字形に屈折する口縁部である。8は壺の肩部破片で、外側には刷毛目工具の小口部を押捺した短筋線文が巡る。9は底部に近い胴下半部の破片である。いずれも、弥生中期後葉から後期前葉に位置づけられるものである。図示していない胴部破片は、明瞭に時期を決定できるものはない。

なお、調査段階で、SP-680埋土と下部の遺構の埋土の区別が明瞭ではなく、一部下部遺構にまで達している部分も見られた。したがって、埋土として取り上げた遺物には、本米下部の遺構に含まれていたものも一部含まれている可能性が高い。

こうした一部の混乱もあるが、SP-680から出土した遺物は、弥生中期後葉~後期前葉の時間幅で捉えるこ

とができる。

SP-728では、②層から弥生土器の壺や壺の肩部破片5点、その他の埋土出土の弥生土器の肩部破片5点がある。いずれも小片で、時期を明確に比定できるものはないが、外面にヘラミガキを施した壺肩部などがみられることから、少なくとも弥生中期～後期の時間幅で捉えることができる。

SP-734の埋土からは、3点の弥生土器片が出土している。図127-1は壺で、口縁端部を上下に拡張し、端面に沈線状の凹線文を1条ずつ2条施す。口縁部付け根には、爪で沈線状の直線が3条見られる。弥生後期初頭に比定できる。図127-2は壺の肩下部の破片。他の1点は、壺の肩部破片である。いずれも弥生中期後葉～後期前葉の時間幅で捉えられる。

以上、SC-751は柱穴だけの確認であるが、出土遺物と切り合い関係から、後期前葉の竪穴式住居跡と考えられる。

SC-752

整理作業の段階で、B区南端のDI-31区で、立柱痕跡をもつ柱穴が弧を描いて配置されていることを確認できた（図126）。位置的には、前述したSC-751と重複する。SP-676・686・703・704から構成され、本来は5～6本柱構造で、径4.5～5mの円形もしくは梢円形の竪穴式住居跡と考えられる。しかし、隣接する文京遺跡14次調査地点では、関連する竪穴式住居跡の柱穴は確認されていない。中央土壤はSK-713に削られている可能性が高い。

SP-676は、SC-729埋土上面で検出した柱穴である。柱穴の東側は搅乱で破壊されている。SC-729を切る。径47cm、深さ17cmの円形掘り形をもち、中央部で径15cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は暗褐色砂質土。掘り形埋土の②層は、暗褐色砂質土で、径2～3mmの灰白色砂礫が多く混じる。径2cm大の円窓も混じる。

SP-686は、径38cm、深さ12cmの円形あるいは隅丸方形の掘り形をもつ。南側・西側は搅乱で破壊されている。復元径15cmの立柱痕跡をもつ。立柱痕跡にあたる①層は暗褐色砂質シルト。炭化物片が少量混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色粘質土で、にぶい黄褐色砂質土が混じる。

SP-703は調査区壁際で出土した。推定径55cm、深さ30cmの掘り形をもち、径19cmの立柱痕跡を確認できた。

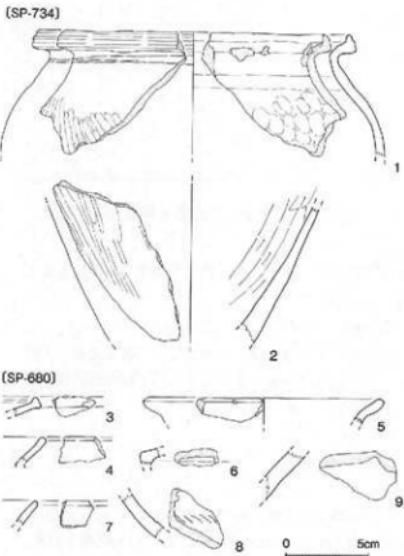


図127 B区SC-751出土遺物実測図（縮尺1/3）

立柱痕跡の①層は暗褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、褐色砂質土を主体としながら、灰白砂質土が混じる。

SP-704は短径55cm、長径65cm以上、深さ56cmの長円形の掘り形をもつ。東側は搅乱で破壊されている。SC-689を切り、SK-693に切られる。径16cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡の①層は暗褐色砂質土である。②・③層は掘り形埋土で、②層は径1～2mmの砂礫が混じる暗褐色砂質土、③層は径2mm前後の砂礫や径1cmの円窓を含む暗褐色砂質土である。③層は②層に比べて砂礫が多く混じる。

SP-676の②層からは、弥生中期～後期と考えられる壺・壺の肩部破片9点が出土している。埋土として一括して取り上げた遺物には、弥生土器5点がある（図128-1・2）。1は壺の口縁部破片で、端面に凹線文を2条施す。2は壺の口縁部破片で、端部を上方へ摘みあげた結果、端面中央が凹む。岡化していないものには、短斜線文を施した壺の肩部の破片、壺や壺の肩部破片がある。1・2ともに弥生中期後葉～後期初頭に

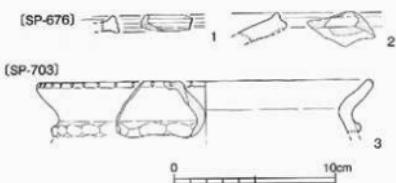


図128 B区SC-752出土遺物実測図(縮尺1/3)

比定され、図示していない破片も同様の時期幅で捉えることができる。

SP-686から遺物は出土していない。

SP-703の出土遺物は、埋土として一括して取り上げた。また、底面を掘りすぎたため、下部の遺構の遺物

が一部混じる。弥生土器の壺や甕の胴部片4点がある。外面にはヘラミガキが施され、弥生中期～後期のものである。下部遺構から混入した可能性のある壺や甕の小片3点がある。その中の1つである図128-3は、甕で、口縁端面に刻目を施し、口縁部の付け根には指頭を用いて刻目を施した突帯を張り付ける。弥生後期前葉に見られるものである。

SP-704の埋土からは、壺の胴部破片5点、甕の胴部破片9点、甕の底部破片1点が出土している。図示できるものはないが、壺の外面にはヘラミガキを施すものがみられることから、弥生中期～後期の時間幅で捉えることができる。

以上の柱穴内出土の遺物と、切り合ひ関係から、SC-752は弥生後期前葉の堅穴式住居跡と考えられる。

3 挖立柱建物

B区では5棟の掘立柱建物が出土している。埋土のものはSB-740・744・746・749で、SB-749は弥生時代、SB-740・744・746は古墳時代の掘立柱建物である。また、SB-743は埋土cに分類される遺構で、古代～中世の掘立柱建物である。

SB-740

B区南部のDH・DI-31・32区に位置する。SP-671・681・687・688・709・727・731で構成される梁間3間(梁間長3.86m)、桁行3間(桁行長4.3m)以上の掘立柱建物である(図129)。SP-689・SC-670・SK-725を切る。

建物の主軸は、座標北から西に約11度ふれる。建物隅にあたるSP-688・SP-687は、直径1m前後の掘り形で、立柱痕跡の直径は約30cmである。それ以外の柱穴は、直径50cm前後の掘り形で、直径20cm前後の立柱痕をもつ。

SP-671は、長径50cm、短径40cm、深さ12cmの梢円形の掘り形である。掘り形中央から南よりで、径17cmの立柱痕跡を確認した。SP-671は、SK-675・710を切っている。立柱痕跡である①層は黒褐色砂質シルトである。炭化物の小片が混じる。②・③層は掘り形埋土。②層は黒褐色砂質シルト。③層は黒褐色砂質シルトに、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

SP-681は、径22～25cm、深さ20cmの梢円形掘り形を

もつ。推定径18cmの立柱痕跡を確認した。SK-705を切る。立柱痕跡の①層は暗褐色砂質シルト。掘り形埋土の②層は、暗褐色砂質土で、上部を中心として径1～2mmの砂礫が混じる。

SP-687は、径1～1.1m、深さ35cmの梢円形の掘り形をもつ。掘り形中央で推定径35cmの立柱痕跡を確認できた(図版32-2)。埋土①層は柱の抜き取り痕跡、②～④層は掘り形埋土。①層は黒褐色砂質シルト。土層断面を観察すると、層下部に凹凸が見られるので、柱の抜き跡と考えた。②層は、黒褐色砂質シルトで、親指先大の暗灰色砂質シルトの小塊が多く混じる。③層は、黒褐色砂質シルトと暗灰色砂質土が、ほぼ水平に薄い粘状に重なり、小石が点々と混じる。④層は、にぶい黄褐色砂で基盤層の可能性もある。

SP-688は、下部にSK-690やSC-689があり、埋土が類似するため、一部掘りすぎてしまっている。西半部上半は擾乱溝で破壊されている。径80～90cm、深さ60cmの長梢円形の掘り形で、径30cmの立柱痕跡を確認できた(図版32-3)。埋土①層は柱抜き取り痕跡、②～⑤層は掘り形埋土である。①層は、暗褐色砂質シルトで、径1～2mmの砂礫や径2cm程度の円礫が混じる。②層は、暗褐色砂質土で、灰白色砂質土が互層状に混じる。径2～3mmの砂礫、径2cm大の円礫が混じる。③層は、②層に比して砂性が強く、砂礫はほとんど混

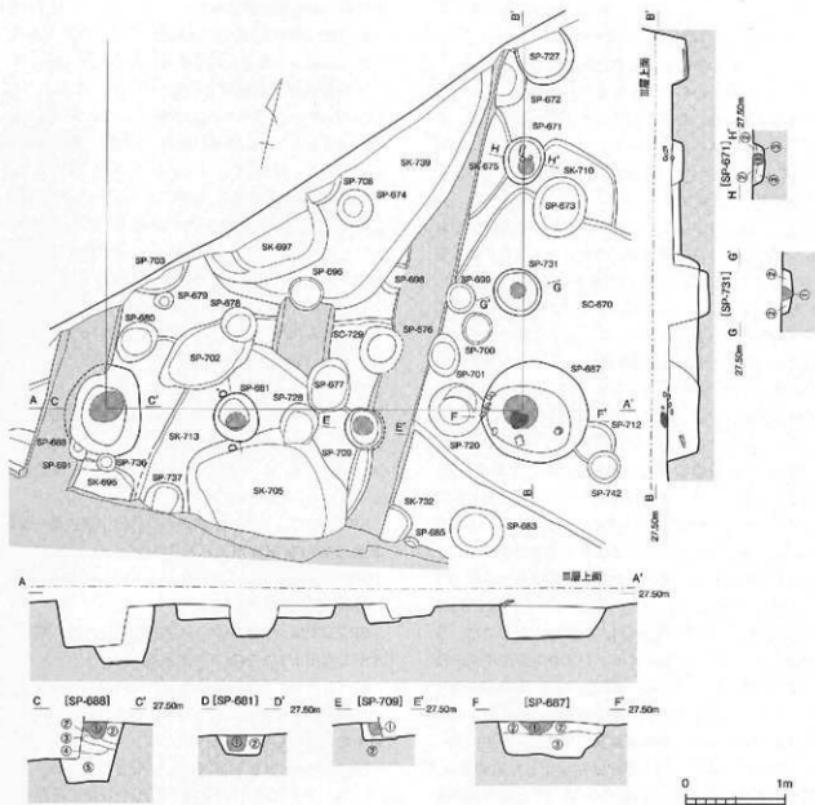


図129 B区 SB-740遺構実測図（縮尺1/50）

じらない。④層は、暗褐色砂質土を主体としながら、灰白色砂質土・黄褐色砂質土のレンズ状ブロックが混じる。⑤層は、暗褐色砂質土を主体としながら、灰白色、明黄褐色砂質土のレンズ状ブロック、小指先大の円錐が混じる。

SP-709は径40cm、深さ20cmの円形の掘り形をもつ。東半部上半は、搅乱溝で破壊されている。立柱痕跡の①層は、暗褐色砂質シルトで、復元径で15cm以上と考えられる。掘り形埋土の②層は、暗褐色砂質土で、径2mm～2cm大の円錐が混じる。

SP-727は、調査区北壁沿いで出土した。掘り形は、

径56cm、深さ16cmを測り、立柱痕跡は確認されていない。SP-672に切られている。埋土上部は黒褐色砂質シルト。埋土下部には、にぶい黄褐色砂質土が多く混じる。

SP-731は、SK-725床面で確認した。しかし、SC-670、SK-725の埋土と類似した埋土であったため、検出面を誤認したものと考える。径48cm、深さ12cmの円形掘り形をもち、その中央部で径14cmの柱痕跡を確認した。立柱痕跡である①層は黒褐色砂質シルト。先端部が尖っているので、杭状に加工した柱を打ち込んでいると考えられる。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質シルト

トで、径3~4cm大のにぶい黄褐色砂質土塊が多く混じり、円礫や小石がいくつか混じる。

以上の柱穴の多くから遺物が出土している。

SP-671の埋土からは、弥生土器の壺の底部、高环の円盤充填部1点、壺や壺細片3点が出土している。また、SP-671上面のⅢ層部分からは、「く」字形に屈折する口縁部をもつ壺（図130-1）が出土している。弥生後期中葉に比定できる。

SP-681の①層からは自然石が出土しているだけである。②層からは、口縁端面に凹線文が3条施される壺（図130-2）、壺あるいは鉢の口縁部の破片（図130-3）がある。2は弥生中期後葉、3は弥生中期後葉～後期前葉のものである。埋土として一括して取り上げた遺物にも、弥生土器の壺や壺の胴部片十数点がある。図130-4・5は、壺の胴部上半部の破片で、4の頸部外面付け根には、強い横ナテ調整が施されている。この他、炭化物が少量出土している。

SP-687の柱抜き取り後の流入層である①層からは、弥生土器の壺、壺、鉢の胴部破片が10点ほど出土している。しかし、時期を特定できるものはない。②層からは、弥生土器の小片が約50点と、土製品が出土している。その中には、斜め上方に直線的にのびる壺の口縁部破片（図130-6）、壺の平底の破片（図130-10）などがある。また、図130-13の土製品の表面には、草木類の茎の付着痕が見られる。いずれも弥生中期～後期に見られるものである。③層からは、十数点の小片とやや大きめの弥生土器の壺や壺胴部の破片が3個体分出土している。いずれも胴部であるが、弥生中期～後期のものである。掘り形内から出土した遺物には、壺の口縁部から胴部上半部（図130-9）、脚台状の上げ底の壺（図130-11）がある。とともに弥生中期後葉～後期初頭に見られるものである。この他、口縁端部を上方に摘みあげた弥生中期後葉の壺口縁部1点、十数点の弥生土器の壺や壺の胴部破片が出土している。壺や壺の胴部破片には、比較的大形の弥生中期後葉～後期前葉の壺の肩部破片が1点出土している。SP-687上面のⅢ層部分からは、弥生中期～後期の壺の頸部から肩部の破片が2点出土している（図130-7・8）。また、採集した土の中から、一辺約2~3cmの炭化物ブロックなどの炭化物片が出土している。

SP-688の柱抜き取り後の流入土である①層からは、弥生土器鉢の口縁部（図130-16）が出土している。弥生中期後葉～後期前葉に位置づけられる。この他、弥

生土器の壺や壺の胴部小片5点や、壺の頸部の比較的大形の破片がある。外面には縱方向にヘラミガキ調整、内面には刷毛目調整が施される。掘り形埋土からは、弥生中期後葉～後期前葉の壺の脚台状の底部片（図130-18）がある。図130-14は内傾する頸部に外反気味の口縁部がとりつく鉢で、弥生中期後葉～後期前葉に比定できる。図130-15は壺の口縁部破片。端部を欠損する口縁部は内済し、肩部には大きな張りはない。弥生中期後葉～後期初頭。図130-17は、高环の坏部破片で、外面に四凹線文を5条施し、その下部には刺突文が巡る。図130-19は、円盤充填タイプの高环である。図130-20は、弥生中期後葉～後期の高环の脚部破片で、端部を摘み出す。図130-1は赤色頁岩の剥片。他に、弥生土器の壺や壺の胴部細片が十数点出土している。また、⑤層中からは、弥生土器片2点とともに、外面に条痕調整の施された縄文土器の深鉢の胴部破片が1点出土している。炭化物の小片も出土している。なお、図130-4・9は、下部遺構のSK-690と接合関係にあることから、SK-690に本來伴うものと考える。

SP-709では、柱穴南半部から、弥生中期後葉～後期前葉の壺の底部片が1点出土している（図130-12）。上げ底の脚部片で、土器焼成もしくは二次焼成時の際に外表面が剥離している。

SP-727では、埋土中から弥生土器の壺や壺の胴部破片が2点出土しているだけである。

SP-731では、遺物は出土していない。

以上のように、各柱穴から出土した遺物は、弥生後期中葉までのものである。

SB-740の切り合い関係をみると、SC-689・729、SK-675・690・705・710を切ることから弥生後期前葉以降に比定できる。また、SB-740を構成する各柱穴から出土した遺物は、弥生後期中葉までのものに限られる。しかし、SB-740の柱間をみると、梁間ではSP-688・SP-681間1.35m、SP-681・SP-709間1.3m、SP-687・SP-709間1.6mを測る。桁行ではSP-671・SP-731間1.25m、SP-687・SP-731間1.25mである。これまで文京遺跡で確認されている弥生中期後葉～後期前葉と確実に比定できる掘立柱建物の柱間をみると、大型掘立柱建物では柱間は桁行約2.5m、梁間約2m、小型掘立柱建物では桁行2~5m、梁間2~2.5mであり、SB-740の柱間とは大きく異なる。また、弥生時代の梁間3間の掘立柱建物は出土していない。

そこで、文京遺跡内における古墳後期の掘立柱建物

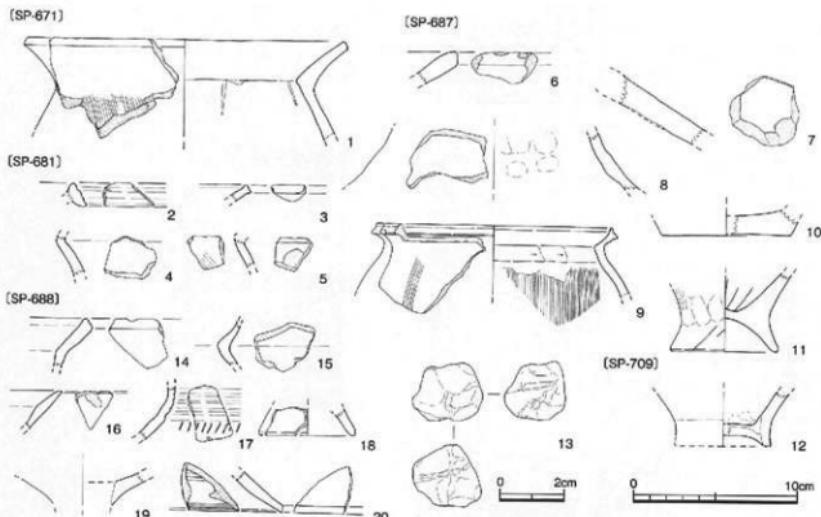


図130 B区SB-740出土遺物実測図1 (縮尺1/3・2/3)

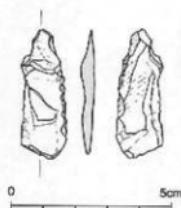


図131 B区SB-740出土遺物実測図2 (縮尺2/3)

の柱間間隔をみると、梁間1.25m～3.25m、桁行1.7～4.4mであり、梁間の柱間はSB-740と近い。梁間3間、桁間3間という建物構造に関しても、古墳後期に位置づけられる松山市筋途F遺跡、樽味立派遺跡などに類例がある。また、SB-740に確実に伴う遺物ではないが、SB-740上部にあたるⅢ層出土遺物を検討したところ、SP-688の上部にあたるDI-31-20区Ⅲ層上部で須恵器坏身（図176-24）が出土している。坏身はたちあがり部を欠損するが、受け部は上方方にわずかにのび、古墳後期に位置づけられる。

出土遺物は弥生時代のものばかりであるが、以上の点から、SB-740は古墳後期の掘立柱建物である可能性が高い。これまで概要報告では弥生中期後葉の建物と

していたが訂正し、本報告をもって正式報告とする。

SB-743

B区中央部のDH-36区に位置する。SP-632・634・635・636で構成される桁行1間（桁行長1.96m）×梁間1間（梁間長1.8m）の掘立柱建物である（図132）。各柱穴の底面には礎板石が据えられているが、立柱痕跡は確認されていない。

SP-632は、径22cm、深さ32cmの円形掘り形をもつ。底面には一辺24cm×20cmの長方形の花崗岩礎が据えられていた。埋土は灰褐色シルトである。

SP-634の東半分は擾乱で破壊されている。推定径35cm以上、深さ33cmの掘り形で、底面に一辺15cm四方の方形の硬質砂岩礎が据えられていた。埋土は、砂礫が多く混じる灰褐色シルトである。

SP-635の東半分は擾乱で破壊されている。推定径46cm以上、深さ35cmの長楕円形の掘り形をもち、底面には扁平な礎2枚重ねて礎板とされている。上部の根石は、長辺27cm、幅20cmの長方形花崗岩の割石。下部の根石は、長辺20cmの硬質砂岩礎である。埋土は灰褐色シルトで、砂礫を多く含む。

SP-636は、径40cm、深さ30cmの円形の掘り形をもつ。底面には2枚の礎板の石が重ねられている。上部の礎

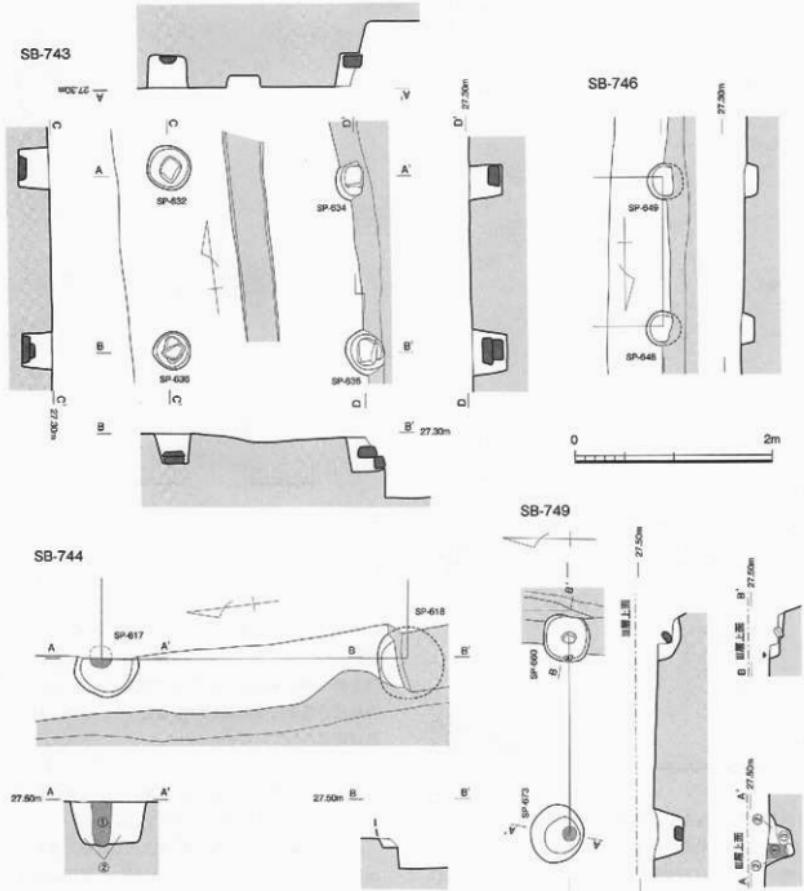


図132 B区 SB-743・744・746・749遺構実測図 (縮尺1/50)

板は、長辺30cm、幅14cmの不整形三角形の硬質砂岩円礫。下部の礎板は、長辺28cm、幅20cmの長楕円形の花崗岩円礫である。埋土は、灰褐色シルトで、砂礫を多く含む。

SP-634・635・636からは遺物は出土していない。遺物が出土しているのは、SP-632のみである。弥生土器の壺と甕の胴部破片が各1点ずつと、近世の丸瓦胸部

片1点がある。SP-632はI層直下で検出したので、瓦は混入品である可能性も残るが、柱穴の埋土がいずれも灰褐色であることから、SB-743は近世の掘立柱建物と考えておく。

SB-744

B区中央部のDG-35・36区東壁近くで立柱痕跡をもつSP-617・618が出土した。西側は擾乱部分で掘立柱

建物を構成する柱穴は確認されていないが、立柱痕跡をもつことから掘立柱建物と考えた（図132）。桁行1間（桁行長3.13m）を測る。

SP-617は、B区東壁沿いにあり、東半部は調査区外へ続く。径55cm、深さ44cmの半円形の掘り形で、径20cmの立柱痕跡を確認できた。立柱痕跡である①層は、黒褐色砂質土で、小石がごく少量混じる。掘り形埋土の②層は、黒褐色砂質土で、小石が多く混じる。

SP-618は南西部を擾乱で破壊されている。深さ8cmの掘り形をもち、埋土は黒褐色砂質シルト混じりの砂質土で、小石が多く混じる。

SP-617・618からは、遺物は出土していない。

出土遺物がないが、黒褐色系の埋土であり、文京遺跡全域での大別層序のⅢ層に類似すること、周辺では古墳時代の遺構が多いことから、SB-744は弥生時代～古墳時代の掘立柱建物である可能性が高い。

SB-746

B区中央部のDG-34区の東壁沿いで、SP-648・649が出土した。立柱痕跡は確認できていないが、SP-648・649と、東側の調査区外に掘立柱建物を構成する柱穴を想定し、掘立柱建物を復元した（図132）。SP-648・649間は1.5mを測る。

SP-648は、北西部を欠く。径35cm、深さ34cmの円形掘り形をもつ。埋土は、黒褐色砂質土で、小石や粗砂が多く混じる。

SP-649は、西半部を擾乱で破壊されている。径35cm、深さ14cmの円形掘り形をもつ。埋土は、茶色をおびた黒褐色砂質土で、小石や粗砂が多く混じる。

SP-648・649ともに、遺物は出土していない。

時期決定は困難であるが、大別層位であるⅢ層と共通する黒褐色系の埋土をもち、周辺に古墳時代の遺構が分布することから、古墳時代の掘立柱建物である可能性を考えておく。

SB-749

B区南端のDH-32区で、立柱痕跡をもつSP-673が出土している。周辺では、底面に礎板と考えられる扁平な川原石が据えられたSP-660があり、この2個の柱穴と、北側のSD-601で破壊された柱穴を想定し、掘立柱建物を復元した（図132）。SP-660・673間は2mを測る。

なお、竪穴式住居の主柱穴の可能性も考えたが、2本柱構造のSC-670と比べると、柱間隔が短いので、掘立柱建物を構成する柱穴と判断した。

SP-660は、東半部が擾乱で破壊されている。SK-695を切る。一辺45cm、深さ18cmの隅丸方形状の掘り形をもつ。底面には、長辺14cm、最大幅10cm、厚さ3cm前後の扁平な川原石（図134）が据えられていた。埋土は、黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土の径1cm大の塊が少量混じる。

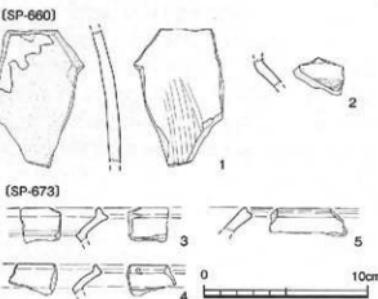


図133 B区 SB-749出土遺物実測図1（縮尺1/3）

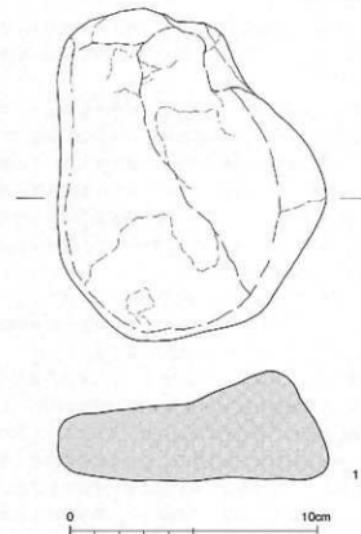


図134 B区 SB-749出土遺物実測図2（縮尺1/2）

SP-673は、SK-710・SC-670を切る。径55~58cm、深さ28cmの楕円形の掘り形をもち、中央から南よりで径15~16cmの立柱痕跡を確認した。立柱痕跡の①層は、黒褐色砂質土に灰白色の粗砂が混じる。①層の下部には長辺13cm、幅8cmの円環があり、礎板の可能性もある。②・③層は掘り形埋土。②層は、黒褐色砂質土で、にぶい黄褐色砂質土が縦状に混じる。③層は、にぶい黄褐色砂質土で、黒褐色砂質土が多く混じる。

SP-660の埋土からは、2点の弥生土器が出土している（図133-1・2）。1は壺の胴部上部である。2は壺の頸部から肩部片である。その他に、SP-660上面のⅣ層部分から、弥生土器壺の小片が出土している。いずれも、弥生中期後葉～後期初頭の時間幅で捉えられる。

SP-673の掘り形埋土の②・③層から、弥生土器の甕の口縁部片（図133-3~5）が出土している。3・4は口縁端部を上方に摘みあげ、3は口縁部と胴部上部との境は大きく屈曲し、内面には沈線をもつ。5は口縁端面に凹線文が1条巡る。いずれも弥生中期後葉～後期初頭に比定できる。他に、埋土から上げ底の壺の底部小片が1点と弥生土器片が10点、②・③層から弥生土器の壺や甕の小片が6点、②・③層から弥生土器の壺や甕の胴部破片が8点出土している。

出土遺物は弥生中期後葉～後期初頭のものであるが、SP-660が後期前葉のSK-695を切ることから、SB-749は弥生後期中葉以降の掘立柱建物と考える。

4 溝

B区では、6条の溝が出土している。SD-603・610は埋土a、SD-601・602・604・627は埋土cの造構である。

SD-601

B区南半部のDH-32・33区に位置する東西方向にのびる溝である（図135）。SK-662・SK-663・SP-665を切る。

基本層のⅣ層である黄褐色細砂層を切り込み、最大幅3.4m、深さは43cmを測るが、SD-601の南西部では、埋土の異なる部分を確認できた。調査時には、この部分をSD-650として調査したが、調査の最終段階で調査区壁面を精査したところ、幅1m前後の溝が3条重複していることを確認できた。そこで、SD-650も含めて、SD-601として報告する。

埋土は、オリーブ灰色の砂質シルトを主体とする。

埋土中から弥生時代～古代の土器、中世～近世陶磁器、近現代の瓦などが出土している。

図136-1~6は弥生土器である。1は複合口縁壺の口縁部から頸部の破片で、全体に表面の荒れが著しい。口縁部外面に2条の沈線を巡らせ、直下に5条1単位でヘラ描き斜行文を施す。2~4は壺の胴部下半から底部の破片である。4の底部はやや凸レンズ状に張る。5は鉢の脚部破片。6は高杯。端部を上方に拡張する脚部破片である。1~6は弥生時代中期後葉～後期の時間幅で捉えられる。7は近世の陶器製の人形

である。中空で、内面には型への押し当て痕が明瞭に残る。

図137-1・8は砂岩の叩き石。2、5は堆積岩を用いた砥石、4、6は砂岩の砥石、7は堆積岩製の砥石である。3は緑色片岩の剥片である。

図138-1は凹基式のサスカイト製石錐。2は赤色頁岩、3はサスカイトの剥片である。

この他、寛永通宝（図137-9）と鉄滓がある。鉄滓片は、埋土から多數出土しており、出土鉄滓量は約45kgに及ぶ。そのうち3点を提示している（図版53）。図版53-①・②は椀状鉄滓である。重量は、①が378g、②は425g、③は235gである。溝の堆積状況から、鉄滓の時期を決定するのは難しいが、周辺の文京遺跡13次調査・20次調査では、古墳後期の鍛冶炉やワゴの羽口、椀状鉄滓が出土しており、SD-601出土の鉄滓との関連性が考えられる。

また、埋土下部から幅4cm前後の炭化した木材片が少量出土している。

SD-601から出土した遺物には、近世に下るものも混じる。SD-601は最低3条の溝が重複したものであり、近世まで同じ場所に何度も溝がつくられ続けたと考えられる。

SD-602

B区南部のDG・DH-33区に位置する東西方向にのびる溝である（図139）。SK-647と切り合う。調査区

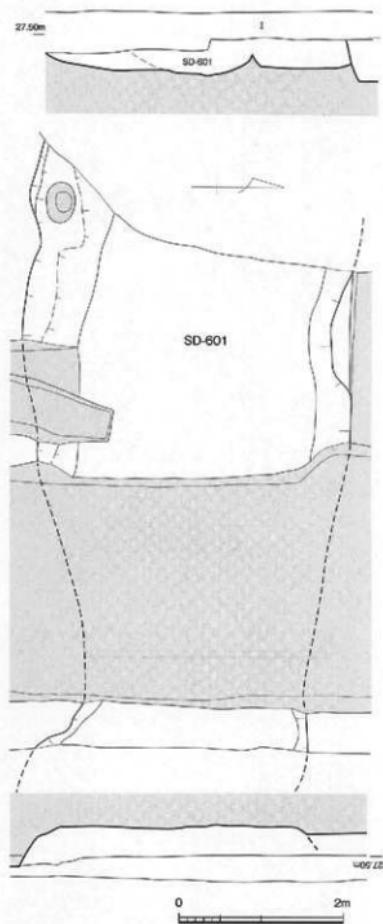


図135 B区 SD-601遺構実測図（縮尺1/60）

の東西で幅約1.1m、中央部分で約1.5mを測る。断面は逆台形で、底面には小さな凹凸が見られる。深さは約40cmを測る。

埋土は、オリーブ灰色の砂質シルトを主体とし、南側のSD-601の埋土と共に通する。

埋土から古代～近世の遺物が散発的に出土している

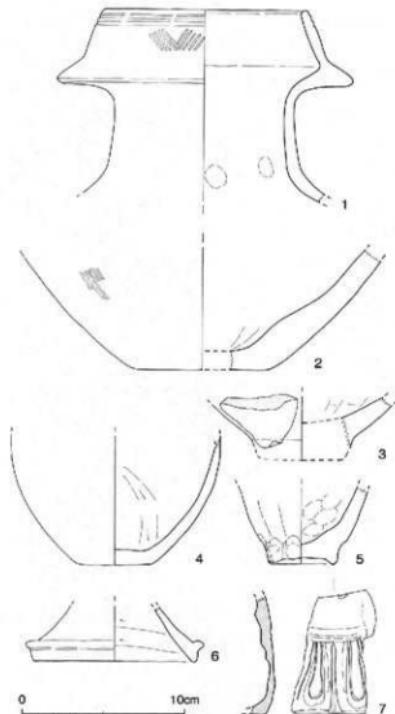


図136 B区 SD-601出土遺物実測図1（縮尺1/3）

(図140-1～6)。1は須恵器壺蓋の天井部破片で、外面には回転ヘラ削り調整が施され、古墳後期に比定できる。2・3は輪高台をもつ土師器塊である。4は須恵質土器の底部破片で、底部外面には糸切り痕が見られる。11世紀前半以降のものである。5・6は古墳後期の須恵器の壺または壺の肩部破片である。他に、古代の須恵質土器片2点、土師質土器片7点、近世陶磁器碗の破片1点がある。

出土遺物の多くは11世紀代までの時間幅で捉えられるが、近世陶磁器片も出土しているので、SD-601は近世の構と考えられる。

SD-603

B区北端のDG・DH-39区に位置する(図141、図版27)。SD-604・SD-610を切っている。北半部分は攪乱